

DDFF学園生活

arutairu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中間テストも無事終わり、くつろいでいた彼らに待つものとは!?

(注意) キャラ崩壊注意!!・会話文主体

修学旅行編から見た人は第一話から、十二話からはグラウンドワン編、十七話から普通の学園生活となっています。

目次

修学旅行編

- 第一話 夢とキャラ崩壊の物語 1
- 第二話 ジタン「帰っていいか？」 8
- 第三話 カオス校長「ぶるあああああ
ああ!!」 16
- 第四話 王様ゲームは二度とやらない
…… 21
- 第五話 ガブラス「私は帰ってきたー
ー」 28
- 第六話 ティファ「フリオの事好きナ

んでしょ？」ライトニング「う、うん」

35

- 第七話 ティーダ「…我が人生に…一
片の悔い無し…」 43
- 第八話 ライトニング「わたしのくお
はかのくまーえでく♪」 50
- 第九話 枕投げは二度とやらない…
58
- 第十話 ティファ「いや、だからバツ
…」 67
- 第十一話 ライトニング「わ、私も、フ
リオの事…」 76
- グラウンドワン編

第十二話 ユウナ「サンバのリズム!？」

87

「!?」
家庭科編
120

第十三話 クラウド「どうしてこう

なった…」ティファ「パート1」

128 第十七話 バッツ「家庭科、か…」

96 第十四話 クラウド「どうしてこう

なった…」ティファ「パート2」

第十八話 バッツ「ヒヤッハー!!切り
刻むぜえー!!」
136

104 第十五話 クラウド「どうしてこう

なった…」ティファ「パート3」

第十九話 バッツ「てめえ!裏切りや
がったな!？」
144

113 第十六話 クラウド「どうしてこう

なった…」ティファ「パート3」

第二十話 エクスデス先生「大変です
ぞ!先生方!!カメエー!ー!ー!!」

154 第二十一話 ジタン「ひっこんでろ!」

154 第二十一話 ジタン「ひっこんでろ!」

154 第二十一話 ジタン「ひっこんでろ!」

ゲシツ クジャ先生「あうん！」

162

第二十二話 コスモス先生「あ、ゴキブ

リ」—— 171

一学期末テスト編

第二十三話 ジタン「テスト一週間前

だ!!………で？」—— 182

第二十四話 クラウド「ティファ、貧乏

ゆすりやめろ」—— 191

第二十五話 ジタン（ユウナ）「だ、大

丈夫だぜ！このやろう!!」—— 200

第二十六話 ジタン「目があああああ

ああ!!」—— 208

第二十七話 ティナ「嘘だ!!」

218

第二十八話 バツツ「zzz…」ジタ

ン「zzz…」—— 228

第二十九話 スコール「出ぎやはああ

ああああああ!!」—— 239

第三十話 女の人「ブチ切れましたわ

あ!!」—— 247

第三十一話 皇帝先生「だから皇ちゃ

んって呼ぶな!!」—— 259

第三十二話 ジタン「スニーキング

ミッション開始だ!!」—— 268

第三十三話 女子「えっと…その、私

| | | | | | |
|-----------------|------------------|-----|---------------|--------------|-----|
| ………隙間と言います……… | —— | 278 | ………隙間と言います……… | —— | 278 |
| 第三十四話 | w o o 1 「これより今回の | | 第四十話 | 全員「………」 | 358 |
| テスト対策講習会を行う！」 | —— | 292 | 第四十一話 | クラウド「………」 | 346 |
| 第三十五話 | ジタン「今回はギャグ無 | | れは!？」 | —— | 372 |
| しで話の進行のみ、か」 | —— | 302 | 第四十二話 | クラウド「が……く……そ | |
| 第三十六話 | アルティミシア先生「ね | | ………」 | —— | 387 |
| えこれテスト中だよね? ねえ」 | —— | 309 | 第四十三話 | バツツ「へ!？」 | 401 |
| 第三十七話 | 隙間さん「……次回は…… | | 第四十四話 | 「もうお婿に行けない | |
| 私が……」ボソツ | —— | 321 | ………」 | —— | 411 |
| 隙間さん編 | | | 第四十五話 | ティナ「プールから上 | |
| 第三十八話 | ティファ「新たな仲間の | | がったら殺す……」ボソツ | —— | 423 |
| 誕生ね!!」 | —— | 327 | 第四十六話 | ティファ「スキ、キライ、 | |
| 第三十九話 | 隙間さん「イカ臭いって | | スキ、キライ……」 | —— | 437 |

修学旅行編

第一話 夢とキヤラ崩壊の物語

中間テストも無事(?)に終わり早二日が過ぎ、新たな一日がはじまろうとしていた。

ティナ「大変。遅刻遅刻！今日テスト返されるのに……ひやう!?」ドカツ

イケメン「いてて、大丈夫かい？君どこか怪我はしてない？」

ティナ「えっ・あ、はい大丈夫です。こちらこそすみません。(すごくカツコ良い人だなあ)」

イケメン「いや、もし何かあったら大変だ。僕が学校まで送ってあげるよ」ヒョイ

ティナ「ひやつそ・そんなお姫様だっこだなんて……は？ずかしいです……」

イケメン「何を言ってるんだい？君は僕のお姫様だろ？」

ティナ「えっ」

イケメン「さあ、ティナ早く起きるんだ。」

ティナ「ふえっ!?!」

オニオンナイト「ほらティナ、早くおきなよ。」

ティナ「……………」

ティナ「なんだ、夢だったんだ…」

オニオンナイト「ん？どうかした？」

ティナ「ううん、なんでもない。(さっきの天才オニオンナイトに少し似てたかも。)」

皇帝「私の授業で居眠りとは、良い身分だな。」

ティナ「せ、先生！」

皇帝「フン、まあいいだろう。ほらたまねぎ、この問題を解け。」

オニオンナイト「えっ僕ですか!?!、はい。」

ティナ(オニオンナイトにお姫様だっこされてもいいかも…／＼)

オニオンナイト(さっきからすごいティナの視線を感じる…)

一時限目終了

バツツ「よし、うっせえ英語の授業も終わったし、おーいジタン野球しようぜ。」

ジタン「お、いいねえ。ヴァンもやるか？」

ヴァン「おう。もちろん」

ジタン「あれ、でもボールが無えなあ。ヴァンもってるか？」

ヴァン「もって無いけど…あれ、ボールじゃね？」

バツツ「お、ほんとだ。すげえめっちゃはねるこのボール。よし じゃあ投げるぞ」

W O I 「おいお前らそれシャントット先生じゃないか!!」
バツツ 「え・・・」

カキーーーーーーーーーーーーーーーーン!!!

シャントット 「えー，では次の問題をそうですわね・・・セシルやってごらん下さい。
セシル 「せ，先生あの彼らは・・・」

ヴァン 「」

バツツ 「」

ジタン 「」

シャントット 「自業自得ですわ。それともあなたも彼らと同じように黒こげにされた後にブリザガで氷漬けにされたいんですの？」

セシル 「い：：いえ：：」

シャントット 「わかつたらさっさと前に出てこの問題を解いてくださいな。」

二時限目終了

クラウド 「さて，二時間も終わった訳だが・・・」

ジタン 「おっいバツツちゃんばらしようぜ！」

バツツ「よし！受けて立つぜ！どっからでもかかってきやがれ!!」
ヴァン「おーい俺も入れろって」

ティーダ「おれもやりたいっす！」

クラウド「……あいつらに学習能力はあるのか……」

フリオ「ま・まあ楽しそうだし良いんじゃないか？」

スコール「俺の邪魔さえしなければ問題ない。」

w o l「おいお前ら！そんなに騒ぐな！備品が壊れたらどうするんだ！」

ライトニング「貴様らそんなにはしやぎたいなら外でやれ。ここは皆に迷惑だ。」

フリオ「w o lもライトも頑張るな。」

スコール「まああいつらに言ったところで馬の耳に念仏だな。」

クラウド「ところでスコール三時間目の教科はなんだ？」

スコール「三時間目？何を言ってるんだ？」

フリオ「今日は修学旅行前だから早めに帰るんだろ」

ティファ「えっクラウドしらなかったの？」

スコール（お前もさつきユウナに聞いて驚いていたじゃないか……）

ユウナ「もう明日から修学旅行ですかあ……楽しみですね。」

クラウド「興味無いね」

フリオ「うそつけ」

スクール「さっきの授業の時ずっとしおり見ながら何か考え事してたじゃないか。」

クラウド「あ・・あれは…」

ティファ「何考えてたのよー教えれないことなの？」

クラウド「ち…ちg」

ピーンポーンパーンポーン

フリオ「校内放送？」

校内放送「今日、カオス校長の机にうんこをした人がいます。心当たりのある生徒は職員室まで。」

ユウナ「誰がそんな事を…」

ティファ「あ、もしかしてクラウドこの事zy」

クラウド「違うっ!!」

ティファ「あやしいな」

ピーンポーンパーンポーン

フリオ「また校内放送？」

校内放送「えー、先ほどのうんこの件ですが・いま泣きながら校長が職員室に…」

一同「校長どうした!?!」

スコール（こんなのが校長の学校で大丈夫なのか？）

ジタン「そっか明日から修学旅行かーお前らなにもっていくの？」

wol「光の心」

フリオ「のぼら」

オニオンナイト「まんが」

セシル「兄さん

の写真」

バツツ「エロ本とpsp」

ティナ「しおりに書いてあるもの、かな、かな？」

クラウド「興味無いね」

ティファ「色々」

スコール「最低限のものだ。」

ティエダ「ボールつスカね〜」

ユウナ「召喚獣です」

ヴァン「飛空艇」

ライトニング「しおりに書いてあるものだ」

ジタン（……………）

ジタン「修学旅行大丈夫かな・・・」
続くですとも

第二話 ジタン「帰っていいか？」

修学旅行当日 ・ 教室

ジタン「う、嘘だろ…？」

バツツ「いきなりかよ！」

黒板 『今日朝持ち物検査』

ティーダ「ん？どしたっスか？二人とも」

ジタン「どうしたじゃねえよこれ見てみるよ!!」

ティーダ「なにになに？えーともち・も・のけん・さ？」

バツツ「そうだよ」

ティーダ「……………」

ジタン「おいどうした？」

ティーダ「まずいつスやばいつス一大事っス!!これは皆に知らせないといけないっス

！

バツツ「あ・ああそうだな。とりあえず他になんか持ってきてそうな奴らに教えてお

くか」

教室前 廊下

ヴァン「え？持ち物検査？」

ジタン「そうなんだよ何かいきなりやるらしくてさ…」

ティーダ「だから没収される前になんとかしようって話っス！」

バツツ「そういえば皆なに持ってたんだ？」

バツツ「PSPとVitaは全員でティーダはボールも。そして全員が…」

バツツ、ティーダ、ヴァン、ジタン「エロ本」

ジタン「まずいな…」

ティーダ「どうするっスか？」

ヴァン「賢そうな奴に聞いてみたらどうだ？」

……

ジタン「それ、いいかもしれねえな。」

バツツ「そうだな。ここに居る俺たち全員偏差値30代の集まりみたいなもんだしな。」

ヴァン「でも、誰にきくんだ？」

ティーダ「そりやあもうあいつしかいないっすよ！」

woo「それで、私にどうすればいいか聞きに来た、と言う訳か？」

ヴァン「そうだよ。」

ジタン「たのむ！エロ本持ってきてるのなんかバレたりしたら俺たちに明日は無いんだ！」

バツツ「仲間の頼みだろうか!!」

woo「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ティーダ「やっぱり、だめっスカね・・・？」

woo「・・・・・・・・・・ぞ」

ジタン「え？」

woo「今回だけでぞ。次は無いからな。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

バツツ「あ……」

バツツ「……ありがとう！やっぱり君は最高の友達だよ!!!」

ヴァン「ほんつとにありがとう!!!」

ジタン「借りはいつか返すからな！」

ティーダ「ほんとうにありがとうっス！」

woo「礼は要らない。ではその不要物を渡してくれ。」

ティーダ「あいよっス！」

woo「これで全員か？」

ジタン「ああ、頼んだぜ！」

教室

バツツ「それにしても…あいつどこに隠したんだろな。

ジタン「ああ。あいつの事だから大丈夫と思うけど…」

コスモス「それでは持ち物検査を始めます。まず出席番号一番のwoo君から」

woo「ああ、頼んだ」

.....

コスモス「まあしっかり整理されていますね。それに不要物もはいつていませんし、

完璧ですね。」

woo「当然です。」

↳十分経過

コスモス「セシル君、これはなんですか：／／／

セシル「兄さんの×の写真です!!」ドヤツ

コスモス「これは没収します」

セシル「どうして!?!兄さんの『ドキューン』な所や『バキューン』な兄さんを眺めること何がいけないんです!?!」

コスモス「：わかりました。この写真集はお返しします。」

セシル「ありがとうございます。これで今日もいい夢が見られそうだ・・・ウフフ…」

ゴルベージ「!?!」ゾクツ

エクステス「どうした?ゴルベージ」

ゴルベージ「いや、少し嫌な予感がしたんだが、気のせいだったようだ。」

エクステス「そうか」

↳更に二十分経過

コスモス「さて、全員の検査が終わりましたが、ここのクラスは優秀ですね。だれも

不要物などを持ってきていないなんて。」

スコール「・・・」（それはただあんたが甘いだけだろう・・・セシルのあの写真集とか普通は没収物だぞ!?!）

コスモス「では魔列車も来たようですしそろそろ行きましようか。」

ジタン「なあ、woo!!」

woo「ん? どうした」

ティーダ「俺たちのものは?」

woo「ここにある。ほら持つて行け。」

ティーダ「サンキューっス!」

ジタン「なあこれってどこに置いてたんだ?」

woo「教頭のところだ」

バツツ「教頭つてガーランド先生のことか?」

ティーダ「なんでそんなとこに?」

woo「ああ、なんだか生徒会がガーランド教頭の弱みをにぎっているらしくてな。

なぜか生徒会の生徒の言う事は大抵なんでも聞いてくれると聞いていたんだが…まさか本当だったとはな…」

ヴァン「それにしても弱みって何なんだろうな？」

ジタン「どうせ恋愛関係だろ？顔があれだから望み薄そうだけど。」

ティーダ「後で本人に聞いてみるっスか？」

woo「他人の傷口をえぐる様な事はやめておけ。それより、もう魔列車が発発するぞ。」

ジタン「あつそうだwoo！」

woo「ん？なんだまだ何かあるのか」

ジタン「教師ってだれが来るんだ？」

woo「どういう意味だ？」

ジタン「ほら、よく修学旅行中に学校に残る先生とかいるじゃん？だから誰が来るのかなって思ってる」

woo「全員来るが？」

ジタン「え…て事はクジャも？」

woo「そうだが、それがどうかしたのか？」

ジタン「」

バツツ「おいどうした？顔色が悪いぜ。どうかしたのか？」

ジタン「………か？」

バツツ 「え・なんて言った？」
ジタン 「帰っていいか？」

第三話 カオス校長「ぶるああああああ!!」

↳前回の続きだよ、だよ? by ティナ

バツツ「おいどうしたんだよ急に!」

ジタン「いや、帰ると言ったらかえる! あいつと一緒にいると俺の身体がもたない!!」
ヴァン「クジャ先生と一緒にいるとか?」

wor「いやそれよりも、身体がもたないとはどういう事だ?」

ジタン「・・・言わなきゃダメか?」

ティーダ「興味あるっす!」ワクワク

バツツ「俺も気になるな。」

ジタン「ハア…わかったよ…でも後悔すんなよ」

ジタン 「と、言うわけだ。」

woo 「なんと…」

バツツ 「そりゃあ俺でもイヤだな…」

ティーダ 「うわぁご愁傷様っス…」

ヴァン 「ようするにジタンはクジャに阿部さんよろしく公園でやらないかだったと。」

バツツ 「おまつ 空気読めよ！」

ジタン 「いやいいよ。でも俺ほんとに今日行きたくないんだけd…」

woo 「さっきの話を聞いてからで悪いが、クジャ先生は今日来ないぞ。」

ジタン 「え!?!なんで!?!」

woo 「何でも今日はクジャ先生がいるところはひどい豪雨らしくてな。今日来られ

ないらしい。」

ティーダ 「確か沼の洞窟の辺りだったっけ？」

woo 「ああ、あの近くは昔からそういう事が多かったからな。」

ジタン 「……」

バツツ 「まあそういう訳だ。修学旅行めいっばい楽しもうぜ!!」

ジタン 「おう!!」

ティード「それじゃそろそろ校舎前にいくつス！開会式始まつちやうつスよ！」

（DDFF学園校舎前）

セフィロス先生「それでは校長先生、式辞を一言お願いします。」

カオス「ぶるああああああ!!」

セフィロス先生「貴重なお言葉ありがとうございます。」

生徒一同「えーーーーーっ!?」

フリオ「いくらなんでも短すぎるだろ!」

クラウド「ほんとに一言しか言っていないな。」

ジタン「いくらなんでもあれは無いだろ!」

ジェクト先生「おいお前ら！静かにしろ！」

しーーーーん

セフィロス先生「それでは生徒指導のジェクト先生に今修学旅行の諸注意をしていただきます。」

ジエクト先生「ゴホン、せいじゃあちやつちやといくぜ。」

ジエクト先生「まず一つ目。今日から行くのはあくまでも修学旅行だ。ハメを外さねえようにすること。」

生徒一同「はーい」

ジエクト先生「それと行った先の人達に迷惑をかけねえこと。後は思う存分楽しめ。以上だ」

パチパチパチパチ

セフィロス「魔列車も丁度来たようなので出席番号別に乗ってもらう。クラウドは私のもとへ来い。」

クラウド「断る!!」

セフィロス先生「シヨボーン」

く魔列車の中く

ワイワイガヤガヤ

ジエクト先生「おいお前ら貸切状態だからってふざけすぎるんじゃねえぞ!」
バツツ「わかってるって」

ジタン「よし、先生もいなくなったし、…」

全員「自由だーーーーー!!!」

ヴァン「なあジタン、モン○ンしようぜ!!」

ジタン「おっいいね! バツツもティーダもするだろ?」

バツツ「もっちろん!」

ティーダ「もちろんっス!」

フリオ「おいwoo、大丈夫か?」

woo「ああ、この程度・・・なんてこと・・・ない。

セシル「大丈夫かい? もし何かあつたらすぐ言つてね」

woo「かたじけ・・・ない」

ライトニング「おっいいお前らこれから王様ゲームするぞー。」

全員「!?!」

(続くらしいな...) by スコール

第四話 王様ゲームは二度とやらない…

ライトニング「おーいお前ら王様ゲームするぞー」

全員「!？」

フリオ「お、王様ゲームだっ!?」

バツツ「つて言うかこれ全年齢対象だよな。大丈夫なのか？」

ウォー「それより…ライトがそんな事…言いだすなんて…珍しいな…ウプ…」

セシル「大丈夫かい!? 乗り物酔いは外を見ると良いらしいよ？」

ウォー「あ…ありがとう」フラフラ

ライトニング「テイナが言いだしたんだ。物置で見つけたからぜひやってほしいって」

テイナ「よく分からないけど楽しそうだから…ダメでしたか？」

オニオンナイト「いや、そんな事ないよ…でも…」

クラウド「王様ゲームか…」

ジタン「王様ゲームつつつたら1番と3番が〇〇〇しろー、とかそういうやつだろ？」

バツツ「ああ、大体合ってるな」

スコール「わかっているとは思いますが、変な命令はするなよ。」

ティナ「?、変な命令って?」

ティファ「ティナは汚れてないねえ…」

ユウナ「うらやましいです。」

ティナ「え? どうして?」

ライトニング「よし、これで全員分配したがかなり余ったな」

ヴァン「面白そうだし先生たちにも配ったら?」

ティーダ「それ良いっすね!」

ライトニング「じゃあ私が先生たちに言ってくるから待っていてくれ」

ライトニング「よしじゃあ一斉にくじをひいてくれ」

ジタン「王様だーれだ？」

ヴァン「あ、俺だ」

スコール（変なこと言うなよ…）

ヴァン「じゃあ8番の人が大空にはばたけ!!」

フリオ「おいさすがにそれは…」

ティファ「それっていわゆるここから降りろって意味でしょ？」

ヴァン「まあ冗談はこのぐらいにして本題に・・・」

???「カメエエエエツ!!」

一同「!？」

オニオンナイト「い、今の声は…」

一同「エクステス先生!？」

く魔列車教師側く

ライトニング「エクステス先生!大丈夫ですか!？」

皇帝先生「ん!?!君たちか!?!」

セシル「何があつたんですか!?!」

フリオ「そういえばエクステス先生が見当たらないが」

コスモス「そ、そうなんです！いきなり奇声を発して列車から飛び降りたんです！」

ジタン「エクステス先生って自殺志願してたっけ？」

バツツ「聞いたことないな」

ティナ「……………」

オニオンナイト「どうした？」

ティナ「ごめんなさい!!」

オニオンナイト「え!?どうしてティナが謝るんだ!？」

ティナ「多分それ、呪いの王様ゲームだと思うの…」

バツツ「なんだそれ聞いた事無いな」

ティナ「本で読んだ事があるんだけど、その王様ゲームで出された命令は絶対に従わなきゃいけないらしいの。」

スコール「だからエクステス先生は飛び降りた、というわけか？」

ティナ「うん、多分」

全員「……………」

バツツ「おい、あれ何か見えねえか？」

フリオ「何か光の輪みたいなのが見えるが…」

ジタン「おい！どんどん近付いてくるぞ!？」

エクスデス「フアフアフア!!」

コスモス「エ、エクスデス先生!?!大丈夫ですか!?!」

エクスデス「なんてことは無い。だが気が付いたらいつの間にか列車から飛び出していたのだよ。」

一同「……………」

クラウド「と、言う事は…」

ティファ「これは真正正銘の呪いの王様ゲームって事になるわね…」

woo「これは危険だ。棄てるか何かしよう。」

セシル「あ、woo元気になったんだ。」

woo「ああ、外の景色を見ていたらだいぶ楽になった。」

ライトニング「それよりも、どうする？燃やすか？」

フリオ「それが一番かもな。」

ヴァン「えー、つまんないよ。もう少しやろうぜ。命令は軽いのをやればいいじゃん！」

ライトニング「そういう問題では……」

ジタン「ん？ライトニング、どうした？」

ライトニング「そういえば、今の王様は誰だ？」

ジタン「え？ヴァンだけ…ど…」

バツツ「どういう意味？」

ライトニング「バツツ、呪いの王様ゲームのルールを言ってみろ」

バツツ「え？王様の命令に絶対に従わなきゃいけないんだろ」

ライトニング「それじゃあ分かるだろ？」

スコール「要するに俺たちはまだ王様ゲームを続けなきゃいけない訳だ。」

クラウド「そうなるな…」

ティーダ「まあそう暗い風に考えんなって。プラスに考えりゃあその気になりゃあ何だって好きな人に命令できるんだぜ!」

スコール（どうして、そうなるんだ…）

クラウド「……………」

フリオ「……………」

オニオンナイト「……………」

ティーダ「ど、どうしたっすかみんな？」

クラウド「やろう」

ティーダ「へ？」

フリオ「別にやばい命令をしなければいいんだろ？」

オニオンナイト「悪くないね」

ライトニング「おい！お前ら正気か!？」

オニオンナイト「正気も正気大正気さ。」

クラウド「フ、興味あるね。」

そうして、彼らの壮絶な王様ゲームが幕をあけた。しかし、全年齢対象を目標としている筆者が自主規制した事は言うまでもない。

続くんだけど、興味無いね byクラウド

第五話 ガブラス「私は帰ってきたー！」

前回から始まった王様ゲームは何とか終わりを迎えた。しかし、その犠牲は決して少なくなかった。

ライトニング「なんとかしてこの（くそみたいな）王様ゲームを終わらせた訳だが……」
多数「……」ボロボロ

ライトニング「そして……」

フリオ「」

バツ「」

W o l 「まさか死者まで出るとは……」

ティータ「そりゃあ死ぬのもしようがないっすよ」

ジタン「ああ、目の前でガーランド先生とエクステス先生のガチムチパンツレスリングなんて見せられたら……」

スコール「想像しただけで寒気がするな……」

ティファ「そういえばその先生たちは？」

ライトニング「先生達ならさっさと抜けて車両にもどったが？」

ヴァン「勝ち逃げかよ！」

ティファ「あああ!! 思いだけですだけでイライラする！」

クラウド「皇帝先生のことか？」

ティーダ「あの人のやり方はすごかったスね〜」

オニオンナイト「あそこまで汚く勝利する人初めて見たよ…」

ティファ「しかもあの人を小馬鹿にした様な態度！先生じやなかったら殴り飛ばしてたわ！」

スコール「・・・そんな事よりあの二人をどうにかするべきなんじゃないか？（車両の真ん中で横たわられたら面倒だ）」

ユウナ「そ、そうですね。ではティナさんレイズお願いします」

ティナ「うん。・・・レイズ!!」 パアアアア

バツツ「やめろよファリス！レナとお前の百合小説なんか書いたらまた俺が疑われるじゃねーか!! やめろー！ー！ー！ー!!」

フリオ「だ、だめですヒルダさん・・・そんなに激しくされたら・・・もう・・・!!」

バツツ&フリオ「あれ？」

ジタン「二人とも大丈夫か？バツツはうなされてたしフリオはすぐく気持ち良さそうだったか」

バツツ「なんだ夢か：最悪殴ってでも止めるつもりだったよ・・・」

フリオ「夢だったのか：あと少しだったのに：」

セシル「本当に二人とも大丈夫かい？」

ライトニング「・・・それよりフリオニール？」

フリオ「ん？何だ急に」

ライトニング「さっきのヒルダって誰だ？」

フリオ「え!?前に世話になった人だけど、それがどうかした？」

ライトニング「いや、少し気になつてな。夢に出るほどだからよほど大切な人なのだろう。・・・とところでその人は男性か？」

フリオ「ん？女性だけど」

ライトニング「：：そうか」

ティーダ「おーいのばらウノしようぜ！」

フリオ「ああ、今行く。それじゃまた」

ライトニング「ああ、またな」

コスモス先生「出席を確認してください。」

woo「全員います」

セフィロス先生「では今後の予定を皇帝先生にさせていただきます。」

ティファ「出た!!ぶちまけられてえかー!!」

クラウド「ちよつと、落ち着けよ」

皇帝「それでは言う。大事な話だ心して聞け。」

ティファ「ほら!あの態度!」

クラウド「だから落ち着けって」

皇帝「今日の予定はここで荷物をおろしてまず混沌の大陸にいくつもりだったが…
バツツ「いきなりとんでも無いところに行くんだな」

皇帝「大きく予定を変更してすぐに旅館に泊まることにする」

生徒全員「………」

皇帝「話は以上だ。楽にしている」

生徒全員「イヤッター!!!」

ジタン「そういえば部屋割りは?」

ジエクト先生「部屋割りい?んなもん男子と女子に分かれるにきまつてるじゃねえ

か

ジタン「いやそれは分かるけど」

バツツ「誰がどの部屋なのかってやつだよ」

ジエクト先生「あん？んなもんしおりにかいてあるだろ」

ジタン「あ、そうだった」

バツツ「じゃあおれにもみせてくれよ！おれしおりわすれちやつてさあ」

ジタン「ああ分かった・・・・・・」

バツツ「ん？どうした？もしかしてカタブツのw o oとかがいつしよか？」

フリオ「本人の目の前で言うなよ・・・」

w o o「私はそんなにカタいか？」

セシル「そ、そんなことないよ！・・・・・・多分・・・」

w o o「？」

バツツ「なあジタンおれにも見せてくれよ！」

ジタン「あ、ああ」

バツツ「えーと、どれどれ」

しおり『男子全員 梅の間 女子全員 松の間』

バツツ「OH・・・」

まだまだ続くよ!

byオニオンナイト

第六話 テイファ「フリオの事好きなんでしょ？」ライト
ニング「う、うん」

しおり『男子全員 梅の間 女子全員 松の間』

ヴァン「・・・なにこれ」

フリオ「いくらなんでもアバウトすぎるだろ…」

woo「先生、何ですかこれ？」

皇帝先生「仕方ないだろう。ただでさえうちの学校は予算が足りんだ。むしろ部屋
二つ取れただけでもありがたいがたく思え。」

セシル「ちなみに部屋一つ何畳あるんですか？」

ガーランド先生「確か120畳だったな」

スコール（逆によくとれたなそんなデカイ部屋…）

ジタン「そんな事いいからさ、はやく部屋に行こうぜ！さつさとこの荷物も降ろした
いし」

クラウド「そうだな、いつまでも旅館の前に立っている訳にはいかないな」

く旅館パンデモニウム 梅の間く

バツツ「うおーおーおー!! 広えーおーおー!!」ドタドタ

ジタン「よし、端から端まで競争しようぜ!!」ダッ

バツツ「いいぜ! 受けて立とう!」ドタドタ

ヴァン「オイヨ! 俺も入れろって!」ドタドタ

スコール(騒々しい奴らだ・・・)

woo「おいお前ら! そんなに畳ではしやぐと・・・」

ガッ

バツツ&ジタン&ヴァン「あべしっ!!!」

woo「ハア、言わんこっちゃない・・・」

フリオ「大丈夫か? 立てるか?」

ジタン「ああ、ありがとう」

バツツ「じゃあ次はなにをして遊ぶか?」

ジタン「うんそうだなあ」

ヴァン「またモンハンやろうぜ。まだラージャンが途中だし」

ジタン「そうだな! まだ全然部位破とかしてないし」

フリオ「あいつら本当に楽しそうだな」

スコール「ただのバカなんじゃないか？」

オニオンナイト「まあそう言わずに」

wo1「・・・」

フリオ「んwo1、どうかしたか？」

wo1「フリオ、少し話がある。付いてきてくれ」

フリオ「？」

く旅館。パンデモニウム 松の間く

ティファ「単刀直入にきくわ!!」バンッ

ライトニング「な、なんだ急に？」

ユウナ「フリオニールさんの好きなんですよね？」

ライトニング「んな・・・」

ライトニング「ななな何を言ってるんだ!?!私とフリオはたまたま花のことが好きというのと同じなだけであってだな・・・!」

ティファ「他には？」

ライトニング「クラスの配り物とかをいつも手伝ってくれたり、帰りが遅い時とか

まってくれたり…、ていうかそもそもなにを根拠に私があいつのことを好きだと思っただ!? 根拠はあるのか根拠は!?”

ティナ「そのすぐく取りみだしているところかかな?」

ティファ「後その冷や汗」

ユウナ「それにすぐく顔も赤いですよー?」

ライトニング「う……」

ティファ「まあ観念しなさいって、このティファ様はゼーんぶお見通しなんだから☆」

ライトニング「うう…最後の「☆」がすごい腹立つ」

ユウナ「まあそれはそうと、どうしようと思っっているんですか?」

ライトニング「?何をどうしようと思うんだ?」

ユウナ「告白ですよ! 愛の告白?」

ライトニング「はああああ!」

ライトニング「イヤイヤイヤ! まだ心の準備が……それに……」

ティナ「それに?」

ライトニング「その、タイミングと言うか、言う時間が無いというか……」

ティファ「……ハア、私も甘く見られたものだね……」

ライトニング「!? ま、まさか!」

ティファ「そう！そのまさか!!もう手はまわしてるわよ！明日の夜の花火大会。あんなの思いをあいつにぶちまけちゃいなさい!!」

ライトニング「あ、ありがとう///」

ユウナ「フフ。礼はいりませんよ。」

ティナ「女子一人の悩みは・・私達全員の悩み」

ティファ「さ、すつきりする為にも、まずお風呂にでもいくか!!」

ライトニング「う、うん///」

く旅館。パンデモニウム 梅の間く

バツツ「あくやられた!」

ヴァン「くっそーラージャン強すぎるだろ…」

ジタン「破壊光線に属性やられとかいじめだろ…」

バツツ「なあそういえばさ、フリオ達遅いな」

ジタン「そろそろ帰ってくるんじゃないか?」

W o l 「今戻った。」

ヴァン「あれ?フリオ顔赤くね?」

フリオ「あ、ああ少し、な／＼／」

セシル「熱があるんじゃないかい？」

フリオ「ああ、そうかもしれないな。今日は早めに寝るよ」

woi「・・・フリオ、頑張れよ・・・」ボソツ

フリオ「うん、ありがとう」

ジタン「えーフリオ寝ちまうのかよーつまんねーなー」ブーブー

クラウド「どうしたんだ？急に」

オニオンナイト「どうせまたくだらないことかかんがえてたんでしょ？」

バツツ「く、くだらないってはっきり言うな!!」

スコール「で、なんだ？（あまり期待はせんが・・・）」

バツツ「よくぞ聞いてくれた！」

ジタン「俺たちはこれからこの世の楽園に行くんだ!!」

オニオンナイト「楽園？」

woi「そんな名前の部屋はなかったと思うが」

ジタン「違う違う、今から俺たちが行くのは・・・」

ジタン&バツツ「女風呂さ!!!」

男子多数「!？」

woi「お、おいすがにそれは…」

オニオンナイト「やめときなつて！バレたら生きて帰つてこれないよ!!」

バツツ「とめるでない少年よ！我々はこの地上に咲いた華麗なる天使たちをみなければならぬのだ！」

クラウド「そ、それはつまり、ティファのその、裸体をだなこう…」

ジタン「お！クラウドも興味あるか？」

クラウド「きよ、きよきよきよ興味無いね!!」

バツツ「でも本当は？」ニヤニヤ

クラウド「少しある…」

スコール（まったく、どいつもこいつも…）

ジタン「よし！決まりだな！スコールはどうする？」

スコール「行かせてもらおう」

バツツ「よし、じゃあ出発進行ー!!」

オニオンナイト「あ！待つてよ置いてかないでよ!!」 タツタツ

woi「……………」

セシル「行っちゃったね・・・」

w o l 「ああ・・・」

セシル「これ、全年齢対象だよね...?」

w o l 「ああ・・・」

セシル「・・・」

フリオ「zzzz・・・ライト・・・フフっ」

続くのだーーーー!!ホワーーーーホッホ!!b y ケフカ

第七話 ティーダ「：我が人生に：一片の悔い無し：」

バツツ「さて、悠々と部屋を出たはいいが…」

ヴァン「問題はどうかやって覗くかだな…」

ジタン「みんな、これは分かっていることだとは思うが、これにもし失敗した時に俺たちに待っているのは…」

ジタン「死だ」

バツツ&その他男子「…」ゴクツ

ジタン「だからリスクは最小限に抑えなきゃならない…」

クラウド「そうだろうな」

スコール「だがどうする？見るといふ時点でもうすでにこちらも見られていると言ったりスクを背負っている訳だ」

オニオンナイト「じゃあビデオカメラ的なので…」

ダメ男子一同「持っていない」

オニオンナイト「うーん…」

ジタン「おい、お前ら俺に良い考えがあるんだg…」

クラウド「聴かせてくれ」

スコール（何だこのクラウドの妙な熱気は…!?)

ジタン「鏡を使うんだよ」

バツツ「鏡？」

オニオンナイト「鏡をどうするんだい？」

ジタン「まあ簡単に言うと鏡の反射を利用してみようってわけだ」

バツツ「でも鏡を設置するのってこれ以上無いほどリスクが高くないか？」

ジタン「ああ、だから運動能力の高い奴が必要だ」

クラウド「そうなるな」

オニオンナイト「じゃあ誰が行く？僕は無理かなあ…」

スコール「俺もここまで危険な任務は初めてだ…」

バツツ「うくん…」

ジタン「くつくつくつ…」

クラウド「おい、どうした？ジタン」

ジタン「まだわからないかい？」

バツツ「何が？」

オニオンナイト「もったいぶらずに教えてよ!!」

ジタン「どうして今ここにティーダがいないか分かるかい？」

バツツ「あ！確かにあいつがこの話に来ないのはおかし：ハツまさか!？」

ジタン「そう！そのまさかさ!!ティーダの運動能力を見込んで彼には鏡の設置をたのんでいるよ」

スコール「確かに奴の運動神経ならば…」

ジタン「多分そろそろ来るころかな」

ティーダ「おくい皆終わったっすよ〜ってクラウドとかもやるんっすか？」

クラウド「ああ！」

スコール「もちろんだ」

ジタン「よしじゃあ善は急げだ早く行こうぜ!!」

ダメ男子共「おう!!」

く女子大浴場 のとなりの部屋く

バツツ 「それじゃあまずおれからな…」

ジタン 「ああ…心して見ろよ…」

バツツ 「それじゃあ、遠慮なく…」フウ

バツツ 「いざ！参る！」バツ

オニオンナイト 「ど、どう？見える？」

バツツ 「うおおおおお!!見える！見えるぞ！敵の動きが魂の鼓動が！全てが見える

!!!

ティーダ 「俺もみたいっス!!」

バツツ 「ああ！あまりの美しさに気絶すんなよ！」

ティーダ 「大丈夫っス！そういったのにはもう耐性がついているっス！」

クラウド 「頼もしいな」

ティーダ 「ではまずユウナ様の身体から拝ませて…ふべらばっ!!」ブシャアアツ

ジタン 「!?おいティーダ！大丈夫か!？」

ティーダ 「…我が人生に…一片の悔いなし…」ガクツ

スコール 「どういことだ…!?まさか気づかれ…」

オニオンナイト 「いや、今のはただ純粹にティーダが情報を処理できなかつただけだ

と思うよ」

ジタン「そうか…良かった…」

クラウド「じゃあ次は俺だな」

バツツ「ティーダみたいにぶつ倒れんなよ？」ニヤニヤ

クラウド「フ、心配するな。こういった時のために日々訓練を…」

ジタン「訓練を？」

クラウド「……………」ドタツ『クラウドはしんでしまった!』

バツツ「何が日々の訓練だ!倒れるどころか昇天しちまってんじゃねーか!」

オニオンナイト「想像以上にやばそうだね…何か」

スコール「では次は俺がいこう…」

スコール「……………」

ジタン「どうだ？」

スコール「……………」

バツツ「おい!お前名前!自分の名前!なんかやばい事になっちまってるぞ!」

スコールではなくスコール「…っは!?!俺は一体なにを？」

ジタン「あやうくR-18にするところだった…」

ヴァン「せいじゃあ残りの奴もさっさと見ちまおうぜ!」

く女子大浴場く

ティナ「ねえ、ユウナさん…」ゴシゴシ

ユウナ「?何ですか？」

ティナ「何かすごく見られてる気がするんですけど…」ザパア

ユウナ「え!?!のぞきですか?怖いですね…」

ティナ「多分気のせいだと思うけど…」

ティファ「おーいそこ早くはいりなよー!」

ユウナ「あ、はい!」

ティナ「……………」

ティファ「?どうしたの？」

ティナ「…この力で…!」メルトンチャージ

ライトニング「は!?!」

ティファ「ちよつティナ何を!?!」

ティナ「やああ!!」『メルトン』

どがあああああああああん

バツツ「うおわああ!？」

ジタン「うわ!？」

どさっ

ティファ「きやーーーーー!のぞきよのぞき!!」バシヤツ

ティナ「…やっぱり」

ユウナ「バツツさん、ジタンさん、これはいつたいどういうことですか?…」

ライトニング「返答しただいでは貴様らに明日は無いぞ?」ジャキン

ジタン「いや!ちがうんだ!!ほかにもあいつらが…」

『スコール達にはげだした!』

バツツ「うおーーーーーい!？」

ユウナ「あいつら?どこにいるんです?」ニコツ

ジタン「あ…が…」

ライトニング「どうやら決まったようだな…」

バツツ&ジタン「アツーーーーー!!!」

続くという夢を持ち続ける! by フリオニール

第八話 ライトニング「わたしの～おはかの～まーえで

♪」

～旅館。パンデモニウム 廊下～

オニオンナイト「はあ、はあ…ここまでくればさすがに…大丈夫でしょ」

クラウド「ああ、いつの間にかもう梅の間のすぐ前に来たな。」

ヴァン「あれ？クラウド？」

クラウド「もし見つけた時のためにリレイズをかけておいたんだが、まさかこんな形で役に立つとは…」

ヴァン「ま、なにはともあれ結果オーライって事でいいんじゃないか？」

スコール「そうだな（バツツとジタンはどうなったんだろうか…）」

オニオンナイト「ほらほら、こんなところでつつ立ったって早く中に入ろうよ」

～旅館。パンデモニウム 梅の間～

woo「ん？どうした。やけに早いじゃないか」

クラウド「いや、まあ色々あって…」

セシル「…まあ大体は察したけど…：そういえばバッツとジタンは？」

ヴァン「……………」

クラウド「……………」

セシル「えっ?!まさか置いてきちやったのかい!？」

ティーダ「まあはつきり言うтそういうことになるつスね…」

ウォー「……………」

セシル「……………」

オニオンナイト「だ、大丈夫だつて！あいつら前シャントット先生の魔法受けても大丈夫だったし」

クラウド「そ、そうだな!!あいつらのしぶときはゴキブリ並みかそれ以上だからな！」

スコール「あいつらのことだ！きつと普通にかえってくるだろ!!うん！」

セシル「いや、僕たちが言葉を失ったのは…」

ウォー「そのバッツとジタンが帰ってきてるぞ…」

ティーダ「え!？」

バッツ&ジタン「……………」ズタボロ

ティーダ「え、えーとその…お早いお帰りで…」

バッツ「……………」

ジタン「……………」

クラウド「その、すまなかつたな。勝手に置いていってしまつて」

バツツ「いや、それはもういいよ…」

ジタン「もう過ぎた事だしな」

オニオンナイト「あ、ありがとう」

セシル「それにしてもよく生きて帰つてこれたね。」

バツツ「いや、無事じゃなかつたんだ」

ティーダ「え？じゃあ幽霊か何か？」

ジタン「いやそういうのでもなくてな…」

バツツ「要は四、五回ボコボコにされた後にレイズで生き返らされたんだ。」

ジタン「正直生きた心地がしなかつたぜ…」

バツツ「まあオレは二回目だし若干なれてたけどな」

クラウド「そうか」

w o r「あ、そうだ。いきなり話を変えるがそろそろ夕食の準備が終わる時間だ一階の大広間に集まろう。」

ティーダ「もうそんな時間つすか？」

バツツ「そうだな！こういうのはうまいもんでも食つて忘れちゃうのが一番だな！」

ジタン「それが一番だな！よくし！じゃあ大広間まで誰が早いか競争な！」バツ
ヴァン「望むところだぜ！」ダッ

ティーダ「オレもまけないっすよ！」

WOL「おいお前ら！」ダッ

クラウド「じゃあ俺たちも行くか」

オニオンナイト「うん、そうだね」

スコール「ああ」

フリオ「うゝゝゝん…」

セシル「あ、フリオニール丁度いいね。そろそろ夕食の時間だよ」

フリオ「ん、…もうそんな時間なのか」

セシル「うん、皆は先に行っちゃったから早めにいこう？」

フリオ「そうだな」

く旅館。パンデモニウム 厨房く

シエフ1「あれ？どこに置いたっけ？」

シエフ2「ん？どうした？」

シエフ1「ここに先生方に出す用の飲み物をここに置いてたはずなんだが…」

シエフ3「そこに置いてたのならさつき生徒たちが持つていったが？」
シエフ1, 2「ええええええ!!」

↳旅館。パンデモニウム 大広間

カオス校長「あ、それではあみいいなんでええええ」

全員「かんぱー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！」

ゴクツ

「？」

バツツ「あれなんだこれ、ビールじゃね？」

フリオ「オレのはワインだぞ。おかしいな、ファンタを頼んだはずなのに」

ガーランド先生「わしのはオレンジジュースだぞ」

皇帝先生「だれだ、ワインのかわりにファンタを持ってきた奴は」

ガヤガヤ

ティファ「ちよつライトニング落ち着きなつて！」

ライトニング「うるさい!!これが飲まずにいられるか！」

ユウナ「困りましたねえ：ライトニングさんがこんなに酒癖が悪い人だなんて…」

ライトニング「わたしのくおはかのくまーえでく♪」

ティファ「今度は歌いだしたわよ!?!しかも想像を絶する低歌唱力で」

ティナ「放っておいたらそのうちおとなしくなるんじゃないかな、かな?」

ティファ「そうね、それが一番……」

ガツシャアーン

ユウナ「今度はなんですか!?!」

皇帝先生「も、もう飲めな……」

???「あゝ?私の酒がのめねえってか?おらくちあけろおらあ!!!」

皇帝先生「ウボアー」ガクツ

フリオ「な!?!あれは!!」

一同「コスモス先生!?!」

コスモス「うー、ひっく、おらどんどん酒もってこいやあ!!」

セフィロス先生「せ、先生そのくらいで……」

コスモス先生「あゝ?キモロン毛は黙っとけって」

セフィロス先生「きも!?!」

コスモス先生「おうエクスデスウ全然飲んでねえじゃねえか」

エクスデス先生「いや、今休刊日で……」

コスモス先生「気にすんな！パーっと行けって」

エクステス先生「カメエエエ!!」

コスモス先生「おらまだ足んねえぞ!?もつともつてこ…」コテン

WOL「先生！大丈夫ですか!？」

コスモス先生「きゆう…」

セシル「完全に酔いつぶれているみたいだね…」

WOL「では負傷した人は救護室に」

フリオ「ああ、分かった」

WOL「一旦夕食は中断して自室待機、ということでもいいですか？」

ガーランド「うむ」

↳ 旅館。パンデモニウム 梅の間

ジタン「何かコスモス先生の以外なところ見ちゃったな」

バツツ「ああ、あんなの初めてだよ」

ティーダ「だってさっきセフィロス先生に向かってキモロン毛とか言ってたっすよ

！」

クラウド「何それ凄く見たかった」

ジタン 「なあ、今待機中なんだよな」

バツツ 「ああ」

ジタン 「じゃあもうあれしかないだろ？」

フリオ 「あれ？」

ジタン 「ま・く・ら・な・げだよ!!!」

バツツ 「俺とした事が！そんなメインイベントをわすれるとは!!!」

WOL 「何をいつてるんだ!!いまは待機中だと…」

ジタン 「はーい、ほいじゃ始めー！」

セシル 「嫌な予感がする…」

続く

第九話 枕投げは二度とやらない…

ジタン「さうて、ほいじゃ早速分かれてはじめよつか!!」

セシル「あ、ぼくはパスで」

woo「私も遠慮させてもらう」

バツツ「何でよ!？」

セシル「また何か起こりそうな気がして…」

woo「私はただ純粹に関わりたくない」

バツツ「何と…」

ティイダ「じゃあ二人には審判をおねがいするっス!!」

woo「?枕投げって審判などあるのか?初耳だが」

フリオ「何か本格的なやつには審判があるらしいぞ?」

セシル「うん…：そうはいつでも何が得点なのかよく分からないし」

woo「まあ初見だしな」

ジタン「うん、じゃあ人に当たったら1点でその人がぶっ倒れたら5点ってことで」

クラウド「何だ、そのテキトウな決め方は…」

バツツ「もうそういうのいいからさ！さっさと始めようぜ!!!」
ジタン「ん、そうだな。じゃあグーとパーで別れようぜ！」

スコール「…決まったようだな」

バツツチーム

バツツ，ジタン，ヴァン，ティード

クラウドチーム

クラウド，スコール，オニオンナイト，フリオニール

バツツ「こりやあもう決まったも同然だな！」

ヴァン「おう！あっさり勝っちまおうぜ!!」

ジタン「あ！そうだ！じゃあいつそのこと小さめのものなら枕以外の物を使っても良い事にしようぜ！」

スコール「？かまわないが」

woo「はい、それじゃあはじめー」↑やる気なし

ジタン「よっしゃあ！速攻でカタつけるぞ！」バツ

バツツ「食らいやがれー！ー！」バツ

フリオ「うわ！…あれ？」

スコール「これ枕じゃないぞ」

オニオンナイト「なにこれ…本…みただけど」

『女子高生監禁！24時間〇辱日記』

『レ〇プ天国〜終わらない快楽』

フリオ「なっ…これは／＼／」

クラウド「フ、興味しかないね」バサツ

スコール「おい！これは敵の罠だ！惑わされるな／＼／」

ティーダ「いまのうちっス！さっさとやられるっスよ！！」

ヴァン「隙ありいい！！」

フリオ「ぐはっ」

クラウド「ぬうっ!？」

スコール「はっ！」

オニオンナイト「ちよっスコールまた名ま…ぐあっ」

バツチーム 8点

クラウドチーム 0点

クラウド「くっ大丈夫か！皆」

スコール「フリオが…ダウンだ」

フリオ「きゆう…」

オニオンナイト「以外に手ごわいね…」

ジタン「イエーイ、作戦成功〜！」

バツツ「ちよろいもんだぜ！」

ヴァン「こりやあすぐ終わるな！」

ティーダ「ちよろいもんっスよ！」

クラウドチーム「カチン」

クラウド「言わせておけば…」

スコール「ほらっ返してやる！」ブンツ

ティーダ「ほいっス！」さっ

バツツ「え?…」

—この時オレは察したね。うん。馬鹿のオレでも分かった。二度ある事は三度あるってね—

ドガッ

ジタン「バツツウウウウ!!」

バツツ「」

ヴァン「今バツツ何回死んだっけ…」

ティーダ「多分二回じゃなかったっけ」

ウォー「三回だ」

クラウド「それよりどうする？もう一旦中止するか？」

ジタン「……………」

スコール「おい？どうしたジタン」

ジタン「うおおおおお!!バツツのかたき!!」

ティーダ「おれもいくっス！」

クラウド「おい！おまえら落ち着けて…」

スコール「今はこいつらを黙らせるぞ!!」

オニオンナイト「ぼくも手伝うよ!!」

クラウド「何とか終わったが…」

ジタン「」

ティータ「」

セシル「ど、どうするの!?!」

クラウド「どうする? 決まっているじゃないか」

スコール「あいつらを復活させるんだ」

woo「でもどうやって?」

クラウド「皆で力を合わせれば!」

セシル「何かもう吹っ切れてきたね…」

クラウド「皆! オレに力を分けてくれ!」

オニオンナイト「…しようがないなあ」

ヴァン「オレも手伝うよ!」

クラウド「皆! ありがとう! ……じゃあいくぞ!!」

「うおおおおおおおおお!!!」

く 旅館パンデモニウム 松の間く

ティファ「…で結局こっちに来たわけね」

クラウド「てへ☆」

ティファ「やめろ気持ち悪い」

ユウナ「はい、終わりましたよ」

ティナ「バツツ…死に過ぎ…」

バツツ「いやあ何かもう清々しくなってきたよ！」

ジタン「うくんやっぱりまだ慣れねーなこの感覚…」

ティーダ「何か…すぐかつたつス…」

スコール「そういえばライトニングは？」

ティファ「ああ、あいつならあそこで…」

ライトニング「zzz…」

フリオ「なるほど」

ティファ「あ、そうだ。先生達から夜食用のパンを男子のももらってたんだった」

クラウド「おお、ありがとう」

ティファ「じゃあクラウドとスコールと玉ねぎ君とフリオはジャムパンと野菜ジュー

スね」

クラ&スコ&オニオン&フリオ「ありがとう」

ティファ「で、ティーダ君とヴァン君とセシルとw o oはクリームパンとコーヒー牛乳ね」

ティー&ヴァン&セシ&w o o「おお」

ティファ「んでバツツとジタンはワサビパンと青汁ね」

バツツ&ジタン「!？」

↳旅館。パンデモニウム

????
↳

???「どうだい？調子は」

ガブラス「現時点ではこれといって…」

???「そうか、また何か分かったら教えてくれ」

ガブラス「分かった」

まだ続くよ？ by セシル

第十話 ティファ 「いや、だからバツ…」

バツツ 「何これ!? 何この黄緑のパン！」

ジタン 「俺たちもふつうのがいい!!!」

ティファ 「うつるさいわねえ、あんなことされても恵んでやってるんだから感謝しなさいって」

ユウナ 「そうですよ！先生達にも言わずに穩便にことを済ませてあげたんですから」

ジタン 「穩便!? あれが穩便!？」

バツツ 「人にブレイクかけた後にサマーソルトしておいて何が穩便だ！」

ジタン 「それに見てたやつは他n…」

クラウド 「少し黙ろうか？」

スコール 「壁とでも話してるんだな」

ジタン 「……………」

バツツ 「……………」

ティファ 「よし、やっとおとなしくなった」

バツツ 「うつせえ！クリームパンをあきらめられるか!!」

ジタン&バツツ「パーン！パーン！パーン！パーン！パーン！パーン！」

woo「全く…この年になってこれか…」

セシル「もう諦めなつて…」

ジタン&バツツ「パーン！パーン！パーン！パーン！パーン！」

ライトニング「パンパンパンパンうるさいぞ！静かにしろ!!」ガバツ

フリオ「あ、ライト起きたんだ」

ライトニング「あれ?!フリオ来てたの!?!」

フリオ「まあ、色々あつて…」

ティナ「それよりライト…さっきのすごく卑猥…」

ライトニング「ええ!?!どこが!?!私さつき変な事言つた!?!」

ティナ「パンパンつて…//」

そこにいた全員「……………」

ティファ「ティ、ティナ!?!どうしたの!?!今までエロのエの字すら知らなかったのに!」

ティナ「廊下で、こんなの拾つて//」

男子全員「!?!そ、それは!?!」

『女子高生監禁！ 24時間〇辱日記』

ジタン「お、おいバツツ…あれお前のじゃね?」

バツツ「……………」

バツツ（まずい！まずすぎる!!!今もしここでオレが名乗りをあげたら…）

バツツ『あ、それ実はオレの…』

ティファ『この変態!!』

ユウナ『不潔です!』

ライトニング『懲りない奴だ…』

ティナ『もう一回、死んでみる?』

バツツ『いや、もう三回ほど…』

バツツ!!

バツツ『』

バツツ（ツて事になりかねえええ!!）

バツツ（い、いやでも!ここでオレが名乗りをあげなければ…!）

ティファ「あれ?これでも裏に名前書いてるじゃん」

バツツ「……………」

バツツ（詰んだ…完璧に詰んだ）

ユウナ 「えーと…バ…」

セシル 「あー!! それ!!」

ユウナ 「!?」

セシル 「それ多分学校の近くのバルバリシアさんのだな! うん!

ティファ 「いや、だからバツ…」

セシル 「しようがないなあ!! これは僕がちゃんと返しておくよ!!」 バツ

ティファ 「あ…」

セシル 「それじゃあそういうことで!

クラウド 「お、おうそうだなそれじゃあこれで」

ティーダ 「おじやましたーっス!!」

ガラツバタン

ティナ 「…行っちゃった」

ティファ 「……………」

ライトニング 「……………」

ユウナ 「じゃあ、もう寝ましょうか?」

ライトニング 「そうだな」

く旅館。パンデモニウム 梅の間く

バツツ「うおー！おー！！皆ありがとう！！」

セシル「はあ…僕も殺されるんじゃないかと思つたよ…」

フリオ「あの時のセシルはすごかつたな…」

ティーダ「すつごく堂々としてたっス！」

セシル「そ…そうかな…／／」

スコール（というより、もうヤケクソ。つて感じだつたがな）

クラウド「それはそうと、もう夜食用のパンを食べてしまわないか？」

ヴァン「おわ！もう九時過ぎてる！！」

フリオ「そうだな。早めに食べてしまおう」

woo「ん？バツツとジタンは食べないのか？」

バツツ「ほしけりゃくれてやるよ…」

ジタン「何が悲しくてワサビパンと青汁を食わなきやいけないんだよ…」

セシル「まあまあ…僕の少し分けてあげるからさ…ね？」

ティーダ「オレも少しならいいっすよ！」

バツツ「うう…みんな、ありがとう…」

ジタン「恩に着るぜ…」

woi「食べ終わったらちゃんと歯みがけよ？」

バツツ「わかってるって」

クラウド「もう時間も時間だし、そろそろ寝るか」

スコール「そうだな」

バツツ「今日一日でオレは一体何回死んだんだろう…」

W o l 「確か三回だな」

フリオ「真面目に答えるなよ…」

セシル「じゃあ明日は今日より良い一日になればいいね」

ジタン「お！良い事言うねえ!! うん！そうだな！今日あったことを一旦リセットしてから明日を迎えたいいな！」

クラウド「リセットしたら今日やった馬鹿な事をまたやるんじゃないか？」

バツツ「違う違う！今日の失敗を生かすんだよ！」

ジタン「同じ失敗は繰り返さない!!」

ティーダ「もう一回枕投げしようっス!!!」

バツツ「お！またやるか!!」

クラウド「おい」

「なんだかんだあって旅館パンデモニウム 梅の間」

ティーダ「ほいじゃ、電気消すっスよ」

フリオ「ああ、頼む」

パチッ

woi 「フリオ、明日、頑張れよ」

フリオ 「ああ、かならず成功させてみせる」

バツツ 「何の話してるんだろ？」

ジタン 「どうせ俺たちにはわからない難しいことだつて」

ヴァン 「じゃ、みんなおやすみ」

クラウド 「ああ、おやすみ」

オニオンナイト 「おやすみ」

バツツ 「おやすみ」

woi 「zzz…」

セシル 「zzz…」

ジタン 「あいつらねるの早えなー」

スコール 「うらやましいな。オレはなかなか寝付けなくてな…」

ティーダ 「じゃあ頭の中で羊を数えると良いっス!!」

スコール 「何歳だと思ってるんだ…遠慮させてもらう」

ティーダ 「えー効果あるのに…羊が一匹、羊が二匹…あれ？次何匹目だったっけ？」

スコール 「……………」

セシル「兄さん p r p r」

男子多数「!？」

セシル「z z z z :」

フリオ「ね、寝言か :」

オニオンナイト「びっくりしたあ :」

ジタン「じゃあもうオレ寝るわ」

バツツ「おう、じゃあオレも」

男子全員「z z z z :」

く 旅館パндеモニウム

???「どうだい？例のものは入手できたかい？」
?????

ガブラス「ああ、心配するな。バツチリだ」

???「そうか。じゃあ君にもう一つやってほしいんだ。それなりに報酬は出す」
ガブラス「?かまわないが」

続くんだよ？ b y
???

第十一話 ライトニング「わ、私も、フリオの事…」

〽旅館パンデモニウム 梅の間 朝〽

セシル「う〜ん。よく寝た…」ガバツ

クラウド「やつと起きたか、かなりの寝坊だぞ。」

セシル「ええ!?!僕そんなに寝てた?」

フリオ「ああ、とても気持ちよさそうに寝てたから起こすに起こせなくて…」

セシル「大丈夫だよそんなに気遣わなくても…それより何時?」

woo「六時四十五分だ」

セシル「え?でもそんなに立ってないじゃない。それに集まりは七時集合のはずだよ

?」

woo「ああ、本当はそのはずなんだが…」

フリオ「昨日色々あっただろ?」

セシル「え?...ああ、うん...」

フリオ「そんな事が重なって今日は早めに帰るんだそうだ」

セシル「何と...」

クラウド「それともう一つ言うことがある」
ヴァン「もう一つ？」

スコール「オレは聞いてないな…」

クラウド「バツツとジタンがいない…」

・・・

w o l「そのうち帰ってくるだろ…」

ジタン「おい！少しは心配しろよ!!」

ティーダ「あれ？生きて帰ってきたっス！」

バツツ「そんなオレ達がいとも死んでるように言うなよ…まあ軽かなり死んでるが

…」

オニオンナイト「で？どこに行ったの？」

ジタン「いや、それがさ…おれの歯ブラシと昨日はいてた下着がどつかいつてさ…

バツツと一緒に探してたんだよ」

セシル「それで、みつかった？」

バツツ「いや全く」

w o l「そろそろ集合だ。あきらめて早く行くぞ」

ジタン「そうだな…」

〈魔列車内部〉

ヴァン「また魔列車で移動かよ」

ウォー「また乗らなきやダメなのか…」

セシル「あ、そういやウォーは乗り物に弱いんだっけ」

ウォー「ああ、だから旅館で酔い止めを買ってきておいた」

セシル「そう、売ってて良かったね」

バツツ「なあ、次どこ行くんだ？」

ジタン「えくと次は…クリスタルタワー行ってその後に天衝の鎖行って最後に月の溪谷で花火見て終わりだな」

バツツ「ふん」

ティファ「良い？いきなりいったらダメだからね！少しづつでいいからね!!!」

ライトニング「お、おう…まかしてくれ」

ユウナ「絶対に邪魔はさせませんから！」

ティナ「だから…行くところまで行って…」

ティファ「ティナのいくは意味が違うから！」

クラウド「なあ、後どれぐらいで着くんだ？」
スコール「そうだな…恐らくあと二、三十分ぐらいだろう」

くクリスタルタワー 頂上く

オニオンナイト「うわ…高…高い」

ジタン「おい、どうした？バッツ、顔が真っ青だぞ」

バッツ「オレ高所恐怖症なんだよ…」

ジタン「あ、そうなの？知らなかった」

ヴァン「うひょー！高えー！高えー！」

ティーダ「空気が薄いつス！空気が薄いつス！」

フリオ「あ、こんなところにも花が咲いてる」

バッツ「はあ…はあ…」

ジタン「おいおい…マジで大丈夫かよ」

バッツ「全然大丈夫じゃない…」

セフィロス先生「じゃあクリスタルタワーを降りて次の場所に行きましょう」

バッツ「た、助かった…」

く天衝の鎖く

クラウド「すごい大きなクリスタルだな…」

セシル「なんかしおりによると70メートルあるらしいよ？」

オニオンナイト「あ！ティーダ、バツツ！あまりクリスタルに近づかない方が良いよ？」

バツツ「なんで？」

オニオンナイト「ブレイブ（生气）を吸収されるから」

バツツ「早く言えよ!!」

ティーダ「オレなんか触っちまったっすよ！」

ティファ「あんたなら大丈夫なんじゃない？生命力にあふれてそうだし」

ティーダ「なんか…ありがとうっす」

クラウド「次は月の渓谷だったか？」

スコール「ああ、そうだが？」

ティナ「ライト、頑張ってるね…いざとなったら押し倒すぐらいの勢いで…」

ライトニング「いやいや押し倒さないから！」

W o l 「フリオ、分かっているな？」

フリオ 「ああ。」

W o l 「なら大丈夫だ。幸運を祈っているぞ」

フリオ 「ありがとう」

コスモス先生 「はい。ではみなひゃんばふにのつてくらしやい」

セシル 「コスモス先生大丈夫かな…」

ジタン 「ありやカンペキに二日酔いってやつだな」

く月の溪谷 花火大会会場く

シヤントット先生 「あら、やっと来ましたの？」

ジタン 「あれ？シヤントット先生って来てたっけ？」

シヤントット先生 「初日から花火の準備をしたのでしてよ」

バツツ 「どうりで一回も出てこない訳だ」

フリオ 「じゃあオレ達も自由にまわるかな…」

ライトニング 「あ！フリオ！良かったら私と一緒に…」

フリオ 「え…／＼／＼、良いけど」

ジタン「なーフリオ！おれ等と一緒に…」

ユウナ「サンダガ」

ジタン「あばばばばばばば！」

ティファ「あんたはバツツらと行ってなさい」

ジタン「お…おう」プスプス…

く月の溪谷 離れく

フリオ「そういえば…まだ呼び出した理由を聞いてなかったね／＼／＼」

ライトニング「あ、これは／＼／＼その…／＼／＼」

フリオ「…」

ライトニング「…」

フリオ「…」

ライトニング「…」

フリオ「…：フー…よし…ライト、こっちを向いてくれないか？」

ライトニング「な、何だ？／／／…んむ!?」

ライトニング「!?…んくっ…んっ…／／／」

フリオ「ん…ちゅっ…ぷはっ／／／」

ライトニング「…／／／」

フリオ「ライトニング、君のことが好きだ」

ライトニング「わ、私もフリオの事…好きだよ」

フリオ「ありがとう／／／」

ライトニング「そ、それよりも／／／…」モジモジ

フリオ「？」

ライトニング「さ、さっきの続き…してほしい／／／」

フリオ「…うん。分かった／／／」

ジタン「あれ？あそこにいるのってフリオとライトじゃね？」

バツツ「なんで二人で？」

ティーダ「気になるっスね」

ヴァン「んじゃあさ、ちよつといつてみようぜ!!」

ユウナ「『ぜんたいか』」

ティナ「『デス』」

ジタン&バツツ&ティーダ&ヴァン「ん?」

パシユツ

ジタン「」

バツツ「」

ティーダ「」

ヴァン「」

ユウナ「ふー…危なかつたですね」

ティナ「じゃあこれ、かたずけてくる」

ユウナ「あ!ちよつと待ってください!そろそろ花火はじまりますよ!!!」

ヒユーーーーー

ドーーーーー

ユウナ「うわあ…きれいですね…」

ティナ「うん」

クラウド「あ、花火だ」

スコール「本当だ」

クラウド「…」

スコール「…」

オニオンナイト「何この空気…」

w o l 「きれいだなあ…」

セシル「これを兄さんと一緒にみれたらなあ…」

美しい花火の光は生きた者にも死んだ者にも、平等に降り注ぎ心を癒した。しかしこの花火は先生方が必死で作り上げたものであるということを、彼らは知る由もなかった。

ガブラス「今帰還した」
 }
 ?????
 }
 ??????
 }

??? 「やあ、意外と速かったね。それでちゃんと持ってきてくれたかい？」

ガブラス 「ああ、もちろんだ。……しかしこんなジタンとやらの下着やらをどうするつもりなんだ？」

ガブラス 「クジャ……」

クジャ 「君が知る事じゃないよ。……ほら報酬だ。もう用は済んだろう？早く帰つてくれ」

ガブラス 「……分かった」

クジャ 「……ウフフフ……僕の……マイハニ……」

修学旅行編、終了しちやっただけどまだまだつづくかな、かな？ by ティナ

グラウンドワン編

第十二話 ユウナ「サンバのリズム!？」

—たぐさんの思い出を残し、たぐさんの死者を出した修学旅行も終わり、皆すっかりくつろいでいた……?—

く学生寮バツツ&ジタンの部屋く

ジタン「…暇だ…暇すぎる。どうしてこうもする事が無いんだ…」

バツツ「宿題の感想文はそっこうでファイガで燃やした…もう何もする必要は無い…だがその『何もする必要は無い』、これがこんなに暇だとは…」

ジタン「ここにいてずっと男二人でエロゲするのもいいかげん飽きたな…かれこれ二時間だぞ」

バツツ「なあ、少し外に出ないか?少しは気が紛れるだろ?」

ジタン「そうだな…あ、ちよつと待って」

バツツ「?」

ジタン 「ハーレムエンド来たー！ー！！」
バツツ 「はいはい」

↳学生寮廊下↳

バツツ 「うーん、改めて見るとけっこう汚ねえんだうちの学校」

ジタン 「今気づいたんだがうちの学校って全部和式なんだよな…使いづれえ…」

バツツ 「なんかもう暇すぎてやる気がまつたくねえな」

ジタン 「そりゃあそうだろ、こんな時に元氣はつらつな奴なんて…」

バツツ 「ん？どうした？」

ジタン 「何か聞こえる…」

バツツ 「うーん…おれもきこえるような聞こえないような…」

バツツ 「けっこう近いな…多分この階だな」

ジタン 「ここ、だな」

バツツ 「ここってフリオの部屋じゃん」

ジタン「あれ？ドア開いてる……ほいじゃちよつと中を」

バツツ「あれ？でもこの声どつかで聞いたことあるような……」

???「あつ／＼／フリオそんなに激しく揉まれたら……私、変な気持になつちや／＼／

……あつそんな吸つちや／＼／すごく……感じ……ちやう、から、あ／＼／

バツツ「な、あれは……!!」

ジタン「ライトニングじゃねえか!!」

バツツ「ばか!!大声出すんじゃねえ!!!バれるだろうが!」

ジタン「わ、悪い……だけど驚かすにはいらねえだろ!」

バツツ「確かに……あのエリート学級委員長様がねえ……」

ジタン「……」

バツツ「おい、どうした？ジタン」

ジタン「なあ、思ったんだけどさ、ここで見るのは何かとまずくないか？」

バツツ「まあ、そうだな確かに二人肩車でドアの前はかなり怪しいな」

ジタン「と、いう訳で……」

バツツ「？」

ジタン「今回もいくぞ……あの作戦を……」

バツツ「ま、まさかまたあの作戦をするのか？」

ジタン「他に何があるっていうんだ？」

バツツ「ああ、やろう!!」

ジタン「それでこそおれの親友だぜ！」

ジタン「…という訳で」

ティーダ「またオレが鏡を設置してくると？」

ジタン「そういうこと♪」

バツツ「考えてみなよ、ライトとフリオのキヤツキヤウフフなところが見放題なんだぜ？」

ティーダ「わかったっス！いつてくるっス!!」ダツ……………スタスタ

バツツ「あれ？もう帰ってきた」

ジタン「やけに早いな。その手の訓練をしたのか？」

ティーダ「どんな訓練っスか…そうじゃなくて…」

ジタン「はあ？もうすでに鏡が設置してあった？」

ティーダ「そうなんスよ。多分反射の関係からして…多分この倉庫っスね」
バツツ「誰だ？おおよそクラウドかシコー…いやスコールあたりかな」

ガチャ

ティナ&ティファ&ユウナ「あ…」

バツツ「……………」

ティーダ「……………」

ジタン「……………」

ティファ「あ、あんたたちなんでこんなところに？」

ジタン「その言葉そっくりそのままリボンでも付けて送料込でおかえししてやるよ

…」

バツツ「どうせ鏡でライトとフリオのを見ようとしようとしてたんだろ？（オレ等も

しようとしてたけど…）」

ティナ「ギクツ…なぜそれを」

ユウナ「そんなこと言ってあなた達も似たような考えでしょう？」

ジタン&バツツ&ティーダ「うん、そだよ？」

ティファ「きっぱり断言するなよ」

バツツ「それにしてもよく考えたな鏡なんて…（オレ達も同じことしてたケド）」
ティファ「でしよでしよ!?! やっぱり私ってば頭いいのかな」

バツツ「やっぱり考えたのはティファか…」

ティファ「そうそういないってこんなこと考えられるの!!」

ジタン「いや、以外というもんだぞ?…結構身近に…」

ティファ「ん?何か言った?」

ジタン「いや、なんでも…」

ティーダ「シツ…誰かくるっス…」

ティナ「先生かな、かな?」

ティーダ「いや、先生達はこんなサンバのリズムで走ってきたりしないっス…」

ユウナ「サンバのリズム!?!」

ガチャツ

スコール「本当に大丈夫なのか?クラウド」

クラウド「心配ないだろう、どうせジタンかバツツ辺りがしかけたもんだろ」

そこにいたやつら「……………」

クラウド「ティ、ティファ!?! どうしてここに!?!」

ティファ「その言葉、そのままリボンでも付けて送料込でおかえしするわ」
バツツ「なあ、あの言葉今はやってんの？」

ティーダ「さあっス」

クラウド「ふ、ふふ深いいみは無いさ…なあ、スコール？」

スコール「あ、ああおれ達はただこう…風の導きによってだな…」

ティファ「何がどうなったらサンバのリズムで倉庫に行けなんて言う導きが来るのよ…」

クラウド「違う！あれはサンバではなく南米に伝わる伝統の踊りうっひよひよいバ
ターコーン…」

ティファ「ああもう口を開くな！」

ユウナ「クラウドさん顔は良いんですけど考えてる事が…」

ティーダ「あ、ちなみにサンバ…ではなくうっひよひよいうんたらかんたらのリズム
で来たのはスコールもっスよ」

ジタン「どこで知ったんだよそんな怪しいもの…」

スコール「ユーチューブで」

ティナ「最近のユーチューブなんでもありだね…」

バツツ「ていうかオレ達なんでここにいるんだ？」

ジタン「ん? そりゃあライトとフリオの……ああ!?!」

クラウド「どうしたジタン!?! まさか○○○までいったのか!?!」

ティファ「黙りなさい、鳥頭: 『サイレス』」

クラウド「——!?!——!?!」

バツツ「で、どうしたんだ? ジタン」

ジタン「どうしたもこうしたも! もうヤルことやってもう部屋から出ちまっただよ

!」

ユウナ「何と……」

ガチャツ

フリオ「何してるんだ? こんなところで」

ライトニング「ここは基本的に生徒の立ち入りは禁止だぞ?」

ティファ「あ、いつものライトだ」

ライトニング「? 何の話かわからんが早く出る」

ジタン「へいへーい」

ティファ「あ、そうだ明日さグラウンドワンに行かない?」

ユウナ「そうですね。明日も休みですし」

クラウド「——!?!——!?!」。

ジタン「なんて言ってるの？」

ティナ「それは良い考えだと言ってます」

ティファ「それじゃ決まりね!!明日の12時に集合ね!」

スコール「それじゃあおれはw o oとセシルの部屋とヴァンとたまねぎの部屋に伝えてくる」

ティナ「嫌な予感しかしない…」

まだまだ続くんだとよ、バツツ? b yファリス

第十三話 クラウド「どうしてこうなった…」ティファ

「パート1」

???
????????

ジタン「な、何だお前らは…」

「オレの名は珍佳須丸だ」

「私の名は地致墓院です」

ジタン「出会っていきなりなんだよ…っていうかお前らの名前…」

珍佳須丸「今、この世界は危機的状況にある。」

地致墓院「それを救うことができるのは、脱糞丸、あなたしかいないんです」

脱糞丸「なんだよ！脱糞丸って…って名前変わってる!？」

珍佳須丸「さあ！オレ達と共に!!」

地致墓院「真の悪に立ち向かいますよう！」

脱糞丸「いや勝手に話を進めるな…っていうか本当に名前!!オレはジタン

だー！ー！ー!!」

ガバツ

ジタン「ゆ…夢か…」

バツツ「zzzz…」

ジタン「なんだよ脱糞丸って…どつかの変人みたいじゃねえか…」

ジタン「そういえばあの地致墓院って奴ガーネットに少し似てたな…」

ジタン「高校に上がってから学校変わっちゃまったからなあ…今何してるんだろ」

バツツ「ピザでも食ってるよデブ…ムニヤムニヤ…」

ジタン「…オレもオレだけどバツツはバツツでどんな夢見てんだ…とりあえずきょうは早めに行くからもう起しとくか」

くぐラウンドワンく

ティファ「はーい！皆集まった〜？」

スコール「いや…ライトとフリオがまだ…」

ティーダ「あ！今来たっスよ」

ライト&フリオ「キヤツキヤウフフ」

w o l「OH…」

セシル「まあ…仲が良くて良いんじゃない？」

ヴァン「なーフリオ！後でおれ等とカラオケ行こうぜ！！」

クラウド「…空気読めよ…」

ティナ『『メテオ』』

ヴァン「のおおおおおおお！！」ガツンガツンガツン

ジタン「ちよっ…おれ等にもあたって…」

バツツ「あ…察した…」

セシル「…で結局」

ヴァン「」

バツツ「」

ジタン「」

ティナ「…『レイズ』」

ヴァン「死ぬかと思った…」

オニオンナイト「イヤ死んだんだよ!？」

スコール「…（まだ入口にすら入ってないのにすでに三人死亡するとは…）」

ティファ「はいじゃあ気を取り直して誰がどこに行くのかきめよっか？」

ジタン「じゃあオレとバツツとティードとヴァンとスコールはカラオケで」
スコール「おい勝手に入れるな」

ジタン「良いじゃん別に」

スコール「……………」

オニオンナイト「あ、じゃあぼくもカラオケで」

ティファ「んじゃ私と他の女子はボウリングで良い？」

ユウナ「もちろんです」

woo「私とセシルはこのあたりにいるから何かあつたら呼んでくれ」

バツツ「あれ？ライトとフリオは？」

クラウド「もう先に行った」

バツツ「ああ…はい」

ジタン「クラウドはどうするんだ？」

クラウド「そうだな、じゃあオレもカラオケに…」

ティファ「あ、店員さんあそこの鳥頭の人もボウリングで」

クラウド「は？」

店員「かしこまりました」

クラウド「いやいや待て待てオレはカラオケに…」

ティファ「つべこべ言わずに早く来る!!!」

クラウド「はい!!」

　　↓グラウンドワン　ボウリング場↓

クラウド「どうしてこうなった…」

ティファ「いいからいいからはやく投げる球選んで」

クラウド「…じゃあおれは13ポンドを…」

ユウナ「えくとじゃあ私は…この132860ポンドのやつにします♪」

ティファ「うゝんじゃあわたしは180000ポンドで」

ティナ「私力無いから100000ポンドにする…」

クラウド「……………」

クラウド「180000ポンドで…」

　　↓グラウンドワン　ボウリング場23番席↓

クラウド「ぬおお…お、重い…」

ティファ「なにしてんのよだらしないわねー」

クラウド「運ぶだけで筋肉痛になりそう…」

ティファ「じゃあ一番手は私ね！それじゃ…」

ユウナ「ちよつと待ってください」

ティファ「？」

ユウナ『オーラ』

ティファ「あ、ありがと…それじゃ」ブンツ

シユパン

クラウド「180000ポンドの球が空気摩擦に耐えきれずに蒸発した…」

ティファ「あちゃーそんなに力入れてないんだけどなー」

クラウド「あれで本気じゃないだと…」

ユウナ「じゃあ次は私ですね」

クラウド「頼むから普通のボウリングをしてくれ…」

ユウナ「えい☆」コロソ

クラウド「ふう…やつとまともに…」

ズガガガガガガガガガ!!!

クラウド「なんで球が地面をえぐりながら進むんだ…」

グチャツ

クラウド「そしてなんでピンが粉々になるところか消滅するんだ」

ユウナ「あ、少しやりすぎましたね…『リターン』」

クラウド「あ、もとに戻った」

ユウナ「次、クラウドさんですよ？」

クラウド「どうしてこうなった…」

　　一方そのころ　　グラウンドワンカラオケ

ジタン「もしかしてだげど〜♪」

バツツ「もしかしてだげど〜♪」

ジタン「もしかしてだげど〜♪」

バツツ「もしかしてだげど〜♪」

ジタン「それっておいらを」

ジタン&バツツ「さそってるんじゃないの〜?♪」

スコール「帰りたい…」

　　グラウンドワン　　UFOキャッチャーコーナー

フリオ「キャツキャツ」

ライト「ウフフ」

くグラウンドワン ゲームコーナーく

w o i 「ここもかなり平日なのにかなり混んでるな」

セシル 「そうだね…ん？」

セシル 「ブ〇イブルー？」

ジ〇 『楽しもうか兄さん』

ラ〇ナ 『ジ〇！てめえ馬鹿か!?!』

セシル 「……………」

w o i 「どうした？セシル」

セシル 「シンパシーを感じる…」

続くんだけ!!ゴラア!!byナイン

第十四話 クラウド「どうしてこうなった…」ティファ「パート2」

くグラウンドワン ボウリング場く

ユウナ「次、クラウドさんですよ？」

クラウド「どうしてこうなった…」

ティファ「早く投げなさいよー」

クラウド「持つてるだけで全身の骨が悲鳴をあげてる…」ミシミシッ

クラウド「だがここで逃げたら…」

女子勢「キラキラ」期待の眼差し

クラウド「オレの全てを断ち切られる!!」

クラウド「て言うか自分でキラキラとか言うなよ…」

ティナ「なかなか投げないね…」

ティファ「変な儀式かなんかしてんじやないの？ほら、前のうんからかんたらバツカ
ルコーンだったっけ？」

ユウナ「違いますよ。うんたらかんたら…」

クラウド「頼むから集中して投げさせてくれませんか？」

ティファ「あつごめん！」

クラウド「ふう……うおおおおおおお!!」

クラウド「アツガイ!!!」ブンッ

ユウナ「アツガイ!?!」

カコーコーン

ティファ「あららー、一個残っちゃったねー」

クラウド「ハア…ハア…」

ユウナ「だ、大丈夫ですか？」

クラウド「いや…大丈夫じゃない…」

クラウド（あんなものをティファは蒸発!?!どうなってんだ!?!）

ティナ「じゃあ次は私かな…」

クラウド「ああ…そうだな…（ティナは非力な方だし大丈夫だろう）」

ティナ「…やあつ」コロコロ

クラウド「今度こそ普通に…」

ティナ「『グラビデア』」

カランカラン

クラウド「……………」

グラウンドワンカラオケ

ティーダ「この大空に♪」

ヴァン「キャプテン」

ティーダ「翼をひろげ」

ヴァン「おならで」

ティーダ「とんでいきたくいよ」

ヴァン「かなかなかかなか」

ティーダ「悲しみのない」

ヴァン「おかわり」

ティーダ「自由なそらに」

ヴァン「まつわか」

ティーダ「翼はためかせ」

ヴァン「誰かのお金で焼き肉」

ティーダ「いきたい」

スコール「もういい…マジで帰る…」がたっ

ジタン「お？スコールどこ行くんだ？」

スコール「少しドリンクバーに」

ジタン「ああ、そうか」

スコール（ふっ…ちよろい）

バツツ「コップ持って行って無いじゃん」

スコール「・・・・・・チツ」

ジタン「オレ少し疲れたから寝るわ」

バツツ「おう！順番来たら教えるから」

ジタン「分かった…」

ジタン「zzz…」

???

??????

珍佳須丸「来たか…脱糞丸」

ジタン…ではなく脱糞丸「もういいよ…それで…あれ？女子の方は？」

珍佳須丸「カノジョは今少し用事があるのでな」

脱糞丸「そうか……後気になったんだけどさ」

珍佳須丸「？」

脱糞丸「なんで下何もはいてないんだ？」

珍佳須丸「何を言ってるんだ。いつもこうだったじゃないか」

脱糞丸「いつもこうだったの!？」

珍佳須丸「前一緒にファミレスに行ったじゃないか！」

脱糞丸「これで!？」

珍佳須丸「戦う時もこうだっただろ？」

脱糞丸「下半身の防御薄すぎだろ……」

珍佳須丸「それより、どうだ？オレ達と共に世界を……」

脱糞丸「あ、カラオケ順番来たから戻るわ」

珍佳須丸「ふっ……いいだろう脱糞丸。私はいつでも待っているぞ……」

くグラウンドワン カラオケく

バツツ「お、丁度いいな」

ジタン「珍佳須丸……」

バツツ「……は？」

ジタン「いや！何でもない気にすんな！」

バツツ「お、おう…じゃ何歌う？」

ジタン「とりあえずニコニコ流星群で！」

オニオンナイト「とりあえず歌う曲じゃないよそれ…」

ヴァン「あれ？そういえばスコールは？」

ティーダ「あれ？ホントだ何処行つたんだろ」

くグラウンドワン　カラオケ前く

スコール「ふう…案外ラクな任務だったな…」

???「あのう…すみません」

スコール「ん？なんだ悪いがオレは今忙しいんだg…」

???「バツツって人知りませんか？」

スコール「!?!?知らないな…」

???「ふふ…知ってるって顔に出てますよ？」

スコール「……だったら何なんだ？」

???「どこにいるか教えてくれませんか？」

スコール「こういってああいってそこいったところだ」

???「…案内して下さいよう…」

スコール「……」

「ありがとうございます☆」

「おい！ファリス姉ちゃんこの人が教えてくれるって！」

「おおい！まじか！？いやー悪いな！ハッハッハ！」

スコール（何だ…この男勝りな女は…）

ファリス「おい！レナ!!この人が教えてくれるってよ!!」

レナ「もう！大声出さないでください…」

スコール（何なんだこいつら…）

「あ！わたしクルルっていいいます」

スコール「そうか…覚えておこう（二秒ほど）」

ファリス「ほらほら早くバツツのとこおしえてくれよ!!!」

スコール「…耳元で大声出さないでくれるか…」

ファリス「わるいな！もとからこんなんだ！ハッハッハ!!」

スコール「…行くぞ」

くグラウンドワンカラオケく

バツツ&ジタン「真っ赤なく誓い〜♪」

コンコン

ティーダ「ん？誰ツすか？」

スコール「オレだ」

バツツ「あ、マジで!?ちよつと演奏中止で」

ジタン「ああ」

ガチャツ

バツツ「おい！スコール!!お前帰ろうとしただ r…」

クルル「バツツお兄ちゃーん!!」だきつ

バツツ「く、クルル!?!…てことは…」

レナ「ご無沙汰してます」

ファリス「よう！バツツ!!」

バツツ「」

ジタン「おい、死んだふりすんな」

バツツ「くそつくつそ！」

ヴァン「一気に大人数になったな…」

スコール（来るんじゃないなかつた…）

続
ぎ
ま
す

第十五話 クラウド「どうしてこうなった……」 ティファ

「パート3」

くグラウンドワン カラオケく

クルル「でねー、学校でこんなことがあってね！」

バツツ「あー、うん！へーそうか（棒読み）」

ジタン「おい……バツツ大丈夫か？何か体に変色してないか？」

ティーダ「ホントっス！カメレオンっス！」

フアリス「あー……バツツは昔からこんなんだ」

レナ「不思議なことに私達が離れるとすぐに良くなるんですよねえ……」

ジタン「へ……へえ」

ジタン（こいつら、バツツが自分達のことを嫌ってるということに気づいてねえのか
？）

バツツ「……」

バツツ（早く帰れー！！この馬鹿姉妹共！！せつかくの休日を邪魔すんじゃねえ！！）

フアリス「あ、そうだ！ガラフのじっちゃんから伝言もらってきといたんだった!!」

バツツ「あ？ああ。あの爺さんか……まだ生きてたんだ……で、なんて？」

フアリス「ええとなあここに手紙が……あつたあつた！じゃあ読むぞ……ゴホン」

フアリス裏声「ディア、ガラフ」

バツツ「最初から違う!!そこはディアバツツだろ!?しよっぱなからちがう!!」

フアリス裏声「ろくに彼女もできないまま中学生生活を過ごし、この高校生活ものほほん悠悠々自適に過ごしている事と思いません。」

バツツ「なんか腹の立つ言い方だな……もつとマシな言い方は無かったのかよ……」

フアリス裏声「そんな夢も希望も彼女もない愚息にこのガラフお爺ちゃんがひと肌ぬいであげることになりました……」

バツツ「なりましたじゃないだろ！他人事見たいじゃねえか!」

フアリス裏声「少ないですが、これで美味しいものでも食べてください」

バツツ「あ、文章クソだけどありがたいなあ」

バツツ「最近金欠だったしなあ……確かに親ってありがたいなあ」

フアリス「ほい」

バツツ「いくらぐらい入ってるのかなあ……って」

バツツ「箸かい!!!」

バツツ「つていう!か箸に多いも少ないもないだろ!」

ジタン「まあまあ落ち着けて…」

フアリス「そんな事よりなんか歌おうぜ!」

バツツ「そ、そうだな…じゃあ『紅蓮の○矢』でも歌うか?」

ジタン「お!それならオレもうたうぜ!」

ヴァン「オレも!!」

オニオンナイト「それなら僕もうたえるよ!」

レナ「あれ?そういうえげあの元気な子は?」

ジタン「あいつならドリンクバーに行つたよ」

レナ「ああ、そうですか」

くぐラウンドワン ドリンクバーく

ティータ「なにこれ!?なにこの発見!!コーヒーとこれがこんなに合うなんて!!……な
んかこう…:色んな味が合わさって…うま!うま!うま!」

幼女「おかあさん、あのおにいちちゃん…」

母親「シツ!見ちゃいけません!」

くグラウンドワン ゲームコーナーく

W O I 「お、おいセシル…お前…」

セシル 「……………」

○ン||キサラギWIN!!

W O I 「しかもパーフェクト勝ち…」

セシル 「まだだ…もつと6Dを確実に当てられるようにならなければ…」

W O I 「……………」

くグラウンドワン ボウリング場く

ティファ 「どうする?もう一ゲームする?」

クラウド 「いや…もういい……」

ユウナ 「ええくく!でもまだ四ゲームしかやってないじゃないですか!!」

ティナ 「まだここからが本番…」

ティファ 「そうよ!ほらほら、男なんだからレーンのだ真ん中で体育座りで感傷的に
なつてないで!!」

クラウド「……………」

ティファ「もう仕方ないわねえ……」ずるずる……

クラウド「……………」

ドグチャツ

ティファ「イエーイ!! ストライク(?!)!!」

クラウド「ああ……そうだな……」

ティファ「次あんたよ?」

クラウド「そうか……」よろよろ

ユウナ「大丈夫でしょうか……クラウドさん」

ティナ「ティファが行って手伝ってあげるのが良いと思う……」

ティファ「もう……しようがないなあ」

クラウド「すまな……い……ん?」

ティファ「?どったの?」ばいーん

クラウド「／／／いや!何でもない!!」

ティファ「そう? (フフフ……さりげなく胸をちらつかせて誘惑作戦成功……)」

クラウド「ああ……ティナ、投げるから少し後ろに……」

ティファ「え？どうして？」

クラウド「え」

ティファ「あんたもう投げる気力も残ってないじゃない。だから私が手伝って…」

クラウド「断る!!」

ティファ「なんで？」

クラウド「う…それは……」

ティファ「あれれー？何かかたいものが〈棒読み〉」

クラウド「らめええええええええええ!!」ダッ

ユウナ「あつ……クラウドさん!？」

ティファ「前下半身を押しえながら必死に走るクラウド……」

ティファ「やめい」

ティファ「チツ逃したか……」

ユウナ「あと一歩でしたね」

ティファ「おしかつた……」

ティファ「よし！じゃあそろそろラストスパートといきますか!!!」
女子勢「オオoooooooooooooooo!!!」

↳その頃グラウンドワン前↳

ウイーン

スコール「馬鹿馬鹿しい…帰るか…ん？」

スコール「新発売のジュースか…しかもおまけとして萌ッ娘フィギュア付き!？」

スコール「…」周りの確認

スコール「ま、まあ一個くらいなら」

つ・づ・く。

第十六話 クラウド「どうしてこうなった…」ティファ

「あきた。」クラウド「!？」

↳グラウンドワン トイレ↳

クラウド「ハア…ハア……」

クラウド「あ、危なかった…もう少しで社会的地位を失うところだった…」ギンギン

クラウド「くそっ 鎮まれ！オレのクリスタル!!」

クラウド「……」

クラウド「でも、ティファ無防備すぎるだろ…前の修学旅行前の時も…」

↳第一話 教室↳

ティファ「えっ！クラウドしらなかったの!？」ムネチラツ

クラウド「お、おう…／／」

↳グラウンドワン トイレ↳

クラウド「…といったようにティファは自分の周りの事を全く考えていない!!!この数年間オレはあいつの無防備さに何度も苛まされてきた!!!」

クラウド「……………」

クラウド「オレは今誰に話してるんだ…。とりあえず場所を変えるか」

くグラウンドワン カラオケく

クルル「今日は楽しかったね！お兄ちゃん!!」

バツツ「…エエソレハマアトテモトテモ」

ジタン「おい大丈夫か!？」

バツツ「大丈夫だあ…オレはこの通りピンピンしてるぞ…」フラフラ

ヴァン「いや…全然大丈夫には見えないけど…」

フアリス「じゃああたし達はじっちゃんのお面倒見なきゃいけないからもう帰るから」

レナ「何かあったらまた連絡してねく♪」

バツツ「ああ…分かった（絶対にしねえ…）」

クルル「じゃあ私達もう帰るから！お兄ちゃん！それとお兄ちゃんのお友達もまたね

!!
!!

ジタン「はいよー。またな!!」

ヴァン「またな!!」

オニオンナイト「うん！また会えたらいいね！」

バタン

ジタン 「さて…時間も時間だし…そろそろオレ達もおいとましましょうか」

バツツ 「はあ…疲れた…」

ヴァン 「バツツはその…何だ…気の毒だったな…」

オニオンナイト 「それにしてもなんでバツツはそんなに嫌なの？」

バツツ 「それはいずれ明かされるだろ？」

ジタン 「さては作者まだ考えてないな？」

バツツ 「さあ？それよりも早く帰る準備とこうぜ！ティファとか待たせると後々が

怖いぜ…」

オニオンナイト 「そうだね…」

ジタン 「そうだな…？？」

バツツ 「ジタン？どうした？」

ジタン 「バツツ…悪いがオレちよつと用事できたわ」ガチャツバタン

バツツ 「あ！おいジタン!!…行っちゃまったよ…」

くグラウンドダウン カラオケ前く

ジタン 「おい！ガーネット!!!」

ガーネット「え!？」

ジタン「やっぱりガーネットだったか！」

ガーネット「じ、ジタン君!?! どうして!?!」

ジタン「それはこっちが聞きてえよ!! お前結構遠い高校に行ったんじゃないか
?」

ガーネット「ああ、今日はたまたま。友達一緒に来たの」

ジタン「そうだったのか…」

ジタン「高校、うまくやってるか？」

ガーネット「うん、それなりに。ジタン君は？」

ジタン「オレもそれなりにうまくいつてるよ…もうすでに5、6回死んでるけど…」

ガーネット「え!?!」

ジタン「あ! 気にすんな! 何でもねえ!!」

ガーネット「そう…ならいいけど…ジタン君昔っから怪我とか多かつたから…」

ジタン「そうだっただけか? うくん…あんま覚えてないなあ…」

ガーネット「でも！体には気をつけてね!!ジタン君が怪我するの…私…すごくイヤだから…」

ジタン「ん？何か言った？」

ガーネット「う、ううん!!何でもない!!…あつ！皆待たせてるから私もう行くね！」

ジタン「おう！頑張れよ!!」

ガーネット「あ、ありがとう／／／」

ジタン「…あ、ヤベ電話番号聞きそびれた」

↳グラウンドワン ゲームセンター↳

アナウンサー「今日行われたBBCP大会の優勝者はオンキサラギを使い、決勝戦でもパーフェクト勝ちの圧巻の強さを誇ったセシルさんです!!」

セシル「始まった瞬間にもう勝つ自信がありました」

W o l 「……………」

↳グラウンドワン トイレ前↳

ティファ「状況報告!!」

ユウナ「はい!!目標のクラウド君の補獲に成功。以上であります!!」

ティファ「よろしい!!」

クラウド「くそっ離せ!!」

ティファ「ふっふっふっ…そうは問屋が…なんだっけ？」

クラウド「おい!!作者辞書使え!!」

ティファ「まあ何にしてもここで引き下がるわけには…」

ヴァン「そこで何してんのー？」

クラウド「た、助かった…」

ティファ「チツ…空気野郎が…」

ヴァン「え…」

ティナ「一生オイオイヨでも言ったらば…？」

ヴァン「…」

ジタン「やっと追い付いた…ってヴァンどうした？ハトがアルテマ食らったみたいな顔してるが」

バツツ「いやいや！ハトがアルテマ食らったら素粒子すら残らねえから!!」

オニオンナイト「そういうえばw o oとセシルは？」

クラウド「噂をすればなんとやらってやつか」

w o o「皆集まったようだな」

バツツ「え？まだフリオとライトと…あとスコルも来てねえじゃん」

セシル「フリオとライトはちよつと前に二人で行きたいって行ってしまったよ」

ユウナ「まあ」

ティファ「せめてホテルに行かない事を祈るしかないわね…」

バツツ「じゃあスコルは？」

w o o「さっき自分の部屋の写真を送ってきた」

ジタン「あんやろうやっぱり先に帰ってたのかよ…」

オニオンナイト「…ちよつと待って！ティーダは？」

クラウド「言われてみれば…」

ピーン
ピーン
ピーン
ピーン

ティファ「アナウンス？」

アナウンス「D D F F 学園のティーダ君のお知り合いの方、至急受付まで来てくださ
い」

そこにいた全員「……………」

その後ドリンクバーで飲みすぎたティーダが発見された。

「ガラフの家」

ガラフ「フアリスや。飯はまだかのお」

フアリス「もうおじいちゃん！ごはんはさつき食べたでしょ？」

ガラフ「お？そうじゃったか？」

クルル「もうボケがはじまつてる…」

つづく

家庭科編

第十七話 バッツ「家庭科、か…」

（次の日 教室）

セシル「おはよう、ジタン、バッツ」

ジタン&バッツ「おう！」

セシル「今日からまた学校だね」

バッツ「あゝ…何か久しぶりの教室な気がするな」

セシル「まあ修学旅行もあつてその後皆で遊びにいったからね。多分五日ぶりぐらいじゃないかな？」

ジタン「でも全然ピンとこねえなあ…」

セシル「確かに…」

バッツ「そういえばクラウドとかは？大抵スコールと一緒に早めに来るはずだが…」

セシル「あはは、多分クラウド達もまだ休日気分が抜け切れていないんだよきつと

………あ、噂をすればなんとやらだね。クラウド、スコールおはよう」

クラウド「ああ、おはよう」

スコール「……………」

バツツ「スコールは相変わらずだな！」

スコール「余計なお世話だ」

セシル「ところで、もうみんな感想文は書いた？」

クラウド「ああ、一応はな」

スコール「オレもだ」

バツツ「用紙を燃やした」

ジタン「同じく」

セシル「バツツ…ジタン…今日が提出期限なんだよ？」

ジタン「気にすんなって!!」

バツツ「それに、もう朝礼始まるぜ！さっさと席に着こうぜ!!」

woo「これから、朝のHRを始めます。起立、気を付け、礼」

「よろしくおねがいします」

コスモス先生「はい、皆さんおはようございます」

コスモス先生「まずは欠席者の連絡からですね。…ええと、今日はフリオニール君とライトニングさんがお休みです」

ティファ「なんで？」

コスモス先生「なんか二人とも下半身が大変なことになって動けないから休むだとか…」

ティファ「あの後結局ヤツたんかい…」

コスモス先生「事情はよく分かりませんが、二人とも大事にならないければいいんですが…」

スコール「いや…あんたが知らないうちにあいつら大事じゃ済まないところまで突っ走つてると思うが…」

woo「先生、その他の連絡は？」

コスモス先生「ええと…他には…あ！忘れてました！一つ大事なことを言い忘れてました」

コスモス先生「今日の家庭科は全員家庭科室に集まってください。以上です」

woo「これで、朝のHRを終わります。起立、気を付け、礼」

「ありがとうございます」

ティナ「ねえ玉ねぎ君、今日の家庭科って何時間目？」

オニオンナイト「確か一時間目だって気がするけど」

ティーダ「マジで!?!しよっぱなから飯がくえるっスか!?!」

ジタン「そういうことになるな」

ヴァン「でも、何作るんだろうな？」

ジタン「それは行ったら分かるだろ? ほら! 出発進行ー!!」

ゝ一時間目 家庭科 家庭科室ゝ

ジタン「で、今日作るのは…」

コスモス先生「はい、カレーになります」

スコール「いきなり腹にガツンとくるものが来たな…」

ティファ「で先生、班分けは？」

コスモス先生「班分け?…あ、ごめんなさい…材料買ってくるのに気を取られすぎて

すっかり忘れてました」

スコール（大丈夫なのか…この教師）

ティファ「もう! しっかりしてくださいよ!!」

コスモス先生「すみません…まだ新任なので…」

バッツ「じゃあさ、好きにグループ作っていい事にしようぜ！」

ジタン「お！それいいな!!それでいいだろ！先生」

コスモス先生「あ、はい」

ティーダ「それじゃ決まりっす！」

くバッツ&ジタン&ヴァンチームく

バッツ「じゃあジタンとヴァン！一緒にやろうぜ！」

ジタン「全然構わねえぜ!!」

ヴァン「何か楽しそうだな!!」

ジタン「ていうかカレーってどう作るんだ？」

バッツ「とりあえず切ればいいんだろ切れば！」

くオニオンナイト&ティナ&セシルチームく

ティナ「玉ねぎ君、一緒にやる？」

オニオンナイト「うん！いいよ!!セシルも一緒にどう？」

ティナ「え…」

セシル「良いのかい？じやあ遠慮なく」

ティナ「うん…一緒に頑張ろ（チツ余計なものか）」

くティファ&クラウド&スコールチームく

ティファ（ククク…ついにこの時が来た…：男を射止めるにはまず胃袋からって言うしね!!昨日のグラウンドワンではうまく逃げられたけど今回はものにしてみせる!!）
グツ

クラウド「スコール、野菜の皮剥けるか？」

スコール「人並みには」

ティファ「ちよつあんた達なんで目の前に女子がいるってのに何全部やろうとしてんのよ!!ちよつと!!」

くティファ&w o r &ユウナチームく

ティファ「ユウナが作ってくれるんだつたらオレ何でも食べれるっス!!」

ユウナ「ティファがそう言ってくれると私も頑張れるよ／／…あ、そうだw o r 君こつちこつち」

W o l 「なんだ？」

ユウナ 『ブレイク』

W o l 「!? ……」カチーン

ティーダ 「? W o l どうしたっすか? 固まつて」

ユウナ 「ちよつと調子が悪いみたいなんで私が椅子に…よいしょ」ガツン

ポロっ

ティーダ 「今、W o l の腕がもげたような…」

ユウナ 「気のせいです☆」

ティーダ 「そ、そうすか…」

ユウナ (あ、あぶなかつた…)

く ティファア & クラウド & スコール チームく

ティファア 「皮剥き貸しなさいよ! 私もやるから!」

クラウド 「いや…ティファアお前絶対…」

ティファア 『さーてやりますか!!』

グチャツ

ティファ 『もう！持っただけでつぶれるなんて腐ってるわねこのニンジン』

クラウド 「と言う事になりかねん…」

ティファ 「なりません!! スコール!! 貸して!!」

スコール 「ほい」

ティファ 「見てなさい!! 私の華麗なテクを…」

グチャツ

ティファ 「あ……………」

クラウド 「……………」

スコール 「……………」

ティファ 「い、今のは少し力みすぎて…」

クラウド 「スコール、野菜を切る時は猫の手がいいらしいぞ」

スコール 「ああ、小学の時に習った」

ティファ 「待ってー！ー！ー！！」

つづく

第十八話 バッツ「ヒャッハー!!切り刻むぜえー!!!」

前回からの続きです

↳ テイファ&クラウド&スコールチーム

テイファ 「お願い!!後もう一回チャンスちょうだい!!」

スコール 「そうは言ってもな…」

クラウド 「もうすでに野菜の皮剥きは終わってしまったし…(一つはもう使い物にならないが…)」

テイファ 「じゃあ私野菜切るの手伝うから!!」

クラウド 「野菜を切る?全てを断ち切るの間違いじゃないのか?」

スコール 「皮剥きよりひどい事になる事が容易に想像できるんだが…」

テイファ 「……」

クラウド 「テイファ、悪いがここはオレ達に任せて…」

テイファ 「うっ…うっ…」

テイファ 「ふええ……」ポロポロ

クラウド 「テイ、テイファ!?」アセアセ

スコール「お、おい！どうする!？」

クラウド「どうすると言われても…」

ティファ「えぐっひぐッ…」

クラウド「…ティファ！手伝うのは別に構わないからどうか泣くのはやめてくれ!!」

ティファ「…本当?」

クラウド「ああ!」

ティファ「よっしやー!!それじゃあチャツチャと作っちゃいましょ!!」ケロッ

クラウド「は?」

ティファ「ほらクラウド！早くしないとビリになっちゃうわよ!!」

クラウド「お、おう…（心配して損した。全然平気じゃねえか…」

ティファ（危ない危ない…さっきはガチの方で涙出ちゃった…）

くティファ&ユウナ&w o r（石化中）チームく

ユウナ「ティファ、野菜は切り終わった?」

ティファ「もちろんっス!!全部できたっス!!」

ユウナ「わあ…：ティードだってもしかしたらお料理とか得意なのかもしれないね！」

ティード「ゆ、ユウナにそう言ってもらえるとうれしいっす！」

ユウナ「フフフ…：じゃあ今度は私が頑張ろうかな」

ティード「楽しみっす!!!」

ユウナ「えーと…：まずお肉を炒めて…」

ティード「わくわく」

ユウナ「次に野菜を炒めて…」

ティード「わくわく」

ユウナ「隠し味にマヨネーズとタバスコを入れて…」

ティード「わくわ…：ん？」

ユウナ「それと甘みを付ける為に砂糖おさじ10杯と酸味を付ける為に青酸カリを

…

ティード『スリプル』!!」

ユウナ「最後に私の愛情を…：むにやむにや…」

ティード「あ…：あぶ、あぶねえ…：ユウナの愛情を頂く前に昇天するところだった…」

ユウナ「zzzz…」

ティード「さて、と…：どうしよっかなあ…：ユウナは起こせないしw o oは全然石み

たいに動かないしなんか片腕がプランプランしてるし……」

wool「カチーン

ティーダ「……………」

ティーダ「仕方ない!!オレがつくるっすか!!大体は作り方頭に入ってるし何とかなるっしょ!!」

くオニオンナイト&セシル&ティナチームく

ティナ「玉ねぎ君、違うよ野菜とかお肉を切るときは手をこうして……」

オニオンナイト「あ、うん。ありがとう／＼／＼(ティナ顔近い顔近い!!良い匂いが!!)」

ティナ「うふふ……」

セシル「ねえ、オニオンナイト。この野菜はどうする?」

オニオンナイト「／＼／＼……あ!セシル!!その野菜は……」

ティナ「…チツブラコン野郎が……」ボソツ

オニオンナイト「びくっ…ティ、ティナ?何か言った?」

ティナ「あ、ううん!何でもないよ!!(つい口に出ってしまった……)」

オニオンナイト「そう?ならいいんだけど」

くバッツ&ジタン&ヴァンチームく

バッツ「ヒャッハー!!!切り刻むぜえー!!!」

ヴァン「いつけー!!!」

ジタン「ザクツと行つちまえ!!」

バッツ「うおららららららら!!!」

ダラララララララララ!!!

ジタン「おお!何という包丁さばき!!」

ヴァン「すげえ!!すげえよ!!!手の残像すら残すことなく超高速で切り刻んでる!!」

バッツ「まだまだ加速するぜ!ヒャッハウ!!」

ジタン「え::おまえそこ::」

バッツ「ん?どうした?ジタン」

ジタン「それ前の班が使ったゴミじゃね?」

バッツ「え::」

ぐちよぐちよぐちよぐちよべちやあつ

ヴァン「うおおおおい!?なにやっつてんだよバッツ!」

ジタン 「あ…ヤベ間違えてごみもろとも鍋に入れちゃった…」
バツツ&ヴァン 「おい!! どうするんだよ!？」

ジタン 「だ、大丈夫だろ? どうせ熱で殺菌されるんだろ?」

バツツ 「まあ…確かに…」

ヴァン 「言われてみれば…」

ジタン 「ほら…だから大丈夫だって…ん?」

バツツ 「どうした?」

ジタン 「いや…鍋が…」

ヴァン 「鍋? 別になんとも…」

ボウンツ

バツツ 「ギャー!! 鍋のまがましい物体からなんか危なそうなガスが!!」

ヴァン 「くさつくつき!!」

ジタン 「目があけてられねえ!!」

バツツ 「どっかに調味料あるだろ!? それをテキトウにぶちこめば何か反応して収まる

だろ!？」

ジタン 「おお!! ナイスアイデア!!! 確かこの棚の中に…」

バツツ 「早くしてくれ!! 臭くて死ぬ!!」

バツツ「何度も死んできたから分かる（↑今までで約10回以上死んでいます）…この
感覚は…」

バツツ&ジタン&ヴァン「オレ達に死亡フラグが立つ時!!」ドンっ

カレーがどおおおおおおおおおん!!!

バツツ&ジタン&ヴァン「きやつほい☆」

つづく

第十九話 バッツ「てめえ!裏切りやがったな!？」

また前回からの続きです

どおおおおおおおおおん!!

くクラウド&ティファ&スコールチームく

クラウド「な、なんだ!？」

スコール「どうやらバッツ達の班の方からだが…(あいつら、またやらかしたか…)」
ティファ「え?何?何かあったの?」

クラウド「あ…ティファは鍋から離れないようにしといてくれ。カレーが焦げるから」

ティファ「あ、うん!!任せて!!」ぎゅう

グニヤツ

ティファ「あ、また混ぜる為の何かしやもじみたいなのが曲がつちやった♪」
クラウド「これで何本目だ…それを壊したの…」

ティファ「うくん…分かんない☆」

クラウド「……………」

スコール「……………」

ティファ「うう…そんな目で見ないでよ…こつちだつて頑張つてんだから…」

クラウド「スコール、ティファから目を離さないようにしといてくれ」

スコール「あんたはどうするんだ？」

クラウド「オレはちよつと様子を見てくる」スタスタ

スコール「あ！おい！…行つちまったよ…」

～ティーダ&ユウナ&ウォー（石化中）チーム～

ユウナ「zzz…ん、あれ？」

ティーダ「あ、ユウナ起きたツすか？」

ユウナ「あの、もしかして私、寝ちゃってました？」

ティーダ「ぐつすり眠ってたっすよ!!」

ユウナ「そう…ごめんなさいティーダにばっかり迷惑かけちゃって…」

ティーダ「全然関係無し!!」

ユウナ「そう言ってくれてありがとう…今度は私の手料理食べさせてあげるからね？」

ティーダ「あ、ありがとうっス…」

ユウナ「？」

ティーダ「そうそう!!迷惑と叫びたらw o o っス!!!全然手伝ってつくれなかったっス！」

ユウナ「あ(そういえばいたんだこの人…)」

ティーダ「全然動かないのになぜか片腕だけはプランプランしてるっス」ツンツン

w o o っ」カチーン

ユウナ「アツ!触っちゃだめです!そこテープで留めてあるだけですから!!」

ティーダ「え!?!」

ユウナ「あ!…いえ何でもありません…一応『エスナ』」

w o o っ」はっ!私は一切何を…」

ティーダ「あ!もとに戻ったっス!!」

ユウナ(腕がちやんと治ってますように…)

くバツツ&ジタン&ヴァンチームだったところく

クラウド「何がどうなったらカレーが大爆発を引き起こすんだよ…って言っても…」

バツツ「」

ジタン「」

ヴァン「」

クラウド「当の本人達は死んでるし…」

ティナ「何があったの？」

w o o「ひどい有様だな…」

コスモス先生「何があったんですか？」

クラウド「w o oと先生とティナか、丁度良かった。この馬鹿どもを生き返らしてく

れないか？」

ティナ「え？また死んだの？バツツ達」

クラウド「ああ…」

ティナ「…（こんなことで時間使いたくないんだけど…）『レイズ』」

パアアアアアアアツ

バツツ「う、うくん…」

ジタン「あれ?」

ヴァン「オレ達、さっきカレーの爆発食らって…ん?」

W o l「状況を説明してもらおうか?そこの三人!」

ジタン「説明しろって言われてもなあ…」

バッツ「急にカレーが爆発したとしか言いようが無いんだよな…」

ヴァン「そうそう」

W o l「貴様らそれが理由になるとでも思っているのか!?!先生!どう思いますか」

コスモス先生「えく…私新任だからこんな時にどんな対処をすればいいのか分からないんですよ…」

クラウド「あんた本当に教師かよ…」

W o l「…とにかく!!こんなことをした犯人は誰だ?」

ヴァン「バッツとジタンです」サラッ

バッツ&ジタン「!?!」

W o l「よし、お前ら職員室行くぞ」

バツツ「てめえ！裏切りやがったな！」

ヴァン「ゆるせ。オレハシヨウキニモドツタ」

ジタン「何のネタだよそれ!?!おいヴァン!!後で覚えとけよ!?!」

ガラツバタン

クラウド「行っちまった…」

スコール「おい、クラウド、カレーできたぞ」

クラウド「そうか…あ、ヴァン」

ヴァン「何？」

クラウド「お前もうカレーないだろ？だから一緒に食べないか？」

ヴァン「マジで!?!良いの？」

クラウド「ああ」

スコール「意外と優しいんだな、あんた」

クラウド「そういう訳じゃないさ。ただ…」

スコール「ただ？」

クラウド「ティファが作ったものをオレ達だけではとても食べられそうになかったか

ら…」

スコール「ああ…なるほど」

ティファ「そこー!!早く食べないと覚めちゃうわよ!?!」
クラウド「はいはい…」ぱくっ

くオニオンナイト&ティナ&セシルチームく

オニオンナイト「う…」

ティナ「さ、一杯食べてね／／／」

オニオンナイト「う、うん(何だこのバイオとグラビデとデスを混ぜ合わせたようなものは!?)」

オニオンナイト「いただきます…」ぱくっHP9999／9999

ティナ「どう?」

オニオンナイト「う、うん…とても美味しいよ…」HP9999／7200

ティナ「本当!?!良かった!!」ニコッ

オニオンナイト「う、うう…」ぱくっHP9999／5700

ティナ「そんな…泣いてまで喜んでくれるなんて…」

オニオンナイト「ううう…」HP9999／3000

ティナ(これが幸せってものなのかな?フフっ)

オニオンナイト「ご、ごちそうさま…でし…た」HP9999/1
ティナ「全部食べてくれるなんて…」
セシル「将来が恐ろしいな…」

くティーダ&ユウナ&wooチームく

ティーダ「ど、どうっスか？」

ユウナ「ええ！とても美味しいです！」

woo「ティーダにこんな取り柄があるとは…」

ティーダ「喜んでもらえてこっちもうれしいっス！」

ユウナ「ティーダってスポーツもできて料理もできるんだね！私憧れちゃうな」

ティーダ「そ、そんな／＼／」

woo「あとはもう少し勉強を頑張らなければな」

ティーダ「うう…それは言わないでほしいっス…」

ユウナ「フフツ」

くクラウド&ティファ&スコールチームく

クラウド「!?!」

ティファ「ど、どう?」

クラウド「う…」

ティファ「う?」

クラウド「うまい…」

スコール「ああ…確かに…これは文句なしでうまい」

ヴァン「オレおかわりで!!」

ティファ「ほ、ホントに!?!…良かったあ…」

スコール「泣くなよ…」

クラウド「ティファの以外な一面を見た気がする…」

くその日放課後 教室く

バツツ「おい!ヴァン!!てんめえよくも!!」

ジタン 「あの後オレ達反省文5枚くらい書かされたんだぞ!」

ヴァン 「ホント悪かったって!!お詫びに何かおごるからさ!」

バツツ 「マジで!?!」

ジタン 「それなら別に…」

バツツ 「じゃあ何奢ってくれんだ?」

ヴァン 「じゃあこ〇イチでカレ―奢ってやるよ!!」

ジタン 「お!良いねえ!!!」

家庭科ヒヤッハーてめえ!裏切り(続きます…)

b yアルタイトル

ゴキブリ編

第二十話 エクスデス先生「大変ですぞ!先生方!!カメエー——!!」

ある日 生物室

エクスデス先生「♪♪♪ん?……!!こ、これは…!!」

エクスデス先生「い、一大事じゃ!!早急に他の先生達に知らせなくては!!」

職員室

ガラツバタン

エクスデス先生「大変ですぞ!先生方!!カメエー——!!」

セフィロス先生「いやカメエー!じゃあ分かんないです。何があつたんですか?」

エクスデス先生「じ、実は…」

かくかくしかじか

エクステス先生「と言う訳であって…」

セフィロス先生「なっ…」

皇帝先生「貴様…」

アルティミシア先生「なにやってるんですか…あなたは…」

セフィロス先生「と、とにかく全校放送を流しましょう!!犠牲者が出る前に!!」

〈教室〉

バツツ「でさく、作者のひざが悲鳴をあげてさあ…」

ジタン「マジでか…」

ピーンポーンパーンポーン

フリオ「こんな時間に校内放送?」

クラウド「そういえば放送係はセフィロス先生だったな…オレの呼び出しじゃなければ

ば良いが…」

セフィロス先生『えー。とても重要な事です。よく聞いておいてください』

ジタン「重要な事、ねえ…宿題の居残りとかじゃなければ良いけど…」

バツツ「あ!そういうえば前の修学旅行の感想文結局まだ出してねえ!!」

ジタン「オレもだ…そのことじゃなければ良いけど…」

セフィロス先生『今日未明、エクスデス先生が大切に飼っていたゴキブリ2000匹が逃げ出したそうです』

ティファ「はあ!?!」

ユウナ「今、なんと…」

セフィロス先生『繰り返しします。今日未明、エクスデス先生が大切に飼っていたゴキブリ2000匹が逃げ出したそうです。』

.....

バツツ「なんだ。居残りの事じゃなかったのか!!ならあんしn…」

ティファ「ぜんっぜんよくなあああ!!」ドガッ

バツツ「ひでぶっ」

バツツ「」

ティナ『『レイズ』』

パアアアッ

バツツ「い、いきなり何すんだよ!!」

ジタン「もうティナレイズ使うタイミングばっちりだな…それにしてもティファ、急

にどうしたってんだ？」

ティファ「あ、あんた達は平気なの!? そ、その…こう…」

クラウド「ティファ、ゴキブリがどうかしたのか？」

ティファ「その名を言うなあああ!!」

クラウド「ええええええ!!」

バツツ「まあとにかく、状況を整理すると…」

ジタン「エクステス先生が飼っていたゴキブ…じゃなくてGが大量に逃げ出したと…」

ユウナ「全く…余計な事を…」

スコール「それでいてユウナとティファは虫が苦手と」

ティファ「うう…なんであのクソ爺よりによってGなんか逃がすのよお…」

ピンポーン
ピンポーン

ヴァン「また校内放送？」

ウォー「全部捕まったのか？」

オニオンナイト「そうだと良いけど…」

セフィロス先生『えー。先ほどの放送に訂正があります。ゴキブリ2000匹が逃げ出したと言いましたが、正しくは20000匹の間違いでした。繰り返します…』

ティファ&ユウナ「…」トサツ

ティーダ「ユ、ユウナ!?大丈夫っスか!」

クラウド「おい!ティファ!!しつかりしろ!!」

セシル「多分さっきの情報にシヨックを受けて気絶しちやったんじやないかな?」

クラウド「そ、そうか…ならいいが…」

セフィロス先生『最後に一つ、』

ジタン「まだ何かあんのか?」

バツツ「今度は20000じゃなくて200000匹でしたってか?」

ティーダ「もしそうだったらユウナが聞いてなくて良かったっス…」

セフィロス先生『どうやらエクスデス先生がゴキブリ1000匹を持ってきたら内申を少しあげてくれるそうです』

.....

バツツ「まじか…でも…ゴキブリ探しか…」

ジタン「でも、オレ達に内申アップは大きすぎるご褒美だぜ…」

woo「おまえら、ホントにゴキブリ探しをするのか!？」

ティナ「でも、あそこの人も…」

woo「あそこ?」

ライトニング「フリオ、私ゴキブリって苦手なの…」

フリオ「ああ!任せてくれ!!たがが昆虫!すぐに全部捕まえてあげるよ!」

woo「フリオニールまで…」

セシル「いや、それだけじゃないみたいだよ?」

スコール「20000匹か…クラウド、どうする?」

クラウド「きよ、興味無いね…」

スコール「足が震えてるぞ?」

クラウド「う…」

スコール「オレ達はヴァンとティーダとオニオンナイトと一緒に探しに行くが、あんたはどうするんだ?」

クラウド「いや…でもティファが…」

スコール「ティファ達はセシル達に任せてある」

クラウド「そうか…それなら…」

スコール「決まりだな」

woi「全くあいつら……」

セシル「そういえばティナは行かないの？」

ティナ「私、ここで待ってる…」

woi「そうか」

〈職員室〉

皇帝先生「……」

コスモス先生「すごいですね…皇帝先生こんな時に優雅に紅茶飲んでますよ…」

セフィロス先生「いや……よく足元を良く見てみる」

コスモス先生「足元？」

『ゴキブリホイホイ超強力!!』×20

コスモス先生「うわあ…」

セフィロス先生「これはまだマシな方だ…アルティミシア先生なんか…」

アルティミシア先生「悪霊退散…悪霊退散…」

セフィロス先生「もう悪霊扱いだ…」

コスモス先生「そういえばクジヤ先生は？一番あの人^が反応しそうだったんですけど…」

ガーランド先生「あの人ならさつき廊下で見かけたが？」

コスモス先生「あ、ガーランド先生…は何ともなさそうですね」

ガーランド先生「まあな」

コスモス先生「あ、ゴキブリ」

教師全員「!？」

つづく

第二十一話 ジタン「ひっこんでろ!」ゲシツ クジャ先生「あうん!」

前回の続きです。

コスモス先生「あ、ゴキブリ」

教師全員「!?」ガタタツ

皇帝先生「どこだ!?どこにいる!？」

アルティミシア先生「皇帝先生!!普通の〇ースジェットなんかじゃ無理です!!この超

強力〇ースジェットを!!!」

ガーランド先生「いや!!この硫酸弾を使い!!」

コスモス先生「ちよ!落ち着いて!!ガーランド先生どこからそんなの持ってきたんですか!ゴキブリなんていませんから!」

皇帝先生「は?」

アルティミシア先生「…要するに私達がどんな反応をするか面白半分をやった事と…」

コスモス先生「まあ…大体は当たってます」

ガーランド先生「懲戒免職にするぞ」

コスモス先生「ええ!?そこまで!」

皇帝先生「全く…次は無いと思え」

コスモス先生「す、すみません…」

アルティミシア先生「そういえばエクステス先生?」

エクステス先生「何ですか?」

アルティミシア先生「なんでゴキブリなんか飼ってるんですか?」

皇帝先生「それは私も疑問に思った事だ」

エクステス先生「そう急に言われましてもなあ…」

ガラッ

ジエクト先生「はよーっス!!お前ら!!」

暗闇の雲先生「…遅刻だぞ。」

ジエクト先生「まあそう硬い事言うなって!!…というか何か今日はやけに辛気臭い空

気だな。何かあったのか？」

ジエクト先生「なるほどねえ…だから今日はやたらとゴキブリが多かったのか。ホント踏まないように歩くの大変だったぜ！」

皇帝先生「お前は虫とか全然平気そうだな…」

ジエクト先生「お？あんたはダメなのか？」

皇帝先生「ああ、無理だな…あの六本の足でうごめく様と動く時のあの不気味な音…あの生物が絶滅するならば私は日々の日課のこの紅茶も一週間はやめる事ができる…」

セフィロス先生「たったの一週間ですか…」

皇帝先生「これ以上すると私の身体に以上をきたして会話が全て『ウボアー』になつてしまう」

セフィロス先生「どんな禁断症状ですか…それは…まあとにかく、私も皇帝先生の意見には賛同ですね」

アルティミシア先生「私も激しく同意です」

暗闇の雲先生「私はそれほど無いな」

ジエクト先生「別にたかが虫だろ？気にしなけりやいいだろ？」

アルティミシア先生「まあ、見た感じ平気そうですからね」

暗闇の雲先生「？」

アルティミシア先生「ああ、そういうえばエクステス先生、まだ理由を聞いていませんでしたね」

エクステス先生「まあ…飼いやすい事ですかな？」

「……………」

皇帝先生「そんな下らん理由だったのか？」

アルティミシア先生「ふざけているのですか？」

エクステス先生「え？これでもまじめに考えて…」

セフィロス先生「まあ、あまり期待はしてませんでしたが…」

エクステス先生「え？かわいいじゃないですか。ゴキブ…」

ガーランド先生「張り倒すぞ…」

エクステス先生「何かすみませんでした!」

ガラッ

ケフカ先生「じゃじゃーん!!ここでもさかのケフカ先生登場!!」

皇帝先生「自分でまさかのとか言うなよ…」

アルティミシア先生「何の用ですか?副校長」

セフィロス先生(なんでこんな人が副校長なんだろう…)

ケフカ副校長「話は聞かせてもらいました…なんとまあ面白…ではなく深刻な事態の様ですね…」

ガーランド「今本音が少し出なかったか?」

ケフカ副校長「気のせいです☆」

ガーランド先生「(うぜえ…)」

ケフカ副校長「まあ何にしても!!この状況は何とかしないとマズイよねーww」

皇帝先生「なにか策があるのか?」

ケフカ副校長「ピンポンピンポン!!大正解!!」

ジェクト先生「何か嫌な感じしか漂ってねえんだが…」

皇帝先生「私もだ」

ケフカ副校長「もう!心配性だなあ皆!!」

コスモス先生「で、どんな方法なんですか？」
ケフカ副校長「まずは……」

（廊下）

ジタン「おい!! その変質者!」

クジャ先生「変質者!? 僕はただのしがないゴキブリだよ?」

バツツ「嘘だ!!」

クジャ先生「ほらほらジタン、いや僕のマイハニー? この僕を君という檻の中え閉じ込めてくれよ?」

ジタン「ひっこんでろ!!」ゲシッ

クジャ先生「あうん!」

バツツ「おい… 仮にも教師だろ? 大丈夫か?」

ジタン「このぐらいしとかないとこいつまた這い寄ってくるからな!!」

クジャ先生「やだなマイハニー、僕をそこらの汚い虫けら何かと一緒にしないでくれるかい?」

ジタン「いや… 今お前自分でさつきしが無いゴキブリって言ってたじゃないか…」

クジャ先生「悪くなかったよ？マイハニー？」ツヤツヤツ

ジタン「…」ゲツソリ

クジャ先生「約束通りこれはあげるよ…またねマイハニーとそのお友達？」

バツツ「あ、ありがとう…よ、良かったなジタン？」

ジタン「…」

バツツ「ジタン？」

ジタン「返事が無いただのしかばねのようだ」

バツツ「いきてるじゃねえか」

ジタン「でもホントに死ぬかと思った…」

バツツ「あの人本当に激しいな…オレだと五分と持ちそうにないぜ…」

ジタン「まあ、オレは慣れてるからな」

バツツ「そんな事慣れるなよ…あ！そうだこれ持っていこうぜ!!」

ジタン「そうだな!!…でもこれどこに持っていくんだ？」

バツツ「うーん…職員室でいいんじゃない？」

ジタン 「そうだな!」
つづく

第二十二話　コスモス先生「あ、ゴキブリ」

また前回からの続きです

バツツ「う〜ん…職員室でいいんじゃない？」

ジタン「そうだな！」

〜その頃職員室〜

コスモス先生「この年になって…じゃんけんですか…」

ジエクト先生「お？なかなかおもしろそうじゃねえか!!」

皇帝先生「フ、楽勝だな…」

教師全員「最初はグー！じゃんけんポン!!」

皇帝先生「決まったな…」

ケフカ副校長「んじやあここに残るのが皇帝先生とぼくちんとアルティミシア先生とジエクト先生で後の人はみーんな探索って事で☆」

コスモス先生「うう…私運悪いなあ…」

暗闇の雲先生「今ここにいない教師はどうする?」

ガーランド先生「まあエクステス先生は強制的に探索として、今いない者はそのままが良いだろう」

コスモス先生「そういえば、今何匹ぐらい捕まってるんですか?」

エクステス先生「さつき生徒達が持つてきたのを合計するともう18000匹になりますな。ほらここに…」

ゴキブリ×18000「カサカサ」

ガーランド先生「うわ!!人前に出すな!汚らしい!!」

皇帝先生「とりあえずその虫かごは机の下にでも置いてろ!私の前に二度と出すな!!
いいか!」

エクステス先生「は、はあ…何かすいませんでした」

アルティミシア先生「でも後2000匹もいるんですよねこの学校に…」

皇帝先生「やめろ想像させるな吐き気がする」

コスモス先生「あ、ゴキブリ」

ガーランド先生「本当に懲戒免職になりたいのか？」

コスモス先生「いやホントですって!!ガーランド先生の肩に!!」

ガーランド先生「え…マジで…」

ゴキブリ「どもっス」カサカサ

ガーランド先生「ぎゃああああ!!」

ゴキブリ「!?」カサカサ

皇帝先生「おいバカ者!!こっちにやるな!!」

ジエクト先生「こうなったら〇ースジエツトで…」

エクステス先生「やめろ!!ゴキ美を殺す気か!？」

ジエクト先生「殺す気だよ!?!って言うかなんだゴキ美って!!」

エクステス先生「このゴキブリの名前だが何か？」

アルティミシア先生「何か?じゃありませんよ!早く何とかしてください!!」

エクステス先生「何とかしろって言われましてもなあ…」

ゴキブリ「!!」ブーン

ケフカ副校長「ほんぎや!!今度は飛んじやったよ!」

どったんばったんがっしやん

ガラッ

ジタン「エクステスせんせい!!持って来ましたよ…あれ?」

どったんばったんどたんばたん

バツツ「うわあ…地獄絵図…とりあえずエクステス先生の机に置いてさっさと帰ろうぜ」

ジタン「そうだな…えーと、たしかここら辺が…」

コスモス先生「ジタン君!ちよつとそこどいて!!」

ジタン「うわ!!…あ、虫かごが」

バツツ「ちよつ!!それはマジでしやれにならねえんじや…」

ゴトツそれと同時にゴキブリ×2000同時にわさわさ

ジタン「ぎやああああ!!」

バツツ「どうすんだよこれ!!」

皇帝先生「はやく非難を!!」

バツツ「お、おう!!」ガッ

バツツ「ん？何か今蹴ったような…」

暗闇の雲先生「それ…」

バツツ「……」

アルティミシア先生「エクステス先生のところにあつた虫かごつて確かゴキブリが…」

バツツ「…」

ゴキブリ×20000「…」

ガーランド先生「みんな、いいか？良く聞け…私がいまから三秒数える…そしたら一齐にあのドアに向かって走るんじゃ…」

皇帝先生「あ、ああ。分かった」

ガーランド「それじゃあ行くぞ…1………」

ゴキブリ×20000「カサカサ×20000」

ガーランド先生「2、3!!それ皆走れえい!!」

ジタン「ちよ、2と3の間隔せますぎんだろ!？」ダッ

コスモス先生「いやああ!!追ってくるんですけど!？」ダッ

バツツ「ちくしよおお!!なるようになりやがれ!!」ダッ

～職員室前廊下～

皇帝先生「ハア…ハア皆いるか？」

アルティミシア先生「全員います…あ、エクステス先生を忘れてた」

バツツ「あの人のろいからなあ…」

エクステス先生「お…い!!待って下され!!」

皇帝先生「…」ドアロック

エクステス先生「え？」

バツツ「ほ？」

皇帝先生「許せ…墓参りには行く…」

エクステス先生「ちよおおお!?」ドンドン

アルティミシア先生「さすがにこれはやりすぎでは…」

皇帝先生「あのままだったらゴキブリにも来られていた…やむを得なかったのだ」

ジタン「なあ、バツツ」ツンツン

バツツ「ん？何だ？」

ジタン 「見えるか？」

バツツ 「何が？」

ジタン 「ガラス越しで良く分からねえが：エクステス先生らしきものがどんどん黒く染まっていく…」

バツツ 「めちやくちやばつちり見えるんすけど…」

ジタン 「……」

バツツ 「……」

ジタン 「あ、エクステス先生転んだ」

バツツ 「ホントだ」

ジタン 「そしてそれに追い打ちをかけるようにどんどんゴキブリが這い寄ってくる……」

バツツ 「ホントだ」

ジタン 「……」

バツツ 「……」

ガーランド先生 「君達そんなところで突っ立ってないで誰か先生を呼んでこんかい!!」

（職員室前廊下）

シャントット先生「久しぶりに戻ってみれば、教師全員職員室前で体育座りとは…何かありましたの？」

ガーランド「実は…かくかくしかじか…という訳で」

シャントット先生「そんな事ですか？」

ジタン「そんなことって…じゃあ先生何とか出来るのかよ…」

シャントット先生「当たり前ですわ！少しまっついていなさいまし」

バツツ「？」

（十分後）

シャントット先生「はい。これですわ」

アルティミシア先生「シャントット先生、これは？」

シャントット先生「これは生き物にのみ吸引力がある特別な掃除機ですわ。いつもは私が不真面目な生徒に対してのお仕置き用に研究室に置いてあるんですが…特別の特別に！使わせてさしあげますわ」

皇帝先生「それでは早速…」

シャントット先生「ええ、そうですわね。私もここには用がありませんし…それではス
イツチ…オン!!」ポチっ

ウイイイイン

ジタン「すげえ!!ゴキブリがどんどん吸われていつてるのに他の物は全く動いてねえ
!!」

バツツ「さすが生き物にだけ反応する掃除機オレはあれに何度吸われた事か…ん?待
てよ?」

バツツ「なあ先生?」

ガーランド先生「なんだ?」

バツツ「エクスデス先生どうするんだ?」

教師全員「あ」

コスモス先生「ちなみに今エクスデス先生どうなってる?」

ジタン「今必死に柱にへばりついてる…けど…あつ」

ジェクト先生「なにがあつた!?!」

ジタン「柱から離れた…」

皇帝先生「…と言う事は…」

エクステス先生「カメエeeeeeeee!!」

シュボン!

ジタン「す、吸われた…」

シャントット先生「まああの人の事だからどうせ生きてるでしょう」

バツツ「先生軽!!」

暗闇の雲「大丈夫だ…もともと自分でまいた種だ」

シャントット先生「まあこのゴミ袋は時限転送で生物教室に輸送つと…これで大丈夫ですわ」

コスモス先生「あー…死ぬかと思った…」

皇帝先生「全くだ…なんやかんやあつてもうこんな時間だし…もう今日は全員午前帰宅で…」

ジタン「マジで!?!」

教室

ティファ「う…ん。あれ?私…」

ユウナ「あ、気が付きました？」

ティファ「うん。…そっか私気絶して…!!そういえばGは!？」

ティナ「全部捕まったって…さつき放送が」

ティファ「ホント!?あー…良かった」

ユウナ「それに今日は教師達も疲れたから午前帰宅だそうですよ？」

ティファ「ホントに!?まさに災い転じて福となすって奴ね!」

ユウナ「今回ばかりはGにも感謝しなければなりませんね」

ティファ「それだけは絶対イヤ!!」

カサカサカサ…

ティファ「!?…まさか、ね…」

大変ですぞ!!ひっこんでろ!!あ、ゴキブリ

b yアルタイル

一学期末テスト編

第二十三話 ジタン「テスト一週間前だ!!…………で？」

〈別の日 朝のHR 教室〉

コスモス先生「今日は皆さんに話しておかなければならない大切な話があります。」

ティーダ「またゴキブリっスか？」

コスモス先生「…もうあの事については忘れてください…今日言いたい事はそんな事ではありません」

スコール（何の事だ？）

コスモス先生「家庭科でなぜかカレーが爆発したりなぜか学校中にゴキブリが大量発生したりなどと色々なことがありました。今日から…」

コスモス先生「テスト一週間前です!!」ドドン！

生徒一同「……………なん…だと…？」

コスモス先生「テスト直前になって慌てることの無いようにしっかりと今のうちに復習をしておいて下さいね？」

く 一時間目 前 教室く

バツツ 「マジか〜今日から一週間前か〜」

ジタン 「まあでもオレ達は大丈夫だな!!」

バツツ 「ああ! 少なくとも生物はエクスデス先生が評定上げてくれるし!!」

クラウド 「お前からまだそんな事言ってたのか〜」

バツツ 「そんなって言うな!! オレ達にとってはそれだけでも十分〜」

スコール 「そうではなくて、あの評定の話は無くなったんだ」

ジタン 「は?」

バツツ 「なんで!?!」

クラウド 「あの時先生掃除機に巻き込まれただろ? (↑前話参照)」

バツツ 「え? あ、ああ、まあ〜」

クラウド 「その時に軽い記憶喪失を引き起こしたらしいんだ」

スコール 「だから今近くの病院で療養中だ」

ジタン 「マ、マジか〜」

バツツ 「で? それには何か付き添いの人とかいる訳?」

クラウド 「シャントット先生が行ったが?」

ジタン「そうか…生きて帰ってこないな…エクステス先生」
スコール「?」

↳その頃 近くの病院1919号室↳

エクステス先生「……………ん?わ、私は一体…」

シャントット先生「あら、随分とお早いお目覚めですこと」

エクステス先生「?どちら様ですか?」

シャントット先生「私の顔も覚えていないなんて…まあ無理もありませんわね…あんな密室で真つ暗な中で何万という蟲と一緒にいれば」

エクステス先生「良く分かりませんが…あなたとは面識が?」

シャントット先生「ええ、いかにも」

エクステス先生「こんなに小さくて丸っこい中年の女性は全く記憶にないんですが…」

シャントット先生「…」ブチっ

エクステス先生「?どうかなされましたか?」

シャントット先生「いえ少しね…すぐに記憶がもとに戻る方法を思いつきましてね…」

エクステス先生「ほ、本当ですか？では是非!!」

シャントット先生「今もう準備しておりますよ?」

エクステス先生「なんで呪文を詠唱しているんですか?…つていうかその魔法!!」

シャントット先生「あら、記憶はお戻りになりました?」

エクステス先生「ええもうバツチリです!…でなんでまだ詠唱してるんですか?」

シャントット先生「それはあなたにブチ当てる為ですが何か?」

エクステス先生「何かじやありませんよシャントット先生!!その魔法使ったらこの病院はおろかこの星一つ滅びますよ!」

シャントット先生「ご安心を。ちゃんと加減してここの病室のみを完全に消し去って差し上げますわ」

エクステス先生「ちよっ待っ!!て言うか私何かしました!」

シャントット先生「そういった反省は素粒子になってからしっかりとしなさい!!」

シャントット先生「『アルテマ』!!」

ドドンガドゥン!!

くそして一時間目前

教室く

グラグラッ

バツツ「うお!?地震!」

クラウド「ティファ、何かしたか?」

ティファ「失礼ね!!私そんな力……壁をドンッ

ぼー……ーん!!

ジタン「壁が吹っ飛んだ……というよりは消し飛んだ……」

クラウド「……」

ティファ「ち、違うから!!確かに今のは私だけ……!!」アセアセ

クラウド「いや……そんな事より壁……」

ティファ「ああ!それなら……『リターン』!」

バツツ「壁が元通りになった……」

スコール(女子勢なんでもありだな……)

ジタン「でき、話を戻すけどさ、テスト勉強とかしてる?」

クラウド「まあそれなりに……」

スコール「おれも人並みに……」

ジタン「まあこのお前らはするとして……バツツとティファは?」

ティーダ「全然!!」

バツツ「テスト勉強? 何それ? 食えんの?」

ジタン「うえーいwwですよねーww」

バツツ「当たり前だろ!?!」

ティーダ「やる気が出ないんすよね〜」

バツツ「わかるわかるww」

クラウド「…この馬鹿トリオが…」

スコール「このテスト赤点だったら確実に夏休みは無くなるぞ?」

バツツ「大丈夫大丈夫!! なんとかなるって!」

スコール（容易に赤点を目の前にして立ちつくす姿が想像できるんだが…）

ティファ「そういえばさつき先生が言ってたけどもうテスト近いのよね…」

ユウナ「じゃあ勉強してるんですか?」

ティファ「いや……しようとはするんだけどね……」

ユウナ「けど?」

↳昨日ティファ&ライトニングの部屋↳

ティファ「ライトはフリオのところまで勉強教えてもらってるし……(↑何の勉強かは分からないけど) 私もテスト勉強しよつと!!」

ティファ「まずは簡単な問題集辺りを……」バキヤツ

ティファ「……シャーペンが折れた……」

ティファ「き、気を取り直して次……」バキヤツ

ティファ「……………」

ティファ「……て事があってね……」

ユウナ「はあ……大変ですね」

ティファ「もうすでに30本ぐらい犠牲になっちゃったわよ……」

wo1 「セシル、来週からテストだが何か対策はしているか？」

セシル 「まあとりあえず一日最低4時間は勉強してるよ」

wo1 「さすがだな」

セシル 「そんな事ないよ。wo1はどのぐらいしてるの？」

wo1 「恐らく12時間だな」

セシル 「お、おう……。そうかい……」

ティナ 「ねえ、玉ねぎ君、今日空いてる？」

オニオンナイト 「え!?!…もちろん!!」

ティナ 「じゃ、じゃあさ……一緒にテストに向けて頑張らない?…あつもし無理ならい

いけど……」チラッ

オニオンナイト「そんな事ないよ!!でも、どこでするの?」

ティナ「私の部屋……フフ」

オニオンナイト「?」

フリオ「ライト、今日は何の教科の復習が良い?」

ライトニング「んー、今日は……」

ライトニング「保健・体育!!」

つづく

第二十四話 クラウド「ティファ、貧乏ゆすりやめろ」

前回からの続き

ライトニング「保健・体育!!」

フリオ「ライト、それは昨日実技でしっかり復習しただろ?」

シコール(実技!?保健・体育で実技で復習だ?!?)

クラウド「落ち着けスコール」

ライトニング「だってえ…もっと勉強したいんだもん」

フリオ「ハハ…分かったよ。じゃあ数Ⅲと現代文の勉強をしてからね?」

ライトニング「もう…フリオのイジワル…／／」

ティファ「はい、そこのお二人さんもうそろそろ授業始まるから席に着こうか…後スコール、あんたどんどん社会的地位が失われていつてるわよ?…」

スコール「大丈夫だ。問題ない」

ティファ「いや、問題しかないから…」

く 一時間目 英語く

皇帝先生「であるからしてこの英文は関節疑問詞を文章のここにもつてくるやや特殊な英文なので…」

wool「ふむふむ…なるほど…」

クラウド「……………」

スコール「どうした？クラウド、全く進んでいないが…」

クラウド「ああ、いや英語はどうも苦手で…。物理だとか漢文とかはそれなりに取れるんだが、英語と数Ⅱばかりは無理なんだ…」

スコール「そうか……。なんなら今日からオレが付き添いで教えてやろうか？」

クラウド「ほ、本当か!？」

スコール「ああ。幸いにも英語は得意科目だからな。かわりにクラウド？」

クラウド「なんだ？」

スコール「すまんが漢文を少し教えてくれないか？」

クラウド「それぐらいなら全然大丈夫だ」

スコール「ありがとう」

皇帝先生「そこ、何を話している。授業に集中しろ」

クラウド「す、すいません…」
 スコール「すいませんでした」

グラグラッ

皇帝先生「む？」

ティータ「また地震っス!!」

オニオンナイト「今日はやけに多いね…」

ヴァン「地球滅亡が近づいてたりしてたりして!」

バツツ「んな訳ないだろ？」

woo「いや、可能性は否定出来ん…」

グラグラッ

woo「おつと…」ポロっ

セシル「woo!?!片腕が取れたよ!?!」

woo「ああ、大丈夫だ。問題ない」

ジタン「問題しかねえよ!?!どうなってんだそれ!!」

woo「何か前の家庭科(↑第十七話らへん参照)から腕が取れるようになったんだ

…」

セシル「それ、痛みとかあるの？」

woo「いや、痛みとかは無いが感覚はあるんだ」

ユウナ「…」

ティナ「ユウナ、どうしたの？顔色悪いけど…」

ユウナ「あ！いえ、何でもありません！（どうしよう…絶対にあの時かけた『ブレイク』のせいだ…）」

ティナ「ホントに大丈夫？…！あ、もしかして」

ユウナ「!!」ドキッ

ティナ「あのwooの腕が気持ち悪いんでしょ？」

ユウナ「!?え、ええ!!まあ…」

ティナ「やっぱり…woo!!」

woo「何だ？」

ティナ「それユウナが気味が悪いって言うからやめたげて？」

woo「む…これはすまない…」

ユウナ「あ、いえ…」

バツツ「まあ確かにこれは女子には少しきついかもな！」

ジタン「でもさ、これってロケットパンチみたいに腕とばせるんじゃないか？」

「バツツ「おお!!それ面白そ…」

皇帝先生「いい加減授業を再開させる…」

バツツ「チツ。つまんねえの」

皇帝先生「それではこの問い5の問題を…」

グラグラツ

ライトニング「また地震か…」

ジタン「おいおい…本当になにか起こるんじゃねえか?」

バツツ「怖い事言うなよ…」

クラウド「……………」

フリオ「どうしたんだ?クラウド」

クラウド「これは…地震じゃない!!」

フリオ「ええ!?!じゃあ何なんだ?」

クラウド「ティファ、おいティファ!!」

ティファ「ん?何?」

クラウド「ティファ、貧乏ゆすりをやめろ」

ティファ「え!?!はい」

皇帝先生「なんで今から授業を再開しようという時に限ってチャイムが鳴るんだ…まあいいこれで今日の授業は終わりだ。宿題は今日やった事が出ている98ページから102ページまで。以上だ」

w o l 「起立、気を付け、礼」

生徒一同「ありがとうございますー」

〜二時間目前 男子トイレ前〜

ジャーニーー バタン

ジタン「あー…英語全然分かんねえ」

バツツ「激しく同意。」

w o l 「ここにいたのか！お前ら」

バツツ「あれ？w o l、どうしたんだ？」

w o l 「どうしたんだ？じゃない！お前ら修学旅行の感想文を出せ!!」

ジタン「あ、ヤベ…忘れてた」

バツツ「出せって言われてもな…もうオレ達あれ燃やしちまったしな…」

w o l 「何を訳のわからん事を言っている!!出せないのなら今日居残ってでも出して

もらう!!」

バツツ 「な、そ、それだけは勘弁…!!」

ジタン 「ていうか他に居残りになってる奴いんの？」

woo 「今ライトニングがヴァンとティーダのところについているが？」

ジタン 「wooで良かった…」

woo 「どういう意味だよ？」

バツツ 「そのまんまだよ？」

woo 「何を言ってる…」

ジタン 「バツツ！それ今だ!! 走れ!!!」

woo 「な！お前ら!!」

バツツ 「ハハハ!! 残念だったな!!」

woo 「くっ…こうなったら…」

バツツ 「なあ…何か嫌な予感がするんだが…」

ジタン 「ああ…オレもだ…」

W O I 『ロケットパンチ』!!」ドシユツ

バツツ 「ひでぶっ」

ジタン 「あべし！」

つづく

第二十五話 ジタン（ユウナ）「だ、大丈夫だぜ!このやろう!!」

前回からの続き

woo 『ロケットパンチ!!』ドシユツ

ジタン 「ひでぶっ」

バツツ 「あべしっ」

ヒュー—————……

woo 「あ、やりすぎた…」

〜二時間目前 教室〜

ドゴ—————ーン!!

フリオ 「な、なんだ!？」

スコール（なんでこここの学校の壁は一日に二度も壊れるんだ…）

ヴァン 「すげー!!この壁の穴トイレ前まで続いているぜ!!」

オニオンナイト「で、それを掘り進んできたのは…」

バツツ「」

ジタン「」

セシル「まあ、予想はしてたけどね…」

w o l「おーい!!聞こえるかー!?!」

セシル「w o l!?!」

w o l「私が『ロケットパンチ』で吹っ飛ばしてしまったんだ!!すまない!」

セシル「そ、そうだったんだ…」

ヴァン「…で、その腕は?」

w o l「その近くに落ちてないか?」

ティータ「ここには無いっスよー!!」

w o l「そうか…今そっちに行く」

〽五分後〽

フリオ「どうだ? w o lの腕は?」

セシル「廊下の方も見てみたけど、無かったよ…」

ティーダ「黒板の上にも無かったっス!!」

woo「そうか…」

オニオンナイト「そういえばさ…取れても痛みは無いけど感覚はあるんでしょ?今どんな感じ?」

woo「う〜ん…なんだか…ひんやりしてて…後は良く分からん…」

クラウド「手掛かりはそれだけか…」

スコール「情報が少なすぎる。もう少し分からないk…」

ティファ「搜索中のところ悪いけどさ、そこにある（バカ）二人はどうするの?」

バツツ「」

ジタン「」

セシル「あ…そういえば」

クラウド「大丈夫だろ?ティナがいるし…」

ティファ「その肝心のティナがいないから困ってるんじゃない…」

ヴァン「あれ?ホントだティナがいない」

ユウナ「あの人学習係ですからテストに向けての集まりかなんかで授業に遅れるらしいんですよ…」

ティーダ「ええ!?!じゃあつまりこの二人が死んでるのをごまかしながら授業を受けな

ければならないっスカ!？」

woo「そういうことになるな…」

クラウド「大変だ!!もう授業開始まで残り一分しか無い!!!」

フリオ「ど、どうする!?!どこかに隠すか!？」

woo「いや男子学生二人を隠せるような場所この教室には無い!」

ティファ「いやいや、丸めて圧縮すれば…」

クラウド「ティファ、…いやティファさん」

ティファ「は、はい?」

クラウド「これはあくまで人の身体です。興味本位で人を肉団子にする事は絶対にやめてください(年齢対象的な意味で)」

ティファ「はあ…」

スコール「おい!!残り三十秒だぞ!!」

セシル「……………」

woo「セシル?」

セシル「僕に一つだけ考えがあるんだ…」

く二時間目 国語く

woi 「起立、気を付け、礼」

生徒全員 「よろしくおねがいします」

ガーランド先生 「ふむ……ん？ ティナ君は学習係の用事で授業に遅れると聞いているが……スコール君とユウナ君は？」

バツツ 「何か気分が悪いから保健室に行つたみたいです」
ガーランド先生 「そうか……」

オニオンナイト 「ねえ……本当に大丈夫なの？」 コソコソ

セシル 「成功する事を祈るしかないよ……」 コソコソ

く二時間目が始まる直前 教室く

ユウナ 「はあ……二人羽織り、ですか……？」

セシル 「そう、あの一人が普通に座つてもう片方が羽織りの中に入ってあたかも座つ

てる方がその行動をしてるように見せるものだよ」

フリオ「確かにそれなら簡単にごまかせそうだが…」

スコール「難しいな……」

オニオンナイト「難しくてもやるしかないよ!!……でもどうやって決める?」

クラウド「それに死んでるから明らかに首がすわってないんだが…」

ティファ「ああ…それなら…」

ゴキツメキツ

ティファ「はい!これで完璧!!」

クラウド「一瞬首が普通ではあり得ない方向に曲がったような気がするが………まあ

とりあえずやる人をじゃんけんで決めよう。」

ティエダ「えく…じゃんけんっスか?」

W o o「それなら均等に当たる確立があるだろう?…それじゃ」

「最初はグー!じゃんけんポン!!」

セシル「…と言う訳で」

オニオンナイト「スコールとユウナさんがすることになりました」

スコール「くっ…」

ユウナ「なんでこんなことに…」

ティファ「ほら!!先生来ちゃうから!!そこの二人早くスタンバイ!!」

くそして二時間目 国語く

スコール（くつ…動きづらい、が慣れてしまえば…）

ユウナ（うう…どうして私が…）

ガーランド先生「ジタン君、バツツ君、大丈夫かね？さつきから砂浜に打ち上げられた死んだ魚の様な目をしているが…」

ジタン（ユウナ）「え…ええと…」

ティファ「ユウナ!!なるべくジタンになりきって!」 コソコソ

ジタン（ユウナ）「は…はい!!」

ジタン（ユウナ）「だ、大丈夫だぜ!この野郎!!」

ガーランド先生「この野郎!?大丈夫か!?ジタン君!」

ジタン（ユウナ）「全然大丈夫じゃないんだぜ!オレは危険な男だこの野郎!!」

ティファ「ユ、ユウナ!?間違ってる!完全にキャラ間違ってるから!!」 コソコソ

ジタン（ユウナ）「そ、そうですか?いっつもこんな感じだと思ってたんですが…」

バツツ（スコール）（日頃ジタンをどんな目で見てたんだよ…）

ガーランド先生「ま、まあとりあえず授業を始める…教科書の78ページを…」

wor（来た!!ここで一番の難所が来たか!!本を開く!!ページをめくる!!一見当たり前に見えるこの行動も前が見えない二人にとっては至難の業!!…どうなる?）

クラウド「お、おい…あれ」

つづく

第二十六話 ジタン「目がああああああ!!」

前回からの続きです

クラウド「お、おい…あれ…」

セシル「まずあの二人教科書がどこにあるかすら分かってないよ!!?」

WOL「何い!?だからやる前に机の状況を整理してからやれといったのに!」

オニオンナイト「いや…多分二人ともまず机の状況は整理はしたと思うよ…でも…」

ティータ「あの二人の机の中から教科書を取り出せって言われても見えてるオレ達ですら取り出すのは難しいと思うっス…」

バツツ（スコール）（くそつどこだ!?どこにあるんだ!?ていかなんで机からこんなゴミ箱を漁るような音がするんだ!?）ガサゴソ

ジタン（ユウナ）（なんで机の上にバナナなんかおいてるんですかあ!!サルなの!?あの子サルなの!）

フリオ「…大苦戦してるみたいだな…少し手伝うか?」

WOL「いや、ここで動くと逆に怪しまれる…」
クラウド（すでに十分怪しまれてると思うが…）

バツツ（スコール）「よし!! やつと見つけた!!」

WOL「よくやった! スコール!! ……」

バツツ（スコール）「…? だがこの教科書なんかページが開けないな…」

ヴァン「ス、スコール!! それバツツの口の中に思いつきり入ってる!!」 コソコソ

バツツ（スコール）「何い!?!、今どうなってる!!」 グツグツ

オニオンナイト「どうなってるといわれても…さらに口の中に教科書が吸い込まれて
いってるとしか…」

バツツ（スコール）「くそっ!」

ティファ「ああ! そうこうしてる内にどんどんガーランド先生の頭に? が浮かんで
いってる!!」

ティターダ「そういえばジタン（ユウナ）は?」

クラウド「あつちはさらにひどい…」

ライトニング「シャーペン教科書と思いきこんでいる…」

ジタン（ユウナ）「ふむふむ…なるほど…」

セシル「ユウナ!?それは教科書じゃないよ!!」 コソコソ

ジタン（ユウナ）「え!?じゃあ…これですか?」 コソコソ

WOL「それはバナナだ…」

ティーダ「というより体のいたるところに何本かシャーペン刺さってないっすか?」

ヴァン「え!?マジで!?…うわあ…ホントだ…すごい出血してる…」

ジタン（ユウナ）「じゃあ…これ?」 ブシャーアー…

WOL「それは消しゴムだ…どうかさつきからわざとやってないか?」

ジタン（ユウナ）「ち、違いますよ!!あ…これですね!教科書」 ブシャーアー…

WOL「そうだが…というよりその出血をどうかしてくれ…」

ガーランド先生「バツツ君、ジタン君…ホントに大丈夫かね?」

ジタン（ユウナ）「全ツ然大丈夫だぜこの野郎!!オレはピンピンしてるぜ!!」 ブ

シャーアー…

ガーランド先生「嘘つけい!!確かにさつきから声ははつきりとしているが目は死んだ魚の様だしシャーペンの出血のせいかな顔も真っ青ではないか!!…それとバツツ君も大丈夫かね?さつきから教科書が口の中に入っているが?」

バツツ（スコール）「大丈夫だ。問題ない」

ガーランド先生「なんで口の中に分厚い教科書が入っておるのにそこまではつきり言えるんだ!？」

バツツ（スコール）「念力です」

ガーランド先生「おお…そうか…念力なら、まあ」

バツツ（スコール）（納得した!?)

ガーランド先生「だがどう見ても今日はいつも以上に様子がおかしい!!……まあいつもこんなだった様な気もするが…」ツカツカ

ティーダ「マズイ!!先生が来たっス!!」コソコソ

クラウド「くっ…万事休す、か…」

ガラガラ

ティナ「すみません…遅れました…あれ?」

オニオンナイト「た、助かった…」

ガーランド先生「おお、ティナ君か。理由は聞いているから席に着きなさい」

ティナ「はい」

ガーランド先生「言われてみれば確かにこの二人はいつも通りの様な気がするし…授業を再開するぞ」

ガーランド先生「くまた、季白は杜補と同じく唐時代に活躍した詩人であり彼らが残した多くの詩には…」

ティファ「ティナ、これ」

ティナ「何これ…手紙?…誰から?」

ティファ「私からよ。とにかくそれに書かれてる事を今すぐ!!」

ティナ「う、うん。分かった…:…まず…スコールとユウナを『テレポ』で教室の外に転移させる、と…『テレポ』」

シユンツ

ティナ「そして次にバカ二人を『レイズ』で生き返らせる…」

ティナ『レイズ』

パアアアアツ

ティファ「よしっ!!でかした!ティナ!後はスコール達が帰ってくる!!」

ガラガラ

スコール「すみません、保健室行つて遅れました」

ユウナ「私もです」

ガーランド先生「ああ、じゃあ席に着いて」

ティファ「後はあのバカ二人がどうなるか…」

バツツ「う、ううん…!?は、はんじゃほりやあぁー!?へなんじゃこりやあぁー!?!」
ジタン「あれ、なんでオレ達教室に、さつきオレ達トイレ前で…というか何かすごいフラフラするんですけど…」

セシル「多分さつきのシャーペンでの出血だね…」

ジタン「どうか目がああああああ!!オレの目がああああああ!!ていうかこれなんて言うの!?!目血!?!目血っていうのこれ!?!」

ティファ「ちよつ血をまき散らしながらこつち来ないでよ気持ち悪い…」

ティナ「イヤ…」

ユウナ「私も…」

ティファ「イヤよ、臭いしキモいし汚いしキモいし手汚れるしキモいし…」

クラウド「今何回キモいって言った？」

バツツ「大丈夫だから!!ほら触ってみろよ!!聖水だからオレの体液は聖水だから!!」
ティータ「わざわざ二回も言わなくてもいいっス!!うわっ!て言うかこっち持つてくんなっス!!」

ワーワーギャーギャードタンバタン

ガーランド先生「…もうダメだこの学校…」

くその日の放課後 教室く

ジタン「全く今日は災難だったぜ……」

バツツ「全くw o lも余計な事してくれるぜ」

フリオ「何言ってるんだ。もとはと言えば感想文を出してないお前達の責任だろ？」

バツツ&ジタン「う……」

クラウド「まあ、そういう事だ、w o l。壊した壁もユウナにもとに戻してもらったから大丈夫……? どうした？」

w o l「腕が見つかった……」

テイーダ「ええ!? どこにあったスか!？」

w o l「それが………私の机の中だ」

テイファ「は？」

セシル「そんな身近な所にねえ……」

クラウド「灯台もと暗しってやつだな」

w o l「皆、すまない……」

ライトニング「気にするな、人間だれしも間違いはする」

w o l「そう、だな……ありがとう。私はもう自室に帰るよ。皆はどうするんだ？」

テイファ「そっかもう部活ないのか……じゃあ私も帰ろつと」

クラウド「オレ達は どうする？」

スコール「無論帰る」

クラウド「そうだな、今日は皆早めに帰ろう」

フリオ「そうするか、テスト近いし」

　　↓女子寮　　ティファ&ライトニングの部屋↓

ライトニング「じゃあ私ちよっど行ってくる」

ティファ「あーい！行ってらっしゃい!!……さて、今日は何をやるのかな？」

つづく

第二十七話 ティナ「嘘だ!!」

前回からの続き

↳女子寮 ティファア&ライトニングの部屋↳

ティファア「さて、今日は何をやるっかな〜?」ガサゴソ

ティファア「うん!丁度机の上に置いてあった国語にしよう!」

ティファア「昨日はシャーペンが折れまくったりしたけど、今回はちがうわよ……………」

ティファア「じゃーん!!なんと!!全部がダイヤでできたシャーペン!!…どっからそんなもの持ってきたかって?…………そりゃあもちろん…」

ティファア「皇帝先生の机!!」

テイファ「あの人が持つてるものつて大抵が百万くだらない品ばっかだし、シャーペンの一本くらい良いわよね!!」

↳その頃 職員室↳

皇帝先生「……♪ん?……なあセフィロス先生」

セフィロス先生「なんですか?」

皇帝先生「私が使っていたシャーペン知らないか?」

セフィロス先生「いや、知りませんね。何か特徴みたいなものはありますか?」

皇帝先生「いや、特徴らしい特徴は……全部がダイヤで出来ている事ぐらいしか……」

セフィロス先生「十分すぎる特徴ですよ……それ……でも、私は見てないですね」

皇帝先生「そうか……仕方ない諦めるか」

セフィロス先生「あ、ちなみにそれっていくらしたんですか?」

皇帝先生「ん?値段か?……確か……二千七百万円ぐらいだ。たいした額じゃないだろ?」

セフィロス先生「お、おう……そうっすね……」

「また女子寮 ティファア&ライトニングの部屋」

ティファア「さて、テキストもあるし、丈夫なペンもあるし、久しぶりにまじめにテスト勉強しますかな!…」

コンコン

ティファア「もう…せつかく今からやろうと思つてたのに………入つていいよ!!」

ガチャリ

ユウナ「お、お邪魔します…」

ティファア「あれ!?ユウナ!?どうしたの!珍しいじゃんユウナがこつちに来るなんて!」

ユウナ「それが…色々と訳がありました…」

ティファア「あ、お茶いる?」

ユウナ「ありがとうございます」

ティファア「ふくん、それにしてもティナが玉ねぎ君自室に連れ込むなんてね…なかなかやるじゃない」

ユウナ「ただ勉強教えてもらってるだけですよ?」

ティファ「じゃあなんでユウナは空気読んでこっちに来たの?」

ユウナ「それは…まあ、ちよつと」

ティファ「まあ話は変わるけど…いいな〜ライトの彼氏は甲斐性があつて!」

ユウナ「?ティファさんにはクラウドさんがいるじゃないですか」

ティファ「いやいや…まだそこまで発展してないんだな、これが」

ユウナ「あれ?そうだったんですか?私でつきり…」

ティファ「それ以上は言うな…」

ユウナ「あ、すみませんでした…」

ティファ「こっちはこっただけどそっちはそっちでどうなの?うまくいつてるの?」

ユウナ「まあ、そこそこ、です／＼／＼」

ティファ「?何か良い事あったの?」

ユウナ「はい!!前に家庭料があつたじゃないですか(↑第十七話らへん参照)」

ティファ「ああ、あつたわね、そういえば」

ユウナ「あの後、私ティーダに手料理作ってあげたんですよ…／＼／＼」

ティファ「なん…だと」

ティファ「で、反応は?」

ユウナ「え？反応ですか？そりやあもう!!泣いて喜んでくれましたよ!!私すっごく嬉しくて……!」

ティファ「そ、そう…それは、良かったわね…（それは嬉し涙ではなく別の涙だと思うけど…）」

ユウナ「だから、明日の分も作っちゃいました☆」

ティファ「へ、へえ…が、頑張ったのね…（ティーダ君逃げてく!!）」

ユウナ「でも、少し余っちゃったんです。良かったら…」

ティファ「ゴメン!!私今お腹いっぱい!!」

ユウナ「そうですか…残念です」

く男子寮 バッツ&ジタンの部屋く

バツツ 「zzz…」

ジタン 「zzz…」

バツツ 「zzz…」

ジタン 「zzz…」

〽男子寮 セシル&オニオンナイトの部屋〽

セシル「……」カリカリ

コンコン

セシル「?…どうぞー」

woo「こんな時間にすまん」

セシル「ああ…今日も…」

woo「ああ、ライトが私とフリオの部屋に来たから…」

セシル「あはは、もう慣れたよ…」

woo「すまん…ん?そういうえば今日はオニオンナイトがいないが?」

セシル「オニオンナイトは今日なんかテイナに勉強を教えてもらうんだって」

woo「ふむ…そうか」

セシル「だから今日はオニオンナイトの机が空いてるからそれを使えばいいんじゃないかな?」

woo「良いのだろうか?勝手に使って…」

セシル「オニオンナイトは優しいしきつと許してくれるよ。……それに、今日は帰り

が遅くなるだろうし……」

W o l 「ん？何か言ったか？」

セシル「いや、何も。じゃあ勉強しよっか」

W o l 「そうだな」

↳女子寮 ティナ&ユウナの部屋↳

ティナ「で、この問題はどうすれば良いの？」

オニオンナイト「あ、ああ！だからこれはこの公式をあてはめて解けば簡単にできる

よ！……」

ティナ「うん!!ありがとう！」

オニオンナイト「どういたしまして」

ティナ「……」カリカリ

オニオンナイト「……」カリカリ

ティナ「ねえ、玉ねぎ君、どうしたの？顔が赤いよ？」

オニオンナイト「え!?そ、そう?」

ティナ「熱があるんじゃないかな、かな?ティナが診てあげるね?」

オニオンナイト「だ、大丈夫だから!!熱とか無いから全然大丈夫だから!!」ササツ

ティナ「…ねえ、どうして逃げるの?私に何か隠してる事があるの?」

オニオンナイト「か、隠しごとなんか…」

ティナ「嘘だ!!!」

オニオンナイト「!!」びくっ

ティナ「ティナは知ってるよ?玉ねぎ君がさつきからずっと私の事ばかり見てた事…」

オニオンナイト「…そ、そんな事…」

ティナ「ううん、それだけじゃない。玉ねぎ君の性なる剣エクスカリバーからエクスカリパーが止まらなくなってることも…」

オニオンナイト「ティ、ティナ!?何を言ってるの!?!」

「ティナ「じゃあなんでさっきから手で押さえているの？」

オニオンナイト「こ、これは……」

ティナ「友達だったら隠し事なんかしないよね？」

オニオンナイト（な、何だか今日のティナは……めちやくちや怖い!!）

オニオンナイト（何とかしてここから逃げないと！そんな魂の警鐘が聞こえる!!）

オニオンナイト「ティナ、僕少しイレに……」ガチャツ

オニオンナイト「あれ？」

ガチャツガチャツ

オニオンナイト「あ、開かない!?!なんで!?!」ガツガツ

ティナ「どうしてそんなに焦ってるの？」

オニオンナイト「う……うあ……あ」

ティナ「大丈夫、そんなに怖がらなくても良いんだよ？」

オニオンナイト「怖がるなど言われても……その手に持つてるものは……!!」

ティナ「大丈夫、痛くないから……」

オニオンナイト「いや、そういう問題じゃなくて……ちよ、待つ……!!」

ユウナ「新たなカップルの誕生ですネ…」

ティファ「う、うん…。そうだね」

ユウナ「…？どうしたんですか？」

ティファ「いや、思ったんですけどさ…」

ティファ「この中でやってないのって私とユウナだけじゃね？…」

ユウナ「え！？…いやでも!!それだけが愛情表現って訳じゃないですし…それに

…！」

ティファ「言い訳はやめなさい、ユウナ。見苦しいわよ」

ユウナ「う、ううう…」

ティファ「そう悲しい顔をするなや。今日は飲もう」

ユウナ「…はい…」

く男子寮 バツ&ジタンの部屋く

『アッ………!!!』

ジタン「zzz……んあ？今何か断末魔の叫びがきこえたような……なあバッツ？何か聞こえなかったか？」

バッツ「zzz…」

ジタン「おーい！バッツ!!」

バッツ「………なんだよ急に……まだ起きる時間帯じゃないだろ？」

ジタン「いや、そうじゃなくてさ、さつきなんか誰かの悲鳴みたいなの聞こえなかったか？」

バッツ「なにそれ怖い。……でもオレはそんなの聞いてないな。……って言うか寝てたし、聞き間違いじゃね？」

ジタン「いやいやはつきり聞こえたんだよ!!」

バッツ「おおかたフリオが欲情してライトのケツにでも挿しちまってそれにライトがキレたんじゃないの？」

ジタン「なに言ってるんだあの時はライト『むしろご褒美です』とか言ってる喜んでたじゃねえか」

バッツ「そうだったっけ？」

ジタン「フリオじゃないとしたら……うくん、誰だろう…結構遠くから聞こえた気もするんだよなあ…」

バツツ「なあもう寝ようぜ？テスト勉強もしたし（五分ほど）」

ジタン「…そうだな！今日はバツチリテスト勉強したしな!!（五分ほど）」

バツツ「じゃ！またおやすみー」

ジタン「おう、おやすみ」

くまた女子寮 ティファ&ライトニングの部屋く

ティファ「ハア…まさか本当に私達だけになるとは……」

ユウナ「なんか取り残された感がすさまじいですね…」

ティファ「いつその事誘ってみる？」

ユウナ「いやあ…それはちよつと…そんな風に思ってたんだって思われたくないです

し」

ティファ「ま、気長に行きましょうまだ時間はあるし」

ユウナ「…そうですね、気を紛らわすためにももう一回教科書でも読み直しますか？」

ティファ「そうね…それが一番…」

ユウナ「どうしましたか？」

ティファ「いや、ちよつと、ね」ガサゴソ

ユウナ「何か探し物ですか？」

ティファ「もしかして私、筆箱学校に置いてきたかも…」

ユウナ「え!?!でもさつき妙にキラキラしたシャーペン持ってたじゃないですか!」

ティファ「ああ、これ?これは皇帝先生から盗ってきたものよ」

ユウナ「さらつと言いましたけど…それ犯罪ですよ!?!」

ティファ「細かい事はいいからいいから!!」

ユウナ「全然細かく無い気がするんですけど…」

ティファ「でも、どうしようかな…」

ユウナ「けど?」

ティファ「ああ、確かに。夜の学校ってホントに何か出てきそうな雰囲気ありますよね

…」

ティファ「しかもうちの学校ちよっとぼろいし趣あるからイヤなのよ…」

ユウナ「確かに女子一人つていうのは…」

ティファ「そうよねえ…ん？女子一人？」

ユウナ「どうかしましたか？」

ティファ「良い事思いついた!!」

く D D F F 学園 男子・女子寮前く

クラウド「で」

クラウド「もうすぐ夜の二時になろうという時に寝間着姿で寮の前で整列させて何の用ですか？」

ティファ「いやー、良い事聞いてくれた!!話は簡単!」

ティファ「筆箱忘れてきたから取ってきて!!」

クラウド「は？」

スコール（なんでそんな事でオレ達を呼び出した…）

ティファ「ま、マジっスか…」

バッツ「zzz…」

ジタン「zzz…」

ティファ「ほらそのバカ二人！ たったまま寝ない!!」

クラウド「バカはお前だ!! そんなもの自分で取ってくればいいだけの話だろ!!」

ティファ「クラウド君ひどい!! こんな弱い女子に一人で真夜中に散歩けだなんて

!!」ウルウル

クラウド「お前全然か弱くないだろ!? むしろ怨霊でも悪霊でもなんでも片っ端から消滅させていつてるイメージがあるんだが…」

ティファ「だーかーらー!! 私お化けだとか化け物だのは私すっごい苦手なの!」

スコール「自分の存在が化け物だろうに…」ボソツ

ティファ「スコール君何か言いましたかー?」

スコール「いや、何も」

ヴァン「え? で何? オレ達は学校行ってティファの筆箱をとってくるためだけにここ

に集められたの？」

ティーダ「まあ、そういうことっスね……」

クラウド「それよりオレ達以外の奴らは？なんでここにいないんだ？」

ティファ「ライトとフリオ、玉ねぎ君とティナはお取り込み中」

ティーダ「もう、深くは言及しないっス」

ティファ「で、セシル君とw o oは勉強頑張ってたから邪魔しちや悪いかなー、なんて思っちゃって」

クラウド「おい待てコラ……オレ達だってしつかり勉強してたんだが？」

ティファ「で、ヴァン君とティーダ君とそこで立ったまままだ寝てるバカ二人は寝てたから来てもらいました☆」

クラウド「おい人の話を聞け」

ティファ「あ、ちなみにクラウドとシコール……じゃなくてスコールは何か面白そうだったから！」

クラウド「……」

スコール「……」

スコール「仕方ないこうなったら覚悟を決めるしかないな…」

ヴァン「え〜…マジで行くの？」

クラウド「お前だって蒸発はしたくないだろ？」

ヴァン「そりゃあそうだけどさあ…ほら、今時間帯的に」

ティーダ「時間？」

ヴァン「だって今、俗に言う丑三つ時だろ？」

全員「……………」

クラウド「ティファ、いやもうこの際ティファさん」

ティファ「はいなんでしょうか？」

クラウド「やっぱりあんたが行つて…」

ティファ「イヤです☆」

クラウド「…」

ティファ「あんた達男でしょ？さつと行ってさつと戻ってくれば良いだけの話でしょ？」

スコール「その言葉そのままリボンでも付けて送料込で送り返してやるよ…」

ティファ「はいはい分かった分かった。早く行って来なさい」

クラウド「…皆、行くぞ…」

スコール「そうだな…」

ヴァン「ハア…めんどくせえ」

ティーダ「まあそう言うなっス」

バッツ「zzzz…」

ジタン「zzzz…」

ティファ「その二人はいい加減目を覚ませ…そしてさっさと行け」ギリギリ

バッツ「adgるいれxvふどsy!？」

ジタン「ちよつ絞まつてる!!絞まつちやいけないところが絞まつてる!!」

ティファ「ほらさっさと行って来んかい!!」

バッツ&ジタン「ヒー!!」

ティファ「さて、と筆箱はあいつらが取ってきてくれるし…私は…」

ティファ「ユウナがもう準備してくれてるし倉庫にでもいこつかな!!」

つ
づ
く

第二十九話 スコール 「出ぎやはああああああ!!」

前回からの続き

ティファ 「あ、大事な事言い忘れてた」

ティファ 「ねえ!!クラウドー!!!ちよつと待ってー!!!」

クラウド 「そんな大声出さなくてもそんなに遠い距離じゃないから聞こえてる…で、何だ?」

ティファ 「私の席つてどこか分かってる?」

スコール 「当たり前だ。確か…」

ティファ 「確か?」

スコール 「…」

ティファ 「ほら、分かっているじゃない!」

バツツ 「いやそうは言ってもいちいち他人の席とか覚えてねえつて!」

ジタン「確か一番真ん中の右側の一番後ろじゃ無かったっけ？」

ティード「それはジタンの席っス」

バツツ「ちなみにオレの席はその隣だ」

ティファ「そんな事分かってるわよ。大抵問題起してるのあんた達だからイヤでも頭の中に入るのよ」

バツツ「失礼な！オレ達がどんな問題をしたっていうんだよ!？」

ヴァン「エロ本を持ってきてそれを枕投げに使った（↑修学旅行編参照）」

ティファ「ほっほーう？やっぱりあれはあんたらのだったんだ？」

ジタン「な!?!ご、誤解だ!!あ、あれは…」

ティファ「まあ、過ぎた事だし…良いわそれは」

バツツ「ホツ…」

ティファ「で、肝心の席の話だけ…」

クラウド「ああ、そうだった…確か…真ん中の席だった事までは覚えてるんだが…」

ティファ「真ん中の左の前から二番目よ」

クラウド「真ん中の左の前から二番めだな、分かった」

ティファ「あ、後取ってきたらそれ私の部屋の机の上に置いていて」

スコール「?あんたはここにいるんじゃないのか?」

ティファ「え?何言ってるの?寮に戻るに決まってるじゃん、寒いし」

スコール(女じゃなかったら思いっきり顔を殴りたい...)

ジタン「てかちよつと待てよ!!お前部屋にいるんだっただらお前に渡せばいいじゃん!!」

ティファ「わ、私が部屋にいなかったらの場合よ...」

バツツ「そんなに夜中に出歩く事無いだろ?」

ティファ「お、女の子は色々あるのよ!!」

クラウド「ふーん、そう」

ティファ「な、何よ!その目!!席が分かってんならさっさと行って来なさいよ!!」

ジタン「へいへい、皆、行こうぜ」

↳ D D F F 学園 校舎前↳

ヴァン「鍵開いてるのか?こんな時間に」

スコール「住み込みでいる教師もいるから開いてるんじゃないのか?」

バツツ「誰がこんなおんぼろ校舎に住み込んでるんだよ…」

スコール「シャントット先生だ」

バツツ「なんでシャントット先生が？」

スコール「うちの学校はなれに研究室があるだろ？シャントット先生のだけど」

バツツ「え？あつたつけ？そんなの」

ジタン「ほら、あの生物にのみ吸引力のある掃除機置いてるところだよ」

バツツ「ああ!!はいはいあそこね！」

スコール「で、ここからが一番近いからつてらしいんだが、最近はずも研究室に居る事が多いな」

ティーダ「何の研究してるんスカね？」

スコール「さあな………ダメだ、前の扉はかぎがかかっている。裏口から入るしかないな」

ジタン「ハア…遠回りか…めんどくせえ…」

ヴァン「なあこの扉壊せねえの？」

クラウド「ティファじゃないんだからそんなの無理だ」

バツツ「じゃあ早く行こうぜ。最悪夜が明けちまう」

クラウド「そうだな、少し急ごう」

S D D F F 学園 一階廊下

ジタン「裏口から普通に入れたな…」

バツツ「しかもご丁寧にドア全開で…なんかすつきりしすぎてむしろ気持ち悪いな」
ヴァン「何かオレ達を学校に導いたって感じがするな。何かが」

スコール「おい怖い話はやめろ。肩がグラグラしてきた…」

ジタン「なんでお前は怖いと肩が外れるんだ!？」

スコール「他にも嘔吐、気絶、発狂などのバリエーションがあるが？」

バツツ「いらねえよ…そんな無意味なバリエーション」

スコール「わりと脱臼がくせになってる」

ジタン「知るか!!勝手に外してろ!!」

ヴァン「なあ、もう行こうぜ?ここオレ達の教室から一番遠い廊下だし」

バツツ「あ、ああそうだな!!……ん?なあスコール、さつき何かトイレから女のすずり泣きが聞こえなかったか?」

吐コール「おぼろしやあつ!!」ゲロロロロロロ…

ジタン「ぎゃああああ!! ホントに吐きやがったこいつ!! さりげなく名前も変えやがって!!」

クラウド「……行くぞ」

ティーダ「ええ!? これ（嘔吐物）置いていくつスカ!」

クラウド「ここはオレ達の教室から一番遠いから別に疑われる事も無いだろう…それよりスクール、大丈夫か?」

スクール「ああ、大丈夫だ…問題ない…」

ティーダ「問題しか残って無い気がするけど…まあいいっス」

ジタン「なあ、バツツ?」

バツツ「お? どうした、ジタン」

ジタン「お前ってさ、この学校の七不思議って知ってるか?」

バツツ「いや、知らないな」

スクール「おいやめろ!! 肩がグワングワンいつてきたじやないか!!」

ジタン「じゃあお前は耳でもふさいでろ!!」

バツツ「んでジタン、話の続きは？」

ジタン「あ、ああオレが知ってるのは二つしか無いんだが…まず一つが…」
スコール「ああーあーあー!!聞こえませーん!!」

ジタン「…少し黙っててくれ…スコール……………で話を戻すがまず一つ目が…」

『廊下を這う黒い人型のなにか』

ティーダ「なにか?もつとはつきりしないっスか?」

ジタン「いや、オレが聞いたのはこうとしか…」

ヴァン「で?二つ目は?」

ジタン「えーつと…で確か二つ目が…」

『多目的教室から聞こえる呪詛』

ジタン「つて奴だな。オレがしってるのはこんなもんだ」

ティーダ「でもこの二つって今どちらも遭遇することがあるんスよね…」

バツツ「え?なんで?」

ティーダ「だつてここ多目的教室の隣の廊下じゃないッスか」

ジタン「ま、マジか…」

クラウド「そういえばオレもこんなのを聞いたことがあるな…」

『誰もいないはずの廊下から聞こえる女の声』

スクール「おいおい、そんなのあるわけないだろう?…仮にあつたらオレの肩が間違いない
なく脱臼じゃなくなるな…」

ジタン「おい、フラグたてんな!!」

女の声「あら、あなた達」

バツツ&ジタン&クラウド&ヴァンペイターダ「出たああああ!!!」

スクール「出ぎやああああああ!!!」

つづく

第三十話 女の人「ブチ切れましたわあ!!!」

前回からの続き

スコール「出ぎやはあああああああ!!!」

女の人「きや!!な、なんですの急に!!」

バツツ「それにしてもなんて言うんだろうこの妖怪……」

女の人「ちよつと待ちなさい誰が妖怪ですの?人の話をちゃんと聞きなs……」

ジタン「うくんこんな小太りでちっちゃい中年の妖怪見たことないなあ……」

女の人「ブチ切れましたわあ!!!」

ジタン「あれ!?この声どつかで聞いたことあるような………あ!!思い出した!確か……」

女の人『『ホーリー』!!』

バツツ「」

ジタン「」

女の人「全く：まずはなんでここにいるのかから話して頂きましょうか？」

バツツ「ええと：たしか：」↑フェニックスの尾で生き返った

ジタン「あれ？なんでここにいたんだっけ？」↑フェニックスの尾で生き返った

クラウド「お前らそんな事も知らないでここまで来てたのか？：」

ジタン「いやさあ：そんな事言われてもオレ達集められた時も寝てたしさあ。覚えてるのはティファに咽喉を締めつけられた事だけなんだよ」

ティーダ「まああの時首が明らかにおかしいところまで曲がってたっすからね：そりゃあイヤでも覚えるっす：」

女の人「で、質問に答えて下さるかしら？」

クラウド「ああ、すみませんシャントット先生。：で実はかくかくしかじか：と言う訳でし

て：」

シャントット先生「なるほど。全くあの小娘も人使いが荒いこと」

ヴァン「でき、なんでシャントット先生ってこんな時間にこんなところにいるんだ？」
クラウド「おいそれさつきスコールが説明したぞ？」

ヴァン「あれ？そんなのしたっけ？された様なされて無い様な………ていうかその肝心のスコールは？さつきから全然あいつの声が聞こえねえんだけど」

バツツ「もとからあいつ言葉数少なえからあんま変わんねだろ？……でも確かにあいつどこにいったんだ？」

スコール「ここにいる……」

バツツ「どこだよ？確かに声は聞こえるんだが……結構近くから」

スコール「お前の足の下だ……」

バツツ「おわ!?マジか!?!………て言うかスコール、なんでお前こんなところで横になってんだ？」

スコール「腰が抜けて動けないんだ……すまんが手を貸してくれ」

ティータ「全く世話が焼けるっスね………よいしょ！これで大丈夫っスか？」

スコール「すまん……」

シヤントット先生「ああ、そうそう。あなた達」

ジタン「何ですか？反省文なら書きませんよ？」

シヤントット先生「そうじゃありませんわ。少し注意してほしい事がありましたね」

クラウド「注意してほしいこと？」

シヤントット先生「あなた達、この学校の五不思議は知っていました？」

バツツ「五不思議？七不思議じゃなくて？」

シヤントット先生「理由はよく分かりませんがこの学校には昔から五つの怪現象があるらしいんですよ」

スコール（ただ作者が七つも作るの面倒くさいだけだろ…）

ジタン「へえ…で、オレ達は何を注意しろと？」

シヤントット先生「簡単な話ですわ。この中のうち一つが今よく起こっているから用心しなさいという事です」

スコール「なん…だと」ガクツ

クラウド「おい!!しつかりしろスコール!!また腰抜けたら運ぶオレ達が苦勞するんだぞ!？」

ヴァン「多分これ気絶だな、今度は」

クラウド「そうか…なら安心…:…:じゃないな、どつちにしろオレ達が運ぶことに変

わりは無いな…ハア」

ジタン「でさ先生、その起きてる事ってどんななんだ？」

バツツ「まさか死者まで出てるとか？」

ティイダ「おいおいあんまりスコールが怖がる事言うなっス！最悪シヨック死するっス!!」

バツツ「大丈夫だってそんなに人は弱くねえから気にすんなって!!」

クラウド「死亡回数最高記録に『人はそんな事じゃ死なない』なんて言われても全く説得力無いな…」

バツツ「う、うるせえ!!死にたくて死んでる訳じゃねえんだよ!!」

シャントット先生「で、話を戻してよろしいかしら？」

バツツ「あ、ああ…どうぞ」

シャントット先生「その五不思議の一つは別名『隙間さん』なんて呼ばれていましてね。いつのまにか会話の輪にはいつていたり数えてみると一人人数が多かったりという他愛の無いものですわ」

バツツ「まあ結構ありそう七不…じゃなくて五不思議だな」

ジタン「ふうん…でそれが最近妙に流行ってるん？」

シャントット先生「そうなんです。まあそんな非科学的なもの私は信じていません」

から実際に存在するのか最近からこの学校を調べていたんですけど…収穫はゼロですわ」

ヴァン「そりゃあんたが近ずけば妖怪でも何でも逃げ出すって!!」

シャントツト先生「何か、言いましたかしら？」

ヴァン「あ、いや。何も」

シャントツト先生「まあ何にしても、せいぜい急ぐ事ですわね。もうそろそろ三時過ぎですわよ？」

バツツ「ま、マジか!!?おい早く行こうぜ!!」

クラウド「そ、そうだな!!…その前に」

バツツ「？」

クラウド「スコールを運ぶのを手伝ってくれ…」

バツツ「はあ!?!あんのお荷物野郎!!」

ジタン「そんな事言ってる暇無えぞ!いいから早く教室行って…で何をするんだっけ？」

クラウド「ティファの筆箱取ってくるんだよ!!!」

ジタン「はあ!? あいつどんだけ日々体を鍛えてんだよ…」

スコール「どうだ? 一人で持てるか?」

クラウド「ここから寮までの距離は…すこし難しい」

スコール「そうか…」

バツツ「どうする!? こんなところまで来て諦めるか!」

クラウド「いや…一つ考えがある…」

ジタン「もうこの際どんな考えでも良いよとにかく早くう!! 夜が明けちゃう!!」

クラウド「皆持ったか?」

ヴァン「ああ、ちゃんと持ったよー」

スコール「一つの筆箱に学生多数が群がって担いでいるなんて事滅多に無いな…」

バツツ「よし!! それじゃさっさと行こうぜ!!」

ティーダ「ていうか、バツツとジタンはなんでそんなに急いでいるっすか?」

ジタン 「そんなのさつきと寝たいからに決まってるじゃん」

ヴァン 「テスト対策は？」

ジタン 「バツチリです」

ヴァン 「そう、ならないけど」

クラウド 「そんな事言ってる間にもう裏口に着いちまった…」

く女子寮 ティファ&ライトニングの部屋く

コンコン

クラウド 「おーい、入るぞー……ってホントにいねえし……」

スコール 「仕方ない……言われていた通り机の上に置いておけばいいだろう？」

クラウド 「そうだな……じゃあ」ポスッ

ミシミシミシッ

ジタン 「机が今にも壊れそうな音を出してるが……まあいつか。帰ろ帰ろー！」

バツ 「その前に全員そろってるか確認しようぜ？」

ジタン 「え……なんで？」

バツツ「だって気になるじゃん!! 『隙間さん』、だつたっけ?」

ヴァン「確かいつのまにかいるんだつたっけ?」

ティーダ「じゃあクラウドから順に点呼していくっス!!」

「いるぞ」「同じく」「あいよー」「いるよー」「いるよー」「いるっスよー」「いる」

バツツ「……………」

ジタン「……………」

ヴァン「な、なあ今…」

ティーダ「……………」

スコール「明らかに一人…多くなかったか?」

クラウド「お、おい嘘だろ?」

ジタン「なあ…ジタン感じるか?」

バツツ「ああ、感じるぜ。死亡フラグとは違う恐怖をな…」

クラウド「いいか、いつせいのさんで一斉に後ろを振り向くんだぞ?」

ヴァン「ええく!?なんで!」

クラウド「そんな興味本位だ!!」

ヴァン「興味本位で見るもの違う気がする…」

スコール「おい、もしオレが気絶したら皆助けてくれよ…?」
ティード「わ、分かったっス…」

クラウド「それじゃ行くぞ…いつせいの、さん!!!」

バツ

ティファ「おりよ?どうしたの急に?」

男子全員「……………」

クラウド「なあティファ、いつからそこにいた?」

ティファ「え?いつってさっきからだけど?」

クラウド「そうか…」

ジタン「え?じゃあさっきのは?」

スコール「恐らく聞き間違い、じゃないのか?」

バツツ「聞き間違い、か。そ、そうだよな!」

ティード「とうかなんでティファはどこに行ってたっスか?」

ティファ「トイレよ」

クラウド「そうか…」

ティファ「あとカバン取りにきたの」

ジタン「え？なんで？」

ティファ「だってもう朝じやん！」

男子全員「……………」

隙間さん「……………」

隙間さん「ククツ」

つ・づ・く

第三十一話 皇帝先生「だから皇ちゃんって呼ぶな!!」

前回からの続き?

〜その日 職員室 朝〜

「おい!そのプリントそっちにまわしてくれ!!」

「こつち早くコピーしてくれ!!後がつかえてるんだよ!!」

「誰だ!?コピー機にみかん突っ込んだ奴は!?!」

ワイワイガヤガヤ

コスモス先生「なんか……すごいにぎやかですな……」

アルティミシア先生「テスト前は大体こんな感じですよ。……まあ今回は期末テストですから中間よりはすこし騒がしいですね」

ガーランド先生「と云うか何でコスモス先生の机にはテストが出来ていないのさ?テストは今週の金曜だからあと四日しか無いのだぞ?」

アルティミシア先生「どうか自分の私物しか散乱していませんか?」

コスモス先生「ああ、これですか?これはバトルドームと言う超エキサイテイ……」

ガーランド先生「そんな事はどうでもいい!!なんでこんな時にもなってテストが出来

ていないのかを聞いておるのだ!!」

コスモス先生「何だ、そんな事ですか？」

ガーランド先生「で、なんで作って無いんだ？」

コスモス先生「それはですね……作るのがめんどくさかったのでもう家庭科の調理実習だけでもう点数付けちゃったんですよね……」

アルティミシア先生「全く……お気楽な人……」

クジャ先生「全くだよ……」

コスモス先生「あ、クジャ先生」

ガーランド先生「確かクジャ先生は数学の教師でしたかな？」

クジャ先生「ああ……でも今回は範囲がものすごく広いからね……作るのにも苦勞しているよ」

コスモス先生「いつそのこと全部答え『解無し』にすれば良いじゃないんですか？」
クジャ先生「それもいいかもしれないね……でもそんなのにしても20点とか普通に出すのがあるからね……」

アルティミシア先生「バカ四天王（バツツ&ジタン&ティーダ&ヴァン）、ですね？」
クジャ先生「ホント……マイハニーももう少し勉強に勤しんでほしいものだよ」

ガーランド先生「補習には来ない、赤点を取っても勉強をする気も無い、追試では力

ンニングが横行：最悪だな」

クジャ先生「毎回毎回、祈るような気持ちでテストを作っているよ：頼むから平均点は取ってくれとね：」

皇帝先生「祈っても何も変わらんだろう：」

クジャ先生「ああ、皇帝先生。テストのコピーはもう済んだんですか？」

皇帝先生「ああ……終わつたは終わつたんだが、どこの誰かはしらんがコピー機の中にみかんを突っ込んだバカのせいでプリント一枚一枚に柑橘類の良い匂いが染みついてしまった：ほれ」

コスモス先生「どれどれ：くんくん……うわつめつちや良い匂い!!」

皇帝先生「どんなに簡単な記号問題を出しても間違える者は必ずいるんだ……何故あんな問題が分からないんだ……！中一で習つた現在進行形の公式だぞ!!」

アルティミシア先生「まあまあ：少し疲れていたんでしようその日は」

皇帝先生「私も最初はそう思った：だが次のサービスのそのまたサービス問題でアルファベットを書かす問題を出したんだが……」

クジャ先生「高校生に出す問題じゃ無いね……」

皇帝先生「なんでAの後にGが来るんだ!!!」

コスモス先生「え？違うんですか？」

皇帝先生「……」

暗闇の雲先生「セフィロス先生、お茶いりますか？」

セフィロス先生「ああ、すみませんね」

暗闇の雲先生「いえいえ」

エクスデス先生「……」

セフィロス先生「あの、暗闇の雲先生？」

暗闇の雲先生「何だ？」

セフィロス先生「さつきからずっと気になってたんですけど、何でエクスデス先生
ずつとテンション低いんですか？」

暗闇の雲先生「さあ？…聞いても『いや、違うんですホントに大丈夫ですから……』は

い…はい…』としか言わないんだ」

セフィロス先生「そうですか…：まあそつとして置きましょうk…」

ガラガラガラー

ケフカ副校長「は…い!!皆さん!!元気かな…?!?」

セフィロス先生「言ってるそばから絶対にそつとしない人が出てきた…」

ケフカ副校長「あれれ…? エクスデスくん、あんた今日元気無いじゃなくいの? もしかして…だ…い…ぶ、お疲れ…?」

エクステス先生「いや、違うんですホントに大丈夫ですから…：はい…：はい…」

ケフカ副校長「何やら深刻そうな模様…：これは少し…：そつとしておきましようかね…ハイ」

セフィロス先生「ホツ…：良かった」

ケフカ副校長「ああ!!そうそう皇帝先生!」

皇帝先生「何ですか?」

ケフカ副校長「…」

皇帝先生「どうしたんですか? 今度は急に黙り込んで」

ケフカ副校長「う…ん…：皇帝先生…：呼ぶのもなんか重苦しくて面倒臭いなあ…」

あ! そうだもうこの際皇ちゃんって呼んで良いかな?

皇帝先生「良い訳あるか!!」

ケフカ副校長「ええ〜ノリ悪い!」

皇帝先生「合コンか!？」

ケフカ副校長「王様ゲ〜ム!!」

皇帝先生「だから合コンか!? ふざけてるんですか!？」

ケフカ副校長「僕ちゃんがふざけているのはいつもの事で〜す!!」

皇帝先生「む、…ま、まあ確かに…」

ケフカ副校長「……皇ちゃん」

皇帝先生「だから皇ちゃんって呼ぶな!!!」

ケフカ副校長「じゃあこの際僕ちゃんの事はケフちゃんって呼んでいいから!!」

皇帝先生「誰が呼ぶか!?!…というか、今日何しに来たんですか?」

ケフカ副校長「何しに来たように見える?」

皇帝先生「だから合コンか!? なんで私が当てなければならんだ!？」

クジャ先生「…というより、副校長、ホント今日は何で来たんですか?」

ケフカ副校長「え? そりゃあもちろん皇ちゃんをからかいに…」

皇帝先生「ほう?」

ケフカ副校長「…ではなく校長から預かった伝言をお伝えに参りました」
皇帝先生「じゃあさつきとその事から話して下さいよ…こちとらとんだ無駄骨ですよ

…」

ケフカ副校長「まあまあ、皇ちゃんケフちゃんの仲じやない」

皇帝先生「…もう突つ込まんぞ…」

暗闇の雲先生「で本当に用件は何なんですか？」

ケフカ副校長「知りたい？それなら…：…：…教えなーーーーーい!!!」

教師一同「…」

ケフカ副校長「すみません…」

クジヤ先生「はあああ!？」

ジエクト先生「マジかよおい…：…：…テスト日が変更で明日!？」

ケフカ副校長「僕ちんも急な変更でびっくりしてるんだよ…」

アルティミシア先生「ちよ、ちよと待って下さい!!まだテストの範囲まで進んで無い教科はどうするんですか!？」

ケフカ副校長「さあ？」

ガーランド先生「とにかく今日で急ピッチで教えるしかあるまい…それに」

皇帝先生「テストも今日中に全て作らねばあるまい…」

教師全員「…」

セフィロス先生「…朝のHRまで後何分ありますか？」

クジャ先生「ぱつと見十五分つてとこかな？」

セフィロス先生「そう、ですか…ですがもうこうなったらヤケでもおわらせるしかありませんね…」

ガーランド先生「総員戦闘配備!!明日の一時間目までにテストを完成させること!!」
教師全員「オオオオオ!!!」

あいつもこいつもどこそこかしこでいがみ合い。他人の机を騒然荒探し。

これどこのプリント？これどこが範囲？時間は緊迫イライラ絶頂出来るか!?期末テスト!!

教師全員「あああああああ!!!」

つづく

第三十二話 ジタン「スニーキングミッション開始だ!!」

前回からの続き

～職員室 朝～

ケフカ副校長「それじゃ、僕ちはこれでおいとましようかな～」

クジャ先生「ああ、さようなら」

皇帝先生「あなた、ホント何しに来たんですか…」

ケフカ副校長「もうう厳しいなあ皇ちゃんは!!」

皇帝先生「ゼロ距離で『フレア』ぶっぱなしますよ…?」

ケフカ副校長「おっほw怖い怖い!じゃあ僕ちん他にもたくさんの用事があるんで

…バイバイ!!」

ガラガラバタン

ガーランド先生「…帰ったか…」

アルティミシア先生「ホント…何であんな人が副校長なのか不思議でしょうがないで

すよ…」

クジャ先生「まああの人なんだかんた言つて生徒にはそこそこ人気ありますし、それにあの人の技術力と行動力は確かなものですからね…」

皇帝先生「後はあの性格さえなんとかしてくればな…」

アルティミシア先生「え？私にはあんな感じじゃないんですけどね？」

ケフカ副校長「それはもちろん!!紳士な僕はレディファーストだからです!!」

セフィロス先生「まだいたんですか…:…まだたくさんの用事があるんじゃないんですか?」

ケフカ副校長「あ、それね。まあ良いんですよハイ、そんなに大した用事じゃないんでね、ハイ」

皇帝先生「帰れ!!」

ケフカ副校長「シヨボーン…」とぼとぼ

皇帝先生「…今度こそ、帰ったか…」

暗闇の雲先生「ええ、階段の方向にさつき…:…」

皇帝先生「そうか…」

クジャ先生「と、いうよりこんな事している場合じゃないよ!!早くテストの作成を済ましてしまわないと!期限は明日なんだから!!」

ガーランド先生「そ、そうだった!!こんな事で時間を費やしている場合では無い!!」

セフィロス先生「あ、僕少し席はずします」

皇帝先生「?…ああそうか確か放送係だったな…:次に鳴らすのはなんだ?」

セフィロス先生「次が朝のHRの五分前予鈴ですから一時間目が始まるまで後二十分ありますね」

ガラガラー

ジエクト先生「遅れた!すまねえ!!」

皇帝先生「全くのんきな奴だ:貴様明日が期末テストに変更になったから今日中にテストを作制しなければならんのだぞ?」

ジエクト先生「あん?テスト?テストなら昨日もう作り終えたぞ?」

ガーランド先生「何!?!」

アルティミシア先生「え?て言うかあなた昨日一回もコピー機さわって無かったじゃないですか!コピー機もつかわずに一体どうやったんですか?」

ジエクト先生「コピー機なんか使わなくても手の筋肉と根気さえあれば生徒全員分のテストぐらいうすぐにできるぜ!!」

クジャ先生「はあああ!!?」

皇帝先生「つ、つまり貴様は昨日全部手書きで生徒全員分のテストを書いてきたのか…?」

ジエクト先生「おうよ!!ボールペン20本ぐらい使ったぜ!!請求書は全部学校宛てにしといたから!!」

皇帝先生「自分で買え…それぐらい…」

コスモス先生「で、その全部手書きのテストは?」

ジエクト先生「ああ、これだ」

コスモス先生「どれどれ…:…おうっふ!…:字汚っ!!」

セフィロス先生「これ、生徒読めるんですかね…:…つとじやあホントに予鈴のチャームに行ってます」

ガーランド先生「ああ…:…:そういえば一時間目が担当は誰でしたかな?」

皇帝先生「私ですが…:…:まだ範囲まで行ってないからハイペースで終わらす予定です」
ガーランド先生「そうですか」

↳そして一時間目 英語↳

皇帝先生「この問題は回答を見てやれ。次の問題は教科書に答えが書いてあるからそれを見てやれ。以上だ」

Wol「せ、先生？」

皇帝先生「何だ？」

Wol「今日はどうしたんですか？いつもだったらここまでやるかというぐらい詳しくやるのに、今日はテキトウ過ぎやしませんか？」

皇帝先生「仕方がないだろう、明日がテストなんだから今日中にテスト範囲まで行かねばならんのだから」

セシル「ええ!?!テストもうちょっと先じやありませんでしたっけ!?!」

皇帝先生「何か知らんが変更は変更だ」

クラウド「そう言う事早く言って下さいよ…」

皇帝先生「そうは言っても今日の朝私達も教えられたのだ。」

セシル「誰からですか？」

皇帝先生「カオス校長かららしい…」

ヴァン「校長つて確か修学旅行編の最初らへんでちよびつとだけ出てきてそれから一回も出てきてねえだろ？」

ティード「というかもう顔も覚えてないっス」

ティファ「あんた記憶力悪すぎでしょ!!…で校長の名前なんだったっけ？」

クラウド「おい」

スコール「というかそんな急な変更でテスト大丈夫なのか？」

皇帝先生「全然大丈夫じゃない。むしろ超危機的状況だ」

ユウナ「でもこれでテスト範囲が短くなる事は…」

皇帝先生「無い」

ユウナ「ですよねー」

セシル「ねえフリオ」

フリオ「ん？どうしたセシル、急に」

セシル「今回のテスト大丈夫？（身体的に）」

フリオ「ハハ、大丈夫だよ、ライトに分からない事は教えてもらったし、事前復習も

したからそれなりに自信はあるよ！」

セシル「そう、か（そうじゃなくて身体の心配なんだけどな…）……最後に一つ、テスト前は体気をつけるんだよ。激しい運動は厳禁だよ？」

フリオ「？あ、ああ……あ？」

バツツ「なあ、ジタン！」ニコニコ

ジタン「なんだ？バツツ」ニコニコ

バツツ「アハハ…」

ジタン「アハハ…」

バツツ「……………」

ジタン「……………」

バツツ&ジタン「やべええええええええええ!!」

ジタン「やべえよマジでやべえよこちとらカケラも勉強してねえよ!!」

クラウド「ついに本音言ったな…」

バツツ「もう小・中と居残り補習は慣れっこだが追試だけはごめんだ!!!」

ライトニング「だったらせいぜい今日しっかり勉強する事だな。…まああまり期待は

できそうにないがな」

ジタン「うぐつ…心に深く突き刺さる言葉どうも…」

ヴァン「そういえばシャントット先生っていつつも研究室にいるんだろ？テスト大丈夫なのか？」

皇帝先生「あの人はもう一週間前に出来ている」

ティファ「早い！仕事が早い!!」

ユウナ「どうかあの人の問題難しすぎますよ…ピタゴラスが考えた定理を可能な限り述べよとか普通大学でも出ませんよ…」

w o l 「でもあの人を出す問題は大概公式さえ覚えておけば良い様な問題しか出さないだろう…セシル、加速する物体の力の法則は？」

セシル「え？ $X+Y$ 兄さんでしょ？バツチリだよ」

w o l 「いや全然バツチリじゃない…むしろ危機感を覚える…」

セシル「あれ？違ったかな？いつも兄さんのこと考えてたから少し混乱していたらしいよ…ハア…兄さんに会いたい…合って p r p r したい…」

その場全員「……………」

テイナ「最後に言った事は…聞かなかった事にしておこう…」

ティファ「そ、そうね…」

皇帝先生「そ、そうだな!!授業を再開する!!」

くその日の夜 男子寮 バツツ&ジタンの部屋く

バツツ「どうしたんだジタン、そんな全身黒タイツなんか着て…。もしかしてそういう趣味に目覚めたか?」

ジタン「一体どんな趣味だよ…と言うか、ほら、お前も着ろ!」

バツツ「えく…なんで?」

ジタン「ばれにくくする為だよ!!」

バツツ「ばれる?誰に?」

ジタン「だーかーらー!!あ、というか説明していなかったな。ちよつと耳貸せ!!」

バツツ「お?おう…ふんふん…はあ…:…:はあ!?!」

ジタン 「…と言う訳だ」

バツツ 「いや、と言う訳だ。と言われてもテストの回答を盗ってくるってのは少しハードルが高すぎやしねえか!？」

ジタン 「バカ!!でけえ声で言うな!」

バツツ 「あ、すまん…」

ジタン 「…で、どうする?行けるか?」

バツツ 「おいおいジタン、オレはたとえ地獄だろうと生理中でイライラしているティファの部屋でも、どこだつて着いていくぜ!!」

ジタン 「ありがとう……よし」

ジタン 「スニーキングミッション開始だ!!」

つづく

第三十三話 女子「えつと…その、私………隙間と言いま
す…」

前回からの続き

ジタン 「スニーキングミツション開始だ!!」

バツツ 「で、? スニーキングミツションって何だ?」

ジタン 「な!? お前スニーキングミツションって言葉しらねえのか!? 確実に人生の三分
の一は無駄のしてるぞ!!」

バツツ 「マ、マジっすか……こちとら睡眠と同じ割合の人生無駄にしてた訳か…」

ジタン 「いいか? バツツ、オレも詳しい事は分からねえがとにもかくにもスニーキン
グミツションって奴は敵に自分の存在を知られる事無く任務を遂行させることだ!! …
多分!! きつと!!」

バツツ 「要するにMOSみたいな感じだな」

ジタン 「そうそう!! だから今のオレ達は暗がりて人の目に写りにくくするためにな
して全身黒タイツと言う訳だ」

バツツ 「なるほど!!……んじやあ早速学校に……」

ジタン 「待て、バツツ。何か大切なものを忘れていないか？」

バツツ 「大切なもの?……いや、特には」

ジタン 「おいおい忘れてるだろ!?!大事なものを!!」

バツツ 「………すまん、全然分からん」

ジタン 「段ボールだよ!!段ボール!!」

バツツ 「なんで段ボールを?……つてしかもしつかりもう持つてるし……てかそれ何に使うんだよ」

ジタン 「かぶるんだよ!!身を隠すために!」

バツツ 「それで?むしろバレやすそうなんですけど……」

ジタン 「ああもういちいちうるさい奴だなあ!!いいからかぶれそして行け!!」

バツツ 「ハア……分かったよ……」

ジタン 「よし、第一関門はクリア、だな」

バツツ 「ちよっ！ジタン!!ちよい待ち!!」

ジタン 「何だよそんなにうかうかしてねえんだぞ」

バツツ 「お前この段ボール持って超不安定な状況でよくそんなにスピード出せるな……！」

ジタン 「敬愛すべき偉大なる『蛇』から教わった…ゲームだけど…」

バツツ 「へえ……マジか」

ジタン 「さ、行こうぜ！まあこの格好だからばれる事もないだろうけd…」

セシル 「あれ？バツツ、ジタンどうしたの？段ボールなんかかぶって」

ジタン 「…」

バツツ 「…」

バツツ 「な、なんで分かった…？」

セシル 「え？こんな事するのバツツとジタンぐらいしか考え付かなかったから……」

で、なんでそんな事してるの？」

バツツ 「ええつと…それはだな…」

バツツ (マズイ!!セシルはカンが良いから最悪オレ達が何するつもりか最悪気づかれ
る!!)

バツツ 「ああー……！！あんなところにあなた様のお兄さんが!!」

セシル 「何だつて!? 兄さん!! 帰ってきてたんだね!!」 バツツ

バツツ 「おい!! 今のうちだ!! さっさと寮を出るぞ!!」 ササツ

ジタン 「お、おう!! そうだな!」 ササツ

セシル 「……いないじゃないか……多分何かの見間違いじゃないの? つてあれ? バツツとジタンがいない……まあいつか」

↳ D D F F 学園 裏口前↳

バツツ 「必死で走ってる内に裏口前まで来た……あのセシルはもう追ってきてはいなかった……」

ジタン 「でもここからが本番だ」

バツツ 「え? なんで? 後は職員室からテストの回答かすめれば良いだけの話だろ?」

ジタン「それが問題だ。この学校のテストの回答はこの学校の金庫に保管されているんだ…しかもそこにたどり着くまでにもたくさんさんのセンサー、落とし穴など数多のトラップがある…」

バツツ「なんでそんなに嚴重に…」

ジタン「簡単な話だ。オレが何度も盗ってるからどんどん厳しくなってきただけの話だ」

バツツ「このバカ!!」

バツツ「まあなんにしても裏口は開いてるからそこから…」

ジタン「待て」

バツツ「あ?何だよ急に?」

ジタン「あそこに、防犯カメラがあるだろ?…絶対に写るんじゃないや無えぞ?」

バツツ「バカ野郎!!写ってなんぼだろ!」

ジタン「若手芸人か!」

バツツ「ちよつと待って下さいよ!!」ツカツカ

ジタン「だからお前若手芸人かっつての!?!写ってどうすんだよ!!足着くだろうが!!」
バツツ「ごめん」

ジタン「全く……どっちにせよ今日はこっちから行くぞ」

バツツ「?…壁じゃん」

ジタン「ここを押すと……」カチツ

ゴゴゴゴツ

ジタン「ここから天井裏に行ける。ここから行くぞ」

バツツ「お前!!すごいな!」

ジタン「何度もやってるから隠し扉も見つけちゃったんだ」

バツツ「すげええ!!さすが死亡回数第二位!!」

ジタン「うるせえ第一位……とそんな事言ってる時間無いな。さっさと行こうぜオレが先導するから着いてきてくれ」

～ D D F F 学園 天井裏～

バツツ「天井裏ってすごい狭いんだな……這って行かねええと頭打ちそうだぜ……」

ジタン「ああ、まあ一応何度かここは通ってるがここだけだな、高さが極端に低いのは」

バツツ 「そうなのか？」

ジタン 「ああ、もう少しすれば少し楽になる…」

バツツ 「おい？どうした？ジタン」

ジタン 「バツツ…ホントにすまないんだが…」

ジタン 「屁が出そうなんだ…」

バツツ 「はあああああ!?今這って進んでるからお前ケツこつちに向けてんだぞ!!」

ジタン 「もう我慢出来ん!!」

バツツ 「もう我慢できんじゃねええ!!うおおお!!させてたまるかああ!!」

ガスッ

ジタン 「いった!!お前ケツ殴んのは反則だろ？」

バツツ 「うっせえ!!これしか方法が無かったんだよ!!」

ジタン 「明日から☆型のうんこが出たらどうするんだよ…」

バツツ 「お、面白いじゃん…」

ジタン 「ていうかいつの間にか便意も収まってるし…行くか」

バツツ 「ちよつと待ってお前今便意と…」

ジタン 「気にすんな!さっさと行くぞ!」

（DDFF学園 金庫前）

バツツ 「途中赤外線センサーとかあったけど…天井裏から行ったら楽勝だったな…」

ジタン 「だろ？じゃあオレは見はつとくからお前は金庫を開けてくれ」

バツツ 「分かった!!お安い御用だぜ!!」

バツツ 「……………ぐあ!!」

ジタン 「どうした!?罨か!」

バツツ 「静電気」

ジタン 「紛らわしいわ!!そんなでけえ声だすんじゃねえよ!罨かなんかかと思っ

じゃねえか!!」

カチカチカチカチカチカチ……………カチンツ

バツツ 「ふっ…」

ジタン 「開いたか…」

カチカチカチカチカチカチ

ジタン 「開いてねえのかよ!?何だ今の笑みは!」

バツツ「全然わからん」

ジタン「もう良いよお前いったん変われ!!」

カチカチカチカチ……カシユン

ガチヤツ

バツツ&ジタン「おお……」

バツツ「百万だ!!」キヤツキヤツ

ジタン「子供か!?普通に一千万超えてんだろうが!!」

バツツ「えく!?じゃあチョコボール何個買える?」

ジタン「だから子供か!?なんでしかもチョコボール換算なんだよ!!っていうかオレ

達の目的はテストの回答の回収だろ!」

バツツ「あ、そうだった。危ない危ない…危うく目的を見失うところだった…」

ジタン「つたくしっかりしてくれよ………よし、これで全教科分だな。後はこれを持って帰れば…」

ヴイーン!!ヴイーン!!

バツツ「な、何だ!?警報!?もしかしてバレたか!」

ジタン「今はとにかく天井裏に退避だ!!」

バツツ 「…どうだ？」

ジタン 「五分待っても先生達が来ない…多分シャントット先生も今日は研究室だな」

バツツ 「ホツ…良かった」

ジタン 「それにさっきの警報は恐らくオレ達のじゃ無いな」

バツツ 「え？なんで分かんのか？」

ジタン 「だって音の発生源が遠かったし」

バツツ 「え？じゃあオレ達以外に盗りに来た奴らがいるのか？」

ジタン 「かも、な。行ってみよう、多分二階の方だな」

く廊下く

モソモソ

バツツ 「うお!?何かが網に引っ掛かっている!？」

ジタン「どう見たって人だろ?…ぱっと見女子っぽいが…」

バツツ「じゃあ内のクラスじゃ無いな、あいつらだったらオリハルコンでできた檻でも簡単にブチ壊すからな」

ジタン「それもそうだな…つと早く助けてあげようぜ」

ジタン「じゃあ行くぞ…せーのっ」

バサツ

バツツ「痛ッ!!すこし擦りむいちゃった…:そんな事より…大丈夫ですか?」

女子「!!わ、私ですか?」

ジタン「あんた以外に誰がいたよ?…つていうかなんでこんな時間にこんなところに居るんだよ?」

女子「わ、私は…:少し…散歩中で…」

バツツ「散歩!?こんなへんぴなところで!!」

女子「はい…:…でその時何かに引っ掛かって…」

ジタン「今に至るって言う訳ね」

女子「はい…:ホントに助けて頂いてなんてお礼を言ったらよろしいか…」

バツツ「良いって良いって!!オレ達もそんなに急いでる訳じゃないし…とかまだ名前聞いて無かったな!君、名前は?」

女子「わ、私の名前ですか…?それは…その…」

ジタン「何?もしかして覚えてないの?」

女子「ちや、ちゃんと覚えています…」

女子「えつと…その、私…隙間と言います…」

バツツ「隙間?変わった名前だな!!…ん?隙間?」

隙間「!?」びくっ

ジタン「どうした?バツツ」

バツツ「いやな、どこかで聞いたような気がしたんだが…気のせいだったようだ」

隙間「ホッ」

ジタン「じゃあオレ達はもう帰るから!!気をつけるよ?」

隙間「はい…ありがとうございます…」

バツツ「じゃあさつさと…痛ッ!」

ジタン「バツツ!?大丈夫か!?若干血い出てるが!」

バツツ「ああ、ちょっと擦りむいたただけだからつばでも付けときや治るって！」

隙間「あ、あの…」

バツツ「ん？何？」

隙間「よ、宜しければ……このハンカチ…使って下さい…」

バツツ「え？いいのか？」

隙間「はい……使う事も無いので…」

バツツ「ありがとな!!これいつか返すから!!」

隙間「え……あの……行っちゃった…」

　　↳男子寮　バツツ&ジタンの部屋↳

バツツ「よし！じゃあこの持って帰った回答を徹夜で覚えるか!!」

ジタン「ああ!……でも……いいなくバツツは、女子の私物ゲットかよ」

バツツ「しょうが無いだろ？怪我してるんだし！」

ジタン「隙間さん、だったつけ?…オレもどつかで聞いた事ある気がするんだけどな

↳…」

バツツ 「だろ？ けっこう有名な人なのかなあ…」

ジタン 「さあ、な。まあそんな事より速く始めようぜ！」

バツツ 「そうだな」

つづく

第三十四話 w o l 「これより今回のテスト対策講習会を行う！」

前回からの続き

↳男子寮 クラウド&スコールの部屋↳

チュンチュン

クラウド「う……んもう朝、か……おいスコール、起きろ」

スコール「大丈夫だ。もう起きている」

クラウド「ならよかった」

スコール「クラウド、何しているんだ？」

クラウド「寝ている間にメールが来てないかチェックしているんだが……」

スコール「だが？」

クラウド「ティファから60件近く届いてる…」

スコール「…全部削除すれば良いじゃ無いか。どうせいたずらにやっているだけだろう?」

クラウド「オレも最初はそう思っていたんだが何か全メールが文章軽く10行超えるし内容もとてもじゃないがいたずらにやっているとは思えないんだ…」

スコール「…後でお礼かなんか言っとけよ」

クラウド「ああ、そうする」ピロリン

スコール「また、ティファからメールか?」

クラウド「いや、今度はwooからだ」

スコール「wooから?珍しいな。あいつ滅多にメールしてこないのに」

クラウド「…ふんふん…多分これスコールにも関係あると思うから一応読み上げぞ」

スコール「?何か忘れ物か?」

クラウド「いや、そういうったのじゃ無い…ええと『今日の七時三十分より教室でテスト対策の講習会を行う。来るのならなるべく早く来い』…だそうだ」

スコール「テスト当日の朝に?」

クラウド「ああ、今さら感がすさまじいが…まあ行つて損は無いだろうし…」
スコール「今七時十分か…早々に着替えを済ませれば間に合わない事も無いだろう」
クラウド「そうだな…」

く教室く

ガラガラー

クラウド「お、結構集まつてるな…」

w o l 「ああ、…：…まあ呼んでない奴もいるが…」

ティファ「あつクラウド遅い!!三分遅刻!!」

クラウド「…なんでティファがいるんだ…意味無いだろ」

ティファ「おいもう一回言ってみろよ私の真の実力も知らずに…」

クラウド「平均点50より上になってからそういう事は言おうか？」

ティファ「うっさい!!今はまだ本調子じゃ無いだけよ!」

スコール（そう言い続けてこれで三周年目か…）

ユウナ「お取り込み中失礼しますけど…ティータ達に会ってませんか？」

スコール「ティータ？悪いが見ていないな」

ユウナ「そうですか…」

セシル「何かあったの？」

ユウナ「ええ…今日の朝メールしてみたんですけど返信がなかなか帰ってこなくて…私気になって電話かけてみたんですけどやっぱり何とも…」

woo「それは少し心配だな…」

ティファ「て言うか何で心配なら自分の足で行かないのよ」

クラウド「イヤと言うほどメールを送ってきたお前が言うか…」

ティファ「あ！あれは!!…ちよつとだけいたずらしてやろうかな、なんて思ってた事よ!!」

クラウド「今ここでお前のメール読み上げるぞ？一通ずつ」

ティファ「それだけは勘弁!」

ユウナ「ハハ…お二人とも仲が良いですね…。でも、ティータどうしてるんだろ…」
フリオ「全く、ティータもユウナにばかり心配かけさせて…」

ガラッ

ティーダ「逆っスよ逆!!」

ユウナ「ティーダ!!!」

w o l 「どこにいたんだ？部屋にいなかったが？」

ティーダ「ちよつとヴァンを病院に…」

クラウド「病院!?あいつなにかあったのか？」

スコール「あいつそんなに体弱くないだろ…というかどこに連れて行つたんだ？内科

?外科?泌尿器科?」

ティーダ「最後は絶対違うっス…精神病院っスよ」

ティファ「精神病院!?この勉強バカのw o l ならともかく、なんでヴァン君が？」

w o l 「勉強バカ!」

セシル「w o l、今のは褒め言葉だよ褒め言葉」

w o l 「思いつきりバカと言われたが…」

セシル「気にしたら負けだよ」

w o l 「そうか…」

フリオ「で?なんでヴァンが精神病院に？」

ティーダ「昨日の勉強のストレスに耐えかねて…」

スコール「何時間したんだ？」

ティーダ 「一時間三十分っス」

スコール (精神崩壊するか!?!それで!!)

ティファ 「あー確かにそこまでやってたら精神いかれるのも納得だわー」

スコール (でなんでこいつは同調してんだ!)

クラウド 「お前昨日どのくらいやっただよ?…」

ティファ 「三十分」

クラウド 「先生達と楽しい夏休みをお過ごしください」

ティファ 「ちよっ…決めつけないでよ…不安になるじゃない」

w o l 「そんな事より、ヴァンはテスト大丈夫なのか?」

ティーダ 「限りなく絶望的っスね…」

w o l 「そうか…:まあなんにしても、これで全員揃ったな」

ティーダ 「え?何言ってるっスか、まだバツツとジタンが…」

セシル 「気にしたら負けだよ」

ティーダ 「え…え…」

w o l 「まあ何にせよ、これより今回の期末テストの対策講習会を行う!」

クラウド 「具体的に何をするんだ?」

w o l 「今さら問題の復習何かしても無駄だからな、各教科ごとの問題の傾向や解き方などをしていこうと思う……早速一番最初の英語から行く」

ティナ 「いきなり最難関だね……」

w o l 「ああ、先生が皇帝先生なだけあって、やはり長い英作文を書かせて来たり、読解問題の場合は作者に心情を英語であらわせなどと……超難関だろうな」

オニオンナイト 「で、それはどう克服しろと？」

w o l 「大問1と2は飛ばせ、以上だ」

クラウド 「か、簡単だな……でも何でだ？」

w o l 「あれは大学の専門知識を持つてしても難しい。恐らく正答率は5%を切るだろう……それにあそこで時間を費やして時間切れになる事あるからな」

フリオ 「ああ、あるな……」

w o l 「だろう？しかし英語にはもう一つ特徴がある」

セシル 「それは？」

w o l 「後半になるに従って問題が容易になってくる、というものだ」

クラウド 「それはオレも少し感じていたんだ。大問1でここまで難しいのを出して置いて最後に急に中一の問題が出てきたりするからな、ビックリするよ」

スコール 「でもすごいな、w o l。全教科の特徴を網羅しているのか……」

woo「まあな。そうでもしないと学年一位はキープできないからな……さあ！この調子で全教科行くぞ!!」

「はい!!」

↳そのころ男子寮 バッツ&ジタンの部屋↳

ジタン「おーいバツツー!!おーきーろー!!遅刻するぞ!」

バツツ「…」

ジタン「全くしようが無い奴だな…着替えここに用意してるから後オレちよつとトイレ行ってくるから!」

バツツ「…」

バツツ「…(やばいやばいやばいつてこれ!!金縛り!?全然体が動かねええ!!)」

バツツ「…(しかも何か上に人が乗っている感じがするし、おまけに声も出ないし…
ていうか何でテスト当日にこんな事になってんの!?オレ!!)」

バツツ 「ちくしよー!! オレは学校に行きたいんだー!!」 ガバツ

ジタン 「うお!! いつにも増して元気の良い目覚め!!」

バツツ 「ハア…ハア…なあジタン？」

ジタン 「あん？なんだ？」

バツツ 「オレの肩に何か憑いてないか？」

ジタン 「いや、何も」

バツツ 「そうか、良かった…：あ！ヤベ!! もうこんな時間だ！早く行こうぜ！」

ジタン 「お、おう!! そうだな！」

スーッ

ジタン 「!？」

バツツ 「どうしたジタン!! ほら急ぐぞ!!」

ジタン 「あ、ああ…今行く!! (今一瞬昨日の夜会った女子がバツツの後ろに居たよう

な…：気のせいかな)」

つづく

第三十五話 ジタン「今回はギャグ無しで話の進行のみ、か」

前回からの続き

↳寮から学校までの道↳

バツツ 「急いで出てきたけど全然歩いても間に合う時間帯だったな…」

ジタン 「ああ…そうだな…」

バツツ 「なあ、ジタン？」

ジタン 「あ？何だ？」

バツツ 「まだ見えるのか？その、昨日会った隙間さん、だったっけ？」

ジタン 「ああ、そうなんだよでもバツツには見えないんだろ？」

バツツ 「ああ全然」

ジタン 「オレ目おかしくなっちゃったのかなあ…」ゴシゴシ

バツツ 「で今隙間さんは何しているように見える？」

ジタン 「えつとなあ…バツツに抱きついてる」

バツツ 「は!? マジで!」

ジタン 「それに頬ずりもしてる」

バツツ 「おお、そうか…まあ悪い気はしないな…」

ジタン 「でさお前昨日隙間さんからハンカチ貸して貰わなかったか?」

バツツ 「ああ、これだろ? 汚れたまま返すのもなんだから昨日ちゃんと洗ってきたよ
!」

ジタン 「ふうん、あ、何か隙間さんが『何で洗うんですかあ!』と言わんばかりに掴みかかっている風に見える…」

バツツ 「お前…相当目疲れているのな…」

ジタン 「ああ、正直自分でもかなりヤバいと思ってる…でも昨日そんなに目の疲れた事はしてねえんだよなあ…」

バツツ 「昨日の勉強で脳に障害が来たんじゃないか?」

ジタン 「そうかもしれない…」

バツツ 「でも何でそんな事になったんだろうな？」

ジタン 「ホントに幽霊だったりしてな！」

バツツ 「ちよつ…怖い事言うなよ!!」

ジタン 「だってさあ…あんな真夜中の学校に一人で散歩とかどう考えてもおかしいだろ？」

バツツ 「た、確かにな…でも…」

ジタン 「でも？」

バツツ 「あんなかわいい幽霊なら別に憑かれても良い気がするなあ…」

ジタン 「お前…頭大丈夫か？」

バツツ 「うるせえなあ、彼女いない歴自分の年のオレはもうそこそこ顔と性格が良ければもうモルボルでも構わねえよ、って言うぐらいなんだよ…」

ジタン 「おお、そうか…まあなんにしてももう学校着くぞ！」

バツツ 「あ、ホントだ全然気が付かなかつたな…」

く教室く

ガラガラー

ジタン&ジタン「はよーっス!!」

ティファ「うお!!出た!」

woo「何で来たんだ?お前ら」

バツツ「何で来たんだって:ここオレの教室!!」

ティファ「あ、そうだったすっかり忘れてたわ」

ジタン「クラスメイトの存在忘れんじやねえよ!!」

フリオ「お前ら今日がテストだって分かってきたんだよな?」

バツツ「当たり前だろ!」

woo「ほう:覚悟はできているようだな:」

ジタン「覚悟?なんの?」

woo「指定者補習」

ジタン「いやいやまだ決まった訳じやねえだろ!?!て言うかそんなだったらオレ達以外にも補習かかりそうな奴とかいんだろ!?!」

ティファ「例えば?」

ジタン「あ!?!んなもんきまつてんだろティフ:」

バツツ 「までジタン!!」

ジタン 「なんだよバツツ急に」

バツツ 「それ以上言うと命に関わる」

ジタン 「あ?なんで?」

バツツ 「ティファに対してお前も指定者補習は死亡フラグだ、死亡回数一位のオレが言うんだ間違いない」

ジタン 「おお、そうか…」

ティファ 「で?誰が補習かかりそうだつて?」

ジタン 「え?だ、だからティ…」

ティファ 「ティ?」

ジタン 「ティーダだつて!!あいつは全然勉強してないつていうバカオーラ出しまくりだからな!!」

ユウナ 「ティーダはバカじゃありません!!」 コンッ

ジタン 「ふべらばっ!」

バツツ 「死は避けられなかったか…」

くテスト開始五分钟前 教室く

wo1「じゃあ出席番号順に席変わるか」

オニオンナイト「じゃあ普通に考えて僕が一番前だね！」

ジタン「じゃあオレは……えく!?オレスクールとクラウドに挟まれてんの!?オレまで根暗になる!!」

クラウド「わることな根暗で」

バツツ「オレは……かなり後ろの方だな」

セシル「今日で全部のテスト終わるんだよね？」

スコール「ああ、全部で七教科あるからかなりの時間がかかるだろうな」

ジタン「まじで!?そんなにかかるのか!?…だりく休めば良かったなく!!」

バツツ「て言うか一時間目何だ？」

ティーダ「英語っスよ英語」

バツツ「うん終わったな」

クラウド「あきらめるの早えな…もう少し最後の意地とか無いのかよ…」

バツツ「ねえよそんなのそんなのあったらとつくにやってるよ!!」

ジタン「あ、先生来た」

ガラガラ

アルティミシア先生「もう席には…着いているいる様ですね」

ジタン「監督の先生はアルティミシア先生か…楽勝だな…」

クラウド「ジタン、何か言ったか？」

ジタン「いや、何も」

アルティミシア先生「もうテストは配り終えましたね、では時間は五十分間。始め！」

つづく

第三十六話 アルティミシア先生「ねえこれテスト中だよね?・ねえ」

前回からの続き

アルティミシア先生「始め!!」

カリカリカリ…

クラウド（やっぱり最初の問題はさっぱりわからんな……ちよつとカンニングにならない程度に他の奴らがどうしているか見てみるか…）

クラウド（まずは一番心配なバツツから…）

バツツ「zzzz…」

アルティミシア先生「こらバツツ君、起きなさい今は寝る時間じゃありませんテスト中ですよ」

クラウド（うん予想通り）

クラウド（ていうか今回のバツツはいつも以上に落ちるのが早いな…いつもだったら最後のあがきで五分くらい粘るものだが……今回のテストガチの方で棄てるのかこいつ…）

クラウド（…となると次に気になるのはジタンとティーダだな。あいつらは…）

ジタン「…」カリカリ…

ティーダ「…」カリカリ…

クラウド（あいつらは珍しいな…いつもだったらテスト中にモンハンしようぜ☆とか言いながら教室闊歩してるのに…）

ティーダ「…（これでもし補習になったらユウナとの一対一でお勉強…一見パラダイスに見えるけど…）」

くもしティーダが補習になったら

ユウナ「はい、ティーダ差し入れ持ってきたよ／＼／＼」

ティーダ「今日は何を持ってきてくれたっすか…!？」

ユウナ「今日は魚にはDHAが豊富だと聞いたのでカツオの頭を…後頭には糖分これ基本!ですから今日の差し入れはカツオのお頭生クリーム添えだよ!!」

ティーダ「う、うわあああああああああああああ!!」
ユウナ「ど、どうしたの!? ティーダ!! ティーダ!!」

ティーダ（…という事になりかねないっス…だから今回のテスト、絶対の赤点だけは免れなきやいけなっス）

クラウド（後他に心配な奴は………ティファか…ティファはどうなんだ?）

ティファ「アハハ…空が青いなあ…もうこんな見てたらテストも今の冷めきつた社会もどうでもよく思えてくるよ……」

クラウド（あいつ本当に今回のテスト大丈夫か!?!…そんな事より今は空が見えない曇り空なのに…あいつ一体何を見てたんだ?）

クラウド（…まあいい………そんな事よりまずは自分の事を終わらせなければ……）

ティファ「ああもう!!ぜんっぜん分からへん!!」

スコール(なんで急に関西弁に…)

ライトニング「ティファ、今はテスト中だ、そういつた会話もカンニングに含まれるんだぞ」

W o o「それに、日頃からちゃんとしておけばそんなに困る事も無かつただろうに…」
ティファ「ああもう!!うるさいうるさいうるさい!!」グツ

バキツ ヒュンツ

スコール「うお!?何か飛んで来た!!」

クラウド「皆、気をつけろ!暴走したティファが折ったシャーペンの芯はスナイパーライフルを超えたスピードで飛んできている!!」

フリオ「なんとカオスな…うおっまた飛んできました!!」

バツツ「zzzz…」

ビシュツ

バツツ「」

ジタン「おい!!バツツが本当に永遠の眠りに着いちまったぞ!!」
 テイナ「一応『レイズ』かけとくね?」

パアアアツ

バツツ「zzzzz…」

スコール「まだ寝るか…」

クラウド「おいテイファやめろ!!けが人どころか死者が出てる!!」

テイファ「脳内の不要情報を廃棄中…執行…執行…執行…執行」

ジタン「おいなんか本当にやばくないかこれ!!」

オニオンナイト「どうすんだよ!!さつきよりどんどんシャー芯が飛んでくるよ!!こんなんで死んでもたとえ生き返られるとしてもとてもじゃないけど浮かばれないよ!!!」

テイファ「執行…執行…執行…」

バキツ ヒュンツ

クラウド「おわ!こつち来た!」

woo「!クラウド危ない!!『ロケットパンチ』!!」

ドヒュン

クラウド「シャー芯とw o o lの『ロケットパンチ』の衝撃で衝撃で閃光が発生した…」
w o o l「大丈夫だったか?」

クラウド「オレは大丈夫だが、お前の腕は大丈夫だったのか?」

w o o l「常軌を超えた痛みだったが幸い腕にたいした損壊は無いようだ」

クラウド「あれ?なんでちゃんとw o o lの腕に戻ってきてるんだ?前はどっかいつ探すハメになったが…」

w o o l「ああ…あんな事があつたからな、腕に丈夫糸を結びつけておいたんだ」

クラウド「おお!何と用意周到な!!」

セシル「それより、このいかれた…じゃなくて少し頭のねじが緩んだティファをどうする?」

ティナ「私に任せて…」

オニオンナイト「え、ティナがやるの?」

ティナ「うん、多分テレビと同じ原理だと思っから…」

オニオンナイト「テレビ!?それはどういう…」

ティナ「ええい!!!」 シュバツ

ユウナ「ティファアの頭に手刀を!？」

ティファ「あいた!!……いたたく、何なのよ一体……」

セシル「元に戻った……」

ライトニング「なあティナ、今のどうやったんだ？」

ティナ「うん、60°の絶妙な角度がポイントなんだよ？」

ライトニング「60°? なんの？」

ティナ「えつとね……まず頭の位置を0°としてね……」

アルティミシア先生「ねえこれテスト中だよね? ねえ」

wo1「先生お許し下さい……彼らにまじめにテストを受けろと言う時点でもう無理があります……」

アルティミシア先生「ハア……じゃあ私もう職員室に戻っていますからテストはあなたが職員室に持ってきておいてください……」

wo1「? 先生はどうされるんですか?」

アルティミシア先生「すこし気分を落ち着けに……」

ジタン「…」

ジタン（クク…これで邪魔者もいなくなった…誰がまじめにテストなどやるものか!!）

ジタン（バツツやジタンには悪いがオレもさすがに夏休みを無くす訳にはいかないのでな……バツツの今日の朝食には少しだが睡眠薬を混入させてもらった…それにオレにはとっておきの秘密兵器がある!!）

ジタン（第七話の女湯のぞきでも第十二話のフリオとライトの行動を監視する時に使った作戦…その名も…）

ジタン（『鏡 de 盗撮作戦』だ!!）

ジタン（これさえあればオレは一切計算も何もすることなく好成績を修める事ができる!!）

ジタン（今この教室の天井には複数の鏡がある。全てオレが仕掛けたものだ…そしてオレが持っている消しゴムには小さいが鏡が埋め込まれている。そしてこれを定位置に水平に置くと…）

ジタン（w o o i の答案がこの鏡に写る!!：そしてこれを左に傾けると…!）
ジタン（何とセシルの答案も丸見えだ!!これでオレが赤点をとる事は無い!!卑怯でも何でも構わない!!オレは何としても夏休みを手に入れる!!）
ティナ「…」

バツツ「zzzz…」

カリカリカリ…

w o o i「よしじやあテストを後ろから前に送ってくれ。その後端の列は真ん中に集めたテストを渡してくれ。」

スコール「w o o i、ありがとう」

w o o i「何がだ？」

スコール「お陰で今回の英語はそれなりに良い点が取れた気がする…できれば今後も

してほしいんだが…」

woo「ああ、あんな事で役に立てるのなら喜んでならいくらでもしてやるさ」
スコール「…!ありがとう」

ヤ
ジタン「おいおいバツツ〜!お前今日ずっと寝てただろ?大丈夫なのか?」ニヤニ

バツツ「オレもさすがにマズイと思つてさ答案見てみたんだけどこんな事になつてて
…」

ジタン「おおこれはこれはきれいにびっしりきれいに書かれた答案…つてはああああ
ああ!」

セシル「どうしたの?ジタン」

ジタン「いや、どしたもこうしたも、ジタンの答案が…全部…埋まつてんだよ!!」
ティファ「ええ〜!?!嘘でしょ!?!どうせテキトウでしょ!?!うん!そんなに違うない!!」
クラウド「なんでお前はそんなに必死なんだ?」

ティファ「だってこいつだけに負けるのだけは死んでもイヤ!!」

バツツ「うるせえよ…そんなならお前のはどうなんだよ？」

ティファ「プライバシーの侵害!!!」

クラウド「じゃあ逆に問おう、プライバシーって何だ？」

ティファ「え？だからこう…プライしてこう…なんかバシツてする感じの？」

クラウド「さあ皆次のテストに向けて教科書か何か読んでおこう」

ティファ「え!?違うの!?…ちよつとクラウド!!どう意味なのかだけでも教えなさいよ

!!ねえ!」

ティーダ「次の教科何っスか？」

セシル「多分国語だよ」

ティーダ「よっしそこそこ得意教科!!」

バツツ「おつかしいなあ…絶対に寝てたはずなのに…まさか隙間さんが?…」

バツツ「……いやいや、それは…無いな、うん」

つづく

第三十七話 隙間さん 「…次回は…私が…」ボソツ

前回からの続き

〓二時限目テスト 国語〓

ジタン 「んで監督の先生が…」

皇帝先生 「私だ」

ティファ 「こりやまた厳しそうな人が来たわね」

皇帝先生 「当然だ。カンニングをしようなどというバカな考えは今のうちに棄ててしまった方が身のためだぞ？…というよりティファ」

ティファ 「あい？」

皇帝先生 「貴様が持っているそれは私のシャーペンではないのか？」

ティファ 「ぎくっ!!」

皇帝先生 「その反応からするとやはり私のだったか……」

ティファ 「ち、違うわよ！これはたまたま私が拾ったのが先生が持ってたのに似てただけだから!!」

皇帝先生 「それはどこで拾ったんだ？」

ティファ「職員室」

皇帝先生「職員室のどこで拾ったんだ？」

ティファ「皇帝先生の机：あつしまっ……」

皇帝先生「自供したな：ほら返せ」

ティファ「ムリムリムリ!!!これ取られたらここにいる人全員に被害が及ぶわよ!!」

皇帝先生「何を訳のわからん事を……」

Wool「先生、テストが終わるまでの間だけでもティファに貸して頂けませんか？」

皇帝先生「なんで貴様まで同調しているんだ？」

Wool「生命に関わるからです」

スコール（ほんの数ミリのシャー芯で壁にめり込むほどの威力なら、シャーペン自体が飛んできたら……：想像するだけで寒気がするな……）

フリオ「先生、僕からもお願いします」

バツツ「さすがにテスト中に二回も死ぬのはご遠慮願いたいからな……オレからも頼むわ」

皇帝先生「貴様ら……：分かった、今回のテストが全て終わるまでそれはティファに与えよう」

ティファ「あざーっす!!」

皇帝先生「しかし貴様は軽い窃盗罪だ。だが今回は初犯、よって今回は担任指導で済ましてやろう…有難く思うがいい」

ティファ「やっぱり指導は避けられなかったか…」

クラウド「当たり前だ。生徒ならともかく教員の私物盗ったんだからむしろ指導で済んだだけ奇跡みたいなもんだろ？」

ティファ「む…」

皇帝先生「まあ何にせよテストを始める。制限時間は五十分だ」

くそしてなんやかんやすったもんだあつてテスト編終わり 教室く

セシル「ついに作者テスト編あきらめたね…」

w o l 「仕方あるまい。作者は今モン○ン4に完全に毒されているからな…」

ジタン「へえ…名前なににしてんだ？」

w o l 「たしか『かきのたね』って名前にしていたと思うが…」

ジタン「ハア…アルマイルといいかきのたねといいこの作者が付けるユーザーネームの意味がわからん…」

クラウド「心配ない。作者自体名前の意味が分かって無いんだから」

バツツ「マジか…」

クラウド「しかも今作者は完全にモン○ン中毒でな…以前友人に『今何時?』と聞かれて『ババコンガ』と答えたらしいぞ」

ジタン「うわあ…」

セシル「それに今作者が使っているパソコンの調子がポンコツ以下の以下ほどいかにれているから、今度修理に出すそうなんだ」

バツツ「へえ…でそえにはどれくらいかかる訳?」

セシル「ざっと十日つてとこかな?」

ジタン「作者発狂するぞ?」

セシル「マッド○ーザーができないのは作者にとつては重傷だけどもあやつぱりモン

ハ○があるから大丈夫なんじゃない？」

クラウド「そんな事より十日間も空くんだろ？この小説大丈夫なのか？」

セシル「え？全然大丈夫じゃないよ？」

クラウド「OH…やっぱり」

ティファ「何固まって話してんのよ男子勢は？」

クラウド「ああ、作者の話をな…」

ティファ「ついにネタが完全に尽きた挙げ句PCが事あるごとに落ちてついに画面を殴ったら下半分が消えて放心状態の奴の事でしょ？ホント、バカな事やらかしたわよね」

クラウド「その数十倍ひどい事しているのはどこの誰なんだか…」

ティファ「ああ!？」

クラウド「そんなに怒んなって…それにティファの事だとは一言も言っただろ？」

ティファ「こういう時は十中八九私の事を指して言っただろ!!」

クラウド「よくおわかりで」

ティファ「このっ…!!」

ジタン「まあ落ち着けて…そんな事よりこのテスト編が終わったら次何編になるんだ？」

バツツ「夏休みは…まだ少し早いな」

スコール「主役とかいるんじゃないか？」

隙間さん「…次回は…私が…」ボソツ

全員「!？」

次回……やつと出番… by 隙間さん

隙間さん編

第三十八話 ティファ 「新たな仲間の誕生ね!!」

ある日の放課後 教室へ

ティファ 「おかしい!!これは絶対おかしい!」

ライトニング 「はあ?何が?それともようやく自分がいかにおかしい事をしているか
気付いたのか?」

ティファ 「そんな事じゃ無いわよ…って言うか私そんなおかしい事やらかした覚えな
いんだけど!」

クラウド 「なあスコール、一番怖い嫌がらせってどんなのか知っているか?」

スコール 「いや、知らないな」

クラウド 「それはな、全く悪意のない嫌がらせだ」

スコール 「ああ、なるほど…激しく同意するな…」

ティファ 「何しみじみ納得してんだよおいこらその根暗二人!!…あついややっぱ
りクラウドは抜きで…べつ別にクラウドが特別とかそういう意味じゃなくてクラウド

はマシンだけっていうか……」

クラウド「何きつきからもごもご言ってるんだ？変なもんでも食ったか？…それとも頭でも打ったか？」

ティファ「ち、違うわよ！この馬鹿クラウド!!」ポカッ

ドギャンッ

クラウド「はぐあっ…ティ、ティファ…お前のパンチはたとえ1000000分の1の力で殴ったとしても軽く城塞を突破できるぐらいの威力はあるからせめてもう少し…」

ティファ「あっごめん!!」

クラウド「ま、まあ分かってくれれば…それで…」

フリオ「〜♪」ニヤニヤ

ライトニング「フリオ？なんだか嬉しそうだな、どうした？」

フリオ「いや、なんだかんだ言ってもクラウドとティファって仲が良いなって思ってたな」

ライトニング「ああ、あいつらは小さい頃からの幼馴染だってティナから以前聞いた事がある」

フリオ「へえ、そうなのか……まあさすがにオレとライトほどじゃあ無いけどな！」
ライトニング「全く、学校でのそういう発言はよしてくれ。続きは寮の戻ってから、だろ？」

フリオ「ハハ……分かってるって」

バツツ「あ、そういえばさ！さつきティファお前何かおかしいとか言ってたけど、結局何だったんだ？」

オニオンナイト「バツツ達が前のテスト（三十六話らへん）で補習のかからなかった事なんじゃない？」

セシル「確かにあれは僕も目を疑ったよ……」

ヴァン「というか今回誰も補習無しだろ？ある意味奇跡だろ」

ジタン「もう奇跡を通り越して別の何かだろ」

バツツ「んでティファ、その事なのか？おかしい事って」

ティファ「うーん……確かにその事も確かにおかしい事だけ……私が言いたいのはそのん

なじやないのよ」

クラウド「じゃあ何なんだ？すまんが本当に分からん」

ティファ「この机の並びの事よ!!」

スコール「机？机がどうしたんだ？普通にきれいに並んでいるが？」

ティファ「でも机とかの整理整頓係ってティーダとヴァンよ!!？絶対やりそうにないじゃない！」

ティーダ「ちゃんとやってるつすよ!!…最後に整理整頓の係の仕事やったの覚えてないけど…」

ユウナ「それにwooさんとかライトニングさんがやってくれたのかも…」

ライトニング「悪いが私は他人の物品にはあまり触りたくないんだ。…それにwooは放課後すぐに職員室に行ったからな」

バツツ「じゃあ誰がやったんだ？」

ティナ「隙間さん…」

バツツ「え？」

ティナ「知らないの？最近学校で結構有名なんだけど…」

バツツ「へく…あの人結構有名な人だったんだ…知らなかったな…」

クラウド「何を言ってるんだ隙間さんはこの学校の『五不思議』の一つだぞ」

バツツ「は？何言ってるんだよオレ前学校で会って……あれ待てよ？そーういえばそーう
いうの前シャントツト先生から聞いた覚えがあるぞ……て事はオレ達幽霊助けた事にな
るのか？」

ジタン「その隙間さん今お前の真後ろにいるぞ？」

クラウド「？…ジタン、オレには何も見えないが？」

ティファ「私も全然…ちよつとジタン！嘘ついてんじやないのー？」

ジタン「嘘じゃねえって！」

ティファ「じゃあなんで私達には見えないのよ!!」

ジタン「そ、それは…」

ティファ「はい嘘けつてー……い!!」

ジタン「だから本当だつての!!」

ワーワーギャーギャー

ガラガラー

woo「今戻つたぞ…というかお前から何しているんだ？」

スコール「ああ、wooか、いや実はな…」

woo「なるほど、事情は大体分かった…要するに今その隙間さんはここにいるのだらう?」

ジタン「まあそうだが…」

woo「なら今この場で姿を見せてくれる事は出来ないのか?」

ジタン「え!?!」

woo「いや、ムリならそれでいいんだ」

ジタン「多分ムリなんじゃ…」

スーーーー…

ティファ「あ!何かでてきた!!」

隙間さん「!!?!」スーーーー…

バツツ「あつちよつと待って消えないで!!」

ティナ「…で」

ユウナ「まずはお名前から教えて下さるとうれしいんですが……
隙間さん「……隙間、といいます……」

ユウナ「ああ、分かりました……それで、えっと私達の自己紹介とかいります？」

隙間さん「……それは、いい……です。……ずっと見てましたから大体分かります」

スコール（ずっと、か……じゃあ〇〇二ーとかしてるのも全部見られてるのか……マズいな）

ユウナ「じゃあ質問を変えますね？では何で私達の事を見ていたんですか？」

隙間さん「……そ、それは……！」

ティファ「お前ら全員を呪い殺す為だー！……なんちやつてね」

バツツ「おいおいそんな訳ないだろ？」

ティファ「見かけだけで判断しちゃだめなんだよ!!女は怖いんだから！」

バツツ「それはもう毎日イヤと言うほど実感させられてる」

クラウド「おいバツツ、ティファは女子というよりはもうファイナルウエポンに近い存在だろう？」

ティファ「誰がファイナルウエポンよ!!」

隙間さん「……………です…」

ジタン「…え？なんだった？」

隙間さん「こうして皆と一緒に居たかったです…」

全員「……………」

セシル「隙間さん、で良かったかな？」

隙間さん「はい…」

セシル「君はどれぐらいの間この学校にいたのかな？」

隙間さん「さあ…多分かなり長い間…つとは言っても5、6年の時間です…」

ティファ「そんな事はどうでもいいから！まずあなたは幽霊なの!!」

隙間さん「…はい」きつぱり

ティファ「うぐっ…そうきつぱり言われると…」

ジタン「でもこうしているって事は何かこう…未練とかそういうのがあるんじゃない

いのか？」

隙間さん「…………それが…私の生前の記憶は全く無いんです…」

クラウド「名前も？」

隙間さん「はい……」

wo1「では隙間さん、というのは本名ではないのか……」

ティータ「じゃあ自分の名前もぜんぜん覚えていないっスか？」

隙間さん「そういう訳じゃ……ありません……一応名は……」

ティファ「なんていうの？」

隙間さん『流石』、といます……」

ティファ「へさすが……？」

隙間さん「それよく間違われました……ヘルシ……っていうんです……」

ティファ「ふうん、じゃルシちゃんでもいい？なんか隙間さんっていうのも堅苦しいし

……」

隙間さん「どちらでもかまいません……呼びやすい方で読んで頂ければ……」

ティファ「ま、話を聞いた限りじゃどつちにせよ、ルシちゃんは私達の話の輪に入つて楽しい事がしたいと?」

隙間さん「!そ、そうです!!」

ティファ「フフ…このきちがi…じゃなくて曲者ぞろいの中に新しく幽霊の女の子…なかなか良いんじゃない?」

クラウド「さっきから何ぶつぶつ言ってた?」

ティファ「ねえどう?これからこの子を私達の新たなクラスメイトに迎えるっていうのは!!」

隙間さん「い、良いんですか!?!」

ティファ「別に良いんじゃない?詳しい事は分かんないけど見た感じ制服はここのだし」

w o r 「転校届けなどのそういった面倒な書類などは私がなんとかしよう」

バツツ「席とかは男子寮の倉庫にある奴をオレ達が持つてくればいいしな!」

ジタン「ああ!!」

隙間さん「すみません…色々私のわがままで……」

ティファ「あぁー!!もうそういつた辛気臭いのは無し!!これからあんたもこのクラスの一員なんだからもつとシャキツとしないと!!」

隙間さん「……はい！」

ティファ「ん、よろしい」

ティファ「新たな仲間の誕生ね!!」

ジタン「んじゃあさ、隙間さん……じゃなくてルシちゃんの歓迎会かなんかしようぜ!!」
バツツ「お!それ良いな!……でもオレ今持ち合わせが無いんだが……」

ティファ「んじゃあさ!!軽く何かして遊ばない?そっちの方がルシちゃんも良いでしょ?」

隙間さん「……はい!……でも何をするんですか?私走つたりするのはちよつと……」
ティファ「うん……じゃあまずはシンプルにじゃんけんでもする?」

クラウド「お前がじゃんけんを持ちだすとは珍しいな……でも何かあるんだろ?……例えば負けたら脱衣とか……」

くクラウドの脳内イメージく

ティファ「もう…クラウド強いんだから…／／／」 ファサツ

ユウナ「もうお嫁にいきません／／」 ファサツ

ライトニング「フツ…フリオにしか見せた事ないので／／」 ファサツ

ティナ「もう…クラウド君のエッチ／／」 ファサツ

隙間さん「こんなの見て…何が面白いんですか…／／／？」 ファサツ

ドゴツ

クラウド「ひでぶっ！」

ライトニング「女子の前…ましてや初対面の前での発言とは思えんな…」

ティファ「もう…クラウドのエロバカ!!」

隙間さん「？」

クラウド「…で結局、こーゆーの（肉弾戦系）になっちゃう訳ね…」

ティファ「やっぱ若いうちは体動かさないとね！…っていうか脱衣よか健全よ!!」

スコール「それにしても、『たたいてかぶってじゃんけんポン』のセットなんてよく学校にあつたな…」

ヴァン「教師達の日常風景が思いやられるな…」

w o o 「道具もはりせんからバットまで様々だな…」

ティファ「後ティナにも一つ前使ってたものを持ってきたもらったの」

オニオンナイト「まさかとは思うけど鈍とかじゃないよね？」

ティナ「そ、そんなもの持って来ないよ!!…私が今日持ってきたのは…」

ティナ「これ!!」↑釘バット

全員「……」

バツツ「お前これ何に使ったんだよ!?!」

ティナ「昔使ってたのをアレンジしてみたんだよ!」

オニオンナイト「アレンジが釘って…」

クラウド「おいティファ!これありなのか!?!」

ティファ「んー? まあ良いんじゃない? (どうでも)」

クラウド「そんな殺生な…」

ティファ「まあそんな事は良いとしてもちろんルールは追加ね!!!」

バツツ「はあ? じゃんけんで負けた側も攻撃OK?」

ティファ「そ! そっちの方がスリルがあるでしょ?」ブンツ

フリオ「あぶなっ」

ユウナ「それじゃ対戦する人をくじかなんかで決めませんか?」

ティナ「もちろん『呪いのおう様ゲーム』(↑修学旅行編参照)でね…」

バツツ「途中中断はできないってか…:…:良いね!! そっちの方が緊迫感があるってもんだ!!」

〜第一回戦 隙間さんVSユウナ

パシッ

隙間さん「きやふっ」

ユウナ「どうですか!!私のはりせんさばき!!」

隙間さん「容赦無さ過ぎです…」

ユウナ「勝負とは非情なものなんですよ?」

ティファ「じゃあとりあえず一回戦はユウナが勝利つと…」カキカキ

〜第二回戦 バッツVSジタン

ジタン「日頃の恨み!今ここで!!」バツ

バツ「いやいやいや!?オレ何も心当たり無いんですケド!」ガキイン!

〜そして決勝戦 クラウドVSティナ

クラウド「女子勢には今まで運よくあたらなかつたが…やはり決勝戦は避けられねえか」

ティナ「クラウド君、胸を借りる気持ちで行くよ…」

ユウナ「なんですか？この緊迫感…」

ライトニング「それだけ奴らも必死なんだろう」

ティファ「…（いーなーティナ、クラウドとできて…）」

クラウド&ティナ「最初はグー！じゃんけんポン!!」

バツツ「クラウドが負けた!!」

ティーダ「そして使うのは…」ゴクツ

ティナ「く・ぎ・バ・ツ・トーーーーー!!」

メキヤツ

クラウド「ひいひいひいひいひいひい!!」

セシル「あ、危なかった…もう少しでクラウドが脳漿炸裂ボーイになるところだったね…」

ティナ「クラウド君…避けちゃだめだよ？」ユラア…

クラウド「いやいやオレ今受けるものがないんですけどー!?!」

ティナ「体があるよ☆」ニコツ

クラウド「ひいひいっ!!天使の様な笑顔で恐ろしい事を!」

ティナ「じゃあじゃんけんするよ？」

クラウド「お、おう…（もう負けられない…）」

クラウド&ティナ「最初はグー！じゃんけんポン！！」

woo「またクラウドが負けた!?!」

ティナ「大丈夫だよクラウド君、痛いのは一瞬なんだから」クスッ

クラウド「そういうのマジしやれになつてないからね!?!」

ティナ「それっ！」ブンッ

ガキンッ

ティナ「!?!…なんの真似なのかな？」ギギッ

ティファ「あいにくだけどあんまり死者は出したくないのでね…」ググッ

スコール（どの口が言うんだか…）

キーン
コーン
コーン

ティナ「あ、チャイムなつちやつたからもう終わりだね？」

ティファ「え、ええ…そうね」

クラウド「ティファ」

ティファ「え？何？」

クラウド「お前ホントカッコイイよな!!女にしておくのがもったいないくらいだ!!」
ティファ「あ、ありがと……（これでもし立場が逆なら危機を救ったヒーローなのに……もうクラウドのバカ!!）」

ティファ「あ、そうだ思ったんだけどさこうやって遊ぶのを週に何回か定期的にやるってのはどう?」

ジタン「別に良いんじゃないか?面白いし」

セシル「そんな事より隙間さんの部屋どうする?」

ティファ「あ!すっかり忘れてた……倉庫で良いんじゃない?」

ティナ「そ、それはいくらなんでもひどすぎる気がするよ……」

ライトニング「ここは隙間さんに決めてもらった方が良いだろう」

ウォー「そうだな、……隙間さん、誰と同じ部屋が良い?」

隙間さん「わ、私は……バツツさんとジタンさんの部屋が良いです／＼／」

全員「……」

全員「はあああああああああ!?!」

つづく

第三十九話 隙間さん「イカ臭いってどういう事ですか？」

前回からの続き

隙間さん「わ、私は……バツツさんとジタンさんがいいです…」

全員「……」

全員「はあああああああああ!!」

バツツ「な、なんで!」

隙間さん「あ……やっぱり…駄目、でしたか……?…」

もとかから蚊の無く様な声だったのが、さらにか細くなっていく。

バツツ「いや、そういう訳じゃなくてだな…一つ屋根の下健全な高校生男子であるこのバツツさんやジタンさんと一緒に過ごすというのは…ちよつと…」

ティファ「そうよ! ルシちゃん!! 絶対こいつらの部屋イカ臭いからやめといた方が良
いって!」

ジタン「はああ!?! お前何勝手に決めてんだよ!!」

ティファ「じゃあ違うの? 今からあんたの部屋行ってゴミ箱の中漁ってその中の

ティッシュに含有されているものを調べても良いんだけど？」

ジタン「ぐっ……？いや待てそんなのどうやって調べるんだ？」

バツツ「そもそも誰のかなんてDNA鑑定とかなんとかしなきゃならないんだろ？どうやって確かめるんだよ!？」

ティナ「私の『ライブラ』で一発だよ？」

『ライブラ』とはFFの魔法で対象の現状を詳しく知る事が出来る魔法である。だからゴミ箱の中の乾いたカピカピのティッシュの付着物がいつ誰によって解き放たれたのかもバツツリ分かる

ジタン「くそっ……このチート野郎どもがっ！」

ティファ「フフン、褒め言葉と受けつつっておこうかしら？」

隙間さん「あ、あのう……すみません……」

自分の制服のリボンをいじりながら、隙間さんはおどおどとした様子でティファの前に立つ

ティファ「うん？何？」

隙間さん「イカ臭いってどういう事ですか？……私よく意味がわからなくて……」

全員「……」

その場にいた全員の動きが止まった。

隙間さん「バツツさんとジタンさんはイカがお好きなんですか？…わ、私お刺身とか
そういったのは苦手ですけど…：…そんな事全然気にしませんから…：…」

その言葉に真っ先にバツツが答えた。

バツツ「いや！隙間さんちがうんだ!!ここで言うイカ臭いっていうのは本当のイカ
じゃなくてだな…：その、なんというか…：…」

隙間さん「？」

バツツの曖昧な答えにますます頭の中に？が浮かぶ

ティファ「ハア…もう私がズバツと答えてあげるわよ」

隙間さん「お願いします…：」

ティファ「要するにバツツ達が汚い乳でかババア共の画像やらなんやらで興奮して自
分の分身を必死にしごい…：…」

クラウド「それぐらいにしようか？」

ティファ「ブー！ここからが面白いのにー!!」

バツツ「面白いのはてめえだけだ！こっちは社会的地位を失うんじゃないかってひや
ひやしてたんだよ!!」

ティナ「まあもとかからミカズキモ以上ミジンコ以下の地位だからあんまり変わらない
んだけどね…：」

バツツ「オレミジンコ以下!」

ティファ「良かったじゃないバツツ達! 何とかミカズキモよりは上をキープしているわよ!!」

バツツ「ちなみにゴキブリはどんぐらいのランクなんだ?」

ティファ「ミジンコの上の上のそのまた上ね」

ジタン「せめてゴキブリ以上にしてくれえええ!!」

woo「話がかなり大きくそれたが…要するに隙間さんはバツツ達と同じ部屋が良いんだな?」

隙間さん「は、はい……」

ライトニング「本人が行きたいって言うてるんだし別に良いだろう? バツツとジタンもさすがにこんなことで問題は起こさないだろう」

ティファ「いやいやあ…分かんないわよお? 寝てる間に縄跳びかなんかで手足を拘束してあられも無い姿を…」

ライトニング「…少し黙ってくれないか?」

ティファ「ごめんなちやい☆」

セシル「それにバツツとジタンは先に帰った方が良いんじゃないかな？」

バツツ「はあ？なんで？」

セシル「片づけておかないと後後まじいものとかあるんじゃないの？」

ジタン「!? そうだった！あぶねえあぶねえ!!」

隙間さん「後後まじいもの？バツツさん、まじいものってなんですか？」

バツツ「え？…そりや色々と…こう…爆発しそうなものとか（↑オレの性欲がな）」

隙間さん「ば、爆発ですか!? そんなに危険なものどうして…」

ジタン「色々と役に立つんだよ（↑収まりが付かなくなった時とか）」

隙間さん「へえー…」

隙間さん「あの？…バツツさん…私はどうすれば…」

バツツ「あー…そうだな…んじや今から30分後ぐらいにオレ達の部屋に…つていうかオレ達の部屋分かるか？」

隙間さん「し、すっかり覚えていきます……！」

バツツ「ならよかった。行こうぜジタン！んじやまた後でなー」ヒラヒラ
隙間さん「はい……また後で……」

軽い挨拶を済ましてからバツツとジタンは自分の寮に向かって走っていった。

く D D F F 学園 下駄箱く

ポツポツ……ザーー

さつきまで小雨だった雨がよいよ本降りになりだした。

ティファ「うっわ!!すごい降ってんじやん!!これ帰れんのかなー?」

ユウナ「私折りたたみのやつ持ってきていますから」

そう言つてユウナはカバンから折りたたみタイプの小柄のカサをとりだした
ティファ「あんたつてホント用意周到よねー……今日の予報晴れだったじやん」
ユウナ「こんな事もあるうかと常に常備しているんですよ?」

一言、二言話すとユウナは下足置き場をあとにした

ユウナ「じゃあ私先に帰りますね？雨、止むと良いですね」

ティファ「う、うん…ありがと」

ティファ「…」

ティファ「あー…全然やむ気配無いんですけど…ていうかむしろ激しくなってきたりするよな…」

ティファ「いつそのこと私の気合で雨雲割つちやおつかなく…でも前それして至近距離にあつた学校が木端微塵になっちゃったからあんまりしたくないんだよな…」

ティファ「この雨と言い、今日の『叩いてかぶってじゃんけんポン』といい、私ついてないな…」

ティファ「ハア…今日は濡れて帰るか…」

その時、ティファの前にカサを持った人影があつた。

ティファ「え？」

クラウド「何やってんだ、濡れるぞ？」

ティファ「いや、アハハ…その、カサ忘れちゃってさ…」

クラウド「そんな事だと思つた…：…ほら」

そういつてクラウドは自分のカサをティファに差し出した

クラウド「入るだろ？」

ティファ「う、うん…ありがと／＼」

クラウド「さっきはこっちもありがとうな。」

ティファ「いつ良いわよあんぐらい!!」

ティファ「／＼／＼!!」

クラウド「／＼…」

そのやり取りを下置き場から眺める人影が二つ

ティナ「なんだかんだ言ってあの二人も青春を謳歌してるんじゃないかな？かな？」

オニオンナイト「うん、そうだね」

ティナ「玉ねぎくん？私もあれしてほしいな…」

オニオンナイト「カサ持ってんじやん」

ティナ「これはカサじゃないよ！高機能ビーム砲なんだよ？」

オニオンナイト「どこが!？」

ティナ「ホントだよ！うんとね、ここの取っ手の部分をひねると…」

ズビーー!!

カサ…ではなく高機能ビーム砲から発せられたビームは、床に直径3メートルほどのクレーターを作った

オニオンナイト「OH…」

ティナ「ね？だから一緒に入る？」

オニオンナイト「うん、分かったよ…」

夜もいよいよ更け、そろそろ12時になる頃。消灯時間もとくに過ぎていっているのに、煌々と電気が付いている部屋があつた。

　　男子寮　バツツ&ジタン&隙間さんの部屋

バツツ「…」

バツツは気まずい時間を過ごしていた。

ジタン「zzzz…」

ジタンはもうダウンして自分のベッドでもう力尽きている。

隙間さん「…?」

隙間さんはちよこんと部屋のまんなかのクッションに座っていた。

バツツ「…で?どうする?」

隙間さん「何がですか?」

バツツ「どこで寝るかだよ!」

隙間さん「え?…:私は別に床で良いですよ?前からそうでしたし…」

バツツ「いや!さすがに女子に床で寝させて自分はベッドで寝るっていうのは紳士で

あるバツツさんにはできません!!」

隙間さん「じゃあ…どうするんですか？」

バツツ「オレが床で寝る」

隙間さん「!?…ダメですよ!…あれ慣れないうちは体痛くなりますよ!？」

バツツ「明日辺りに布団買えば良いだろう? 今日ぐらい良いよ別に」

隙間さん「ダメです!!」

バツツ「すごい剣幕だな…これは従った方が良さそうだな…」

バツツ「分かったよ…でもどうするんだ? さっき言った様に隙間さんが床で寝るのは

NGね」

隙間さん「一緒に寝ましょう」

バツツ「ぶっ」

隙間さん「ど、…どうしましたか?…」

バツツ「いや、唐突だったから……」

隙間さん「でも…これならお互い床で寝る事ありませんし…」

バツツ「いや…そうなんだが…良いのか?」

隙間さん「?、何がですか?」

バツツ「そのだな…オレと一緒に寝る事が…」

隙間さん「…と、とんでもないです！……むしろご褒美ですよ…」ボソツ
バツツ「え？」

隙間さん「な…なんでもありませんから…！早く寝ましょう！……明日も…朝早いで
すから」

バツツ「お、おう！そうだな！」

第四十話 全員「…………」

前回からの続き

　　男子寮　バツツとジタンと隙間さんの部屋　朝

バツツ「んう…昨日はなんやかんやあつたが…目覚めは良いな…」グツ

無意識にバツツは二段ベッドから降りようとした、がなにかに止められて…できなかった

バツツ「ん？」

隙間さん「スウ…スウ…」

隣には隙間さんがバツツの寝間着をしつかりと握って、規則正しいリズムで呼吸をしていた。

バツツ「そういえば昨日一緒に寝たんだった…。す、隙間さん？できればその起きてその手を離してほしいのですが？」

軽くゆすつて起こそうとする…が、反応は無い

隙間さん「スウ…スウ…」

バツツ「あの、隙間さん？」

もう一度華奢な体を軽くゆするバツツ

隙間さん「んう？……」

軽く薄目になり、辺りを見回す隙間さん

バツツ「フウ……やつと起きた……あの、できれば手を離し……」

隙間さん「スウ……スウ……」

バツツ「ちよ、もう寝てるし!!……仕方ない、ジタンに手伝ってもらうか……おい!

ジタン!!」

だが、ジタンからの返事はなかった。

バツツ「あ、あいつ先に行きやがったな………どうすんだよこれ……無理やり起こすのもなんか悪いしなあ……」

隙間さん「スウ……スウ……」

バツツ「……仕方無い、オレももう少し寝るとするかな!!」バサツ
そう言つてバツツはまた布団を深くかぶった。

〈教室〉

コスモス先生「…で、HR終わり五分前にこのこと登校してきて理由が『一緒に寝ていた女子を起こすのもなんか悪いからそのままにしていたら自分も寝てしまって学校に遅れた☆』、とは…バツツ君、嘘をつくならもう少しマシな嘘を…」

バツツ「だーかーらー嘘じゃねえって!!」

コスモス先生「ハア…………ここは当の本人に聞いてみましょう。ええと、新しく入ってきた…確か、隙間さん、で合ってますか？」

隙間さん「…は、はい…………」

コスモス先生「ではさっそく聞きますがさっきバツツ君が言っていた事は本当ですか？」

隙間さん「はい…………私が…うっかりバツツさんの裾を持ってしまったので…………」

コスモス先生「…嘘をついているようには聞こえませんが…まあ今回は冤罪という事にしておきましょう」

バツツ「だからホント何もしていないって!!」

隙間さん「バツツさん……ホントにすみません……あの、……私いつも夜に行動していたので……あう……朝はまだ苦手で……」

いつもの様におどおどとした口調で必死に謝罪する

バツツ「いやいやそんなに気にしてねえって!それにそういった事に気付けなかったオレにも少なくとも非があつた訳だし……」

コスモス先生「話を変えますけど、隙間さん、年頃の女の子が夜遅くまで起きているのはお肌の大敵です!そんな事していると後々後悔しますよ!」

スコール(あんたが今猛烈に後悔しているからな……)

隙間さん「?大丈夫ですよ……私ゆうr……」ティファ「はい先生!!早くHR終わらせましょう!!次の授業始まってしまいます!」

隙間さんの失言をうまくフォローする為に、ティファが割って入る

コスモス先生「それもそうですね。……では今日のHRはここまでで……」

〽一時間目前 教室〽

ティファ「あんたいきなり昨日まで幽霊でした☆なんて言って大の大人が信じてくれる訳無いでしょ!？」

隙間さん「た、確かに……すみません……」

ティファ「ハア……全く、もつとはつきりしなさいよ」

クラウド「お前ははつきりし過ぎだ」

すかさずクラウドがツツコミを入れる

バツツ「朝からとんだ災難だ……」

ジタン「まあまあ、でも悪い気はしなかつただろ? かわいい女子と一緒に寝れるなんて……!」

バツツ「それはまあ……て言うかジタン!! なんでお前オレ置いて行つたんだよ!!」

ジタン「いやあ……何かまあ、こう邪魔しちや悪いなー的なオーラがすつごい出てたから……」

バツツ「……どんな感じだったんだ?」

ジタン「ホントもう端から見るとまるで彼氏と彼女の関係だったぜ?」

バツツ「やめてくれよ／＼／」

ティファ「まあとにかく！あなたの事を知っている人以外にあなたが死人である事を話したりしないようにね！良い!!」

隙間さん「は……はい……」

バツツ「んで、次の授業は何なんだ？」

ガラガラー

シャントット先生「私の授業でしてよ？」

小柄な見た目に山の様なプリントを持って、この学校、ではなくこの世最強の魔導師がやってきた

バツツ「えー…一時間目から理科かよー…まじテンション下がるわー……」

シャントット先生「あらあらそれはいけませんねえ…ではバツツ君が居眠りするほど退屈しないようにもつとスリリングにして差し上げましょうかしら？」

ジタン「居眠りしただけでファイガ以上とか…」

バツツ「いや、それはマジ勘弁!!」

シヤントット先生「あら、残念ですわ…」

悪魔の様に不敵な笑みを浮かべるシヤントット先生、…がすぐに驚嘆の顔に変わったシヤントット先生「あ、あな…あなたは…」

あまりの驚きに持っつてい山積みのプリントを全て落としてしまった

w o l 「せ、先生!?!プリントを拾いましたようか?」

シヤントット先生「そんなことは後でもよろしいですわ!!」クワツ

w o l 「!?!」

まるで鬼神のような形相で歩み寄るシヤントット先生。その先には隙間さんがいた

隙間さん「ひっ!?!…」

シヤントット先生「あなた…どうしてここに!?!」

隙間さん「え?…?…どうしてつと言われても…私…:…え?…」

シヤントット先生「答えなさい!!あなたの肉体は…ではなくあなたはすでに死んでい
るはずでは?」

ティファ「え?シヤントット先生知ってたんですか?」

シヤントット先生「え!?!…え、ええ…:…で、ルシさん?あなたどうやってここに?」

隙間さん「…わ、分かりません…でも多分幽霊になっちゃったんだと思います…:…」

シヤントット先生「はあ?幽霊?」

隙間さん「はい……ひゆうドロドロのやつです……」

シャントツト先生「……まあ良いですわ……。授業を始めましょうかしら？」フラ……痛む頭を抑えながら教壇の前に立つ。

w o l「先生、落ちてているプリント拾いましょうか？」

シャントツト先生「プリント？……ああ、そんなものありましたわね……すみませんが拾って下さるかしら？……ハア……」

w o l「は、はい……」

セシル「ぼ、僕も手伝うよ……」

ヴァン「なあティーダ、シャントツト先生どうしたんだ？」

ティーダ「さあっス……トイレから戻ってきた時からずっとああっス」

ヴァン「ふうん」

くそして放課後 教室く

ユウナ「今日のシャントツト先生どうしたんでしようか？」

ライトニング「ああ、なにか思いつめている様だったな…」

ティファ「婚期を逃した人は大変だねえ」ケラケラ

クラウド「おまつ……先生いたらブチ殺し確定だぞ…」

隙間さん「それにしても…何だったんでしようか……私の事、何か知っていそうでしたけど…」

フリオ「ああ、確かに授業中もしきりに隙間さんの方を見ていたしな」

ティファ「うげえ…もしかしてレズって奴…？ひくわ…」

ガラガラー

シャントツト先生「勝手に引いてなさいな…」

ティファ「うひゃあ!？せ、先生!？」

シャントツト先生「全く、影でこそそこそと悪口とは…教育がなっていないのでは？」

スコール「会話を盗み聞きとは、先生も人が悪いのでは？」

シャントツト先生「勘違いしないでほしいですわ、私はたまたま通りかかっただけです……それと」

隙間さん「？」

シャントット先生「くっくっ…それではまた」ペこり

礼儀正しくおじぎをして、その場を後にする

↳廊下↳

研究室への長い渡り廊下を無言で、速足で急ぐシャントット先生

シャントット先生（どういう事ですの…？精神体が分離してこの世に居座るならまだしも、この現世で肉体を作り出すなんて…でもどうやって？）

シャントット先生（錬金術？…しかしその方法で生み出すにはもう片方の肉体を犠牲にしなければならない…まさかあんな娘にそんな事出来る訳が…）

シャントット先生（そもそもあの娘の身体は私がつているはず…）

シャントット先生「ふう…情報が足りなさすぎますわ…もう少し、ルシさんが亡くなったあの事件、調べた方が良さそうですね…」ツカツカ

↳放課後 教室↳

クラウド「んで？今日も昨日みたいに何かするのか？」

ティファ「もちろん！今日のテーマは……これよ!!」

そういつてティファはカバンからたくさんの割りばしの様なものが入った筒の様なものを取り出した

オニオンナイト「な!!…そ、それは…」

ティファ「そう！あの皆のトラウマ、『呪いのおう様ゲーム』よ!!」

フリオ「確か、王様の言った事には何があっても従わなければならぬって言う曰くつきのだったっけ？」

バツツ「お前それ処分したんじゃないのかよ!？」

ティファ「えー？だってなんか楽しそうだったしー？棄てんのもつたいなかったしー？」

w o o「やめろ、また死者が出る（↑第六話あたり）」

ティファ「大丈夫だって今度は違う使い方するから!!」

スコール「どんな？」

ティファ「『いつ・どこで・だれが・なにをした』って知ってる？それぞれ紙に書いて一枚ずつ引いて書いてある事をする罰ゲーム!!」

ジタン「今さらつと罰ゲームつつたな？」

Wol「ようするにどういう事だ？」

ティナ「やってみれば分かると思うよ」

フリオ「…で全部書いたが…これをどうするんだ？」

ティファ「書いた人はそれを『呪いのおう様ゲーム』の棒に結んでつて！」

クラウド「それでくじにする訳か…引く人は？」

ティファ「私に決まってるじゃん！」

クラウド「…じゃあさっさと引け」

ティファ「はいはい…んじや記念すべき一番目」ぬきつ

テキトウに四本を抜いていくティファ

バツツ「あれ？でもこれって最悪『いつ』やるかとかかぶったりするんじゃないか？」
ティナ『『呪いのおう様ゲーム』に、不可能は無い…』
バツツ「便利なもんだな…」

ティファ「じゃあ読み上げるよー！…えーと何々？いつかは『放課後』！」

ライトニング「おお」

ティファ「どこでかは『教室』！」

ジタン「何か普通になりそうだな」

ティファ「んで次の誰かは『セシルとw o o ー』！」

w o o ー「ん？」

セシル「え？僕？」

ティファ「んで最後になにをしたか…ええ？」

クラウド「どうした？早く読めよ」

ティファ「…う、うん『放課後、教室で、セシルとw o o ーが』…」

ティファ『『ウホッした』…』

全員「……………」

つ
つ
く

第四十一話 クラウド「……………これは!？」

前回からの続き

全員「……………」

バツツ「書いた奴マジで誰だよ……」

ティナ「はい？」

そう言つてティナはおもむろに手を挙げた

ジタン「ティナさん……」

クラウド「なんでこんな事書いた……仮にも男×女だったらとんでもない事になつてたぞ!？」

ティナ「えー?、だつてこの教室が一度で良いから肉欲渦巻く愛と欲に満ち溢れたハツテン場にならないかなあと思つて……」ホジホジ

バツツ「んなもん玉ねぎとヤつときや良いだろうが!!」

ティナ「ああ?……」

まるで鬼神のような眼でバツツを睨むティナ。もし小動物なら見られただけで死んでしまふんじゃないかという気迫である

バツツ「はい…すみませんでした…調子に乗りました。産まれてきてすみませんでした…」

その場で土下座をするバツツ

ティナ「分かれば良い…」

隙間さん「あの…?…バツツさん?」クイクイ

土下座しているバツツの背中の方のシャツを軽く引つ張る

バツツ「…できれば裾の方を引つ張つてくれませんか? 思いつきりパンツさらす事になるんで…」

隙間さん「あつ…すみません…」

バツツ「良いよ良いよ。で、どうした?」

隙間さん「肉欲渦巻くってどういう意味ですか?」

バツツ「はあ!?!」

隙間さんが持っていた所を振り払うようにして、半ば強引に起きあがるバツツ
隙間さん「ひっ!?!…す、すみません!…私…なんか変な事言いましたか?」

バツツ「いや…そうではなくてだな…何と言うか肉欲つていのはだな…こう、肉欲は…」

ティファ「肉欲肉欲うるさいわ…// //!」

隙間さん「…あ、分かりました！」ポン

意味がわかったらしく、軽く嬉しそうに手を叩く

バツツ「マ、マジで!？」

隙間さん「はい!…要するに…テイナさんはお腹が減っていたんですね？」

テイナ「…は？」

予想外の答えに驚きを隠せないテイナ

隙間さん「つまり『肉欲』と言うのはお肉を食べたい衝動の事ですね!？」

テイナ「フツ…まあ見ていなさい…今すぐに意味が分かるから」

セシル「何だろう…なんだか体の中がどんどん熱くなっているよ／＼／＼」

w o l 「私もだ…くっ…こんな事!してはいけないと分かっているがっ!」ガバツ

そう言うが早いか、w o l はセシルに覆いかぶさった

w o l 「やらないか」

バツツ「はい、アウトロー!!!」

ティファ「総員撤収!! R—15になる前に!!」

スコール「R-18の間違いなんじゃ…とまあこんな事言ってる場合じゃないな…」
ティファ「さっ！早くティナも…」

ティナ「へ●へ●」

ティファ「ティナ眼え怖っ!?…っていうか早く出るわよ!!」

ティナ「イヤ!!私はここで全てを見届ける!!」

ティファ「なにふざけた事言ってるの!？」

ティナ「ふざけてない!!いたって正常!!」

ティファ「……こうなったら仕方無いわね…」

ティナ「からすこし遠ざかるティファ」

ティナ「や、やつと理解してくれ…?」

ティファ「どおおりやああ!!!」

ティナ「うぐっ!？」

間髪いれずに鳩尾にとび蹴りをかます。ティナの華奢な体はノーバウンドで壁を4、5回はねて止まった。

ティナ「こ、こんなところ…で……」ガクツ

ライトニング「クラウドはティナを頼む!!」

クラウド「ああ!分かった」

オニオンナイト「僕も手伝うよ!」

ガラガラ ピシヤッ

セシル「アッーッー!!」

↳廊下↳

バツツ「頼むから普通の学園ライフを堪能させてくれ…」

スコール「もうそんな幻想捨てろ」

ジタン「修学旅行の時もそうだったが、すげーな…これ…」

ティーダ「あんなに高揚したw o l r、初めて見たツス…」

ティナ「あれからが本番よ」ひよこっ

オニオンナイト「ティナ復活早!？」

ティナ「私の身体は常に『オートリジエネ』『オートプロテス』『オートトランス』がかかっているから!」

ヴァン「うわー…チートに磨きがかかってやがる…」

ティナ「ルシさん、分かったでしょう？肉欲の意味…」フフ

隙間さん「はい！やっぱり私の言った通りでした！」

ティファ「いや、お肉無かったでしょ？教室に」

隙間さん「でもセシルさんとw o o さんは持つてましたよ？w o o さんの方が大きかったですけど…」

バツツ「うん隙間さん、もうそのくらいでやめようか？何の話をしているのか大体わかったよ」

隙間さん「何ですか？」

バツツ「とにかく、ダメなんだ…」

隙間さん「？」

ティファ「んまあとりあえず二人離脱って事で、二回目いきまーす!!」

またテキトウに四本を抜き取ろうとするティファ

クラウド「おいおい…まだやるのか？」

ティファ「んー…ホントは五回くらいやりたかったんだけど…今のを見ちゃったらねえ…」

ジタン「じゃ、じゃあもうやめようぜ？」

ティファ「そうする？」

フリオ「ああ！それが良い!!うん！」

ティファ「フウ…分かった…」すっ

手に持っていたくじを離す

バツツ「ホツ…」

ティファ「だが断る!!」

今度は本当に四本抜き取る

バツツ「ぎゃあああああああ!!」やっぱりだよ!!一瞬でも期待したオレがバカだったあ

ああ!!」

ティファ「じゃ今度は一気に読み上げるね？えーとまず時間帯は『放課後』で場所は『職員室』！…んで誰かは『全員』！…で何をするかは…………『教師に腹パン』!!」

バツツ「流れる様にサラッと言いましたが…できるかあああ!!」

ライトニング「できるかな？じゃねえんだよ…やるんだよ」

バツツ「は…はひ…」

フリオ「いつにも増してライトが怖い…」

クラウド「どうかオレ達それしたら最悪全員揃って退学もしくは停学処分なんじゃ？」

ティファ「大丈夫!! 下の方に小さく『これで先生に怒られる事は無い』って書いてあるから」

ティーダ「なんと用意周到な」

クラウド「なら問題無いな」

隙間さん「バツツさん、腹パンってどんなパンですか？」

バツツ「ハハ…食べ物じゃないんだけどな…」

ジタン「単純に腹を殴れ、それだけだ」

隙間さん「食べ物じゃないんですか…少しがっかりです…で、でもいい、良いんですか?…そんな事して…」

ティナ「何度も言うけど『呪いの王様ゲーム』は絶対…」

ティファ「それにプラスに考えればあの先公共に一発かませられるんだから! 悪い事は無いでしょ?」

隙間さん「私は別に恨みとか無いんですけど……」

ヴァン「そういえば今汚取り込み中の二人はどうするんだ？」

ティファ「あの二人はリタイヤに含めるから連れてこなくていいわよ？て言うか連れてこないでマジでぜったい臭いから」

オニオンナイト「ひどいなあ…ティファが引いた結果なのに…」

ティファ「だってそんな事かいてるなんて思わなかったもん」

ユウナ「もう、早く行きませんか？こう言う事は早く済ませた方が良いですし…」

く職員室く

ガラガラー

ティファ「お邪魔します」

ぞろぞろとティファに続いてバツツ達が入る

皇帝先生「何だ？ここはそんなに広くないから用があるならさっさと済まして帰れ。無いなら今すぐ帰れ」

ティファ「じゃあ皆さつき決めたところにね」

wooとセシルを除いたクラス全員「はい」

そう言つてティファは皇帝先生の前に、ジタンはクジャ先生の前に、クラウドはセフィロスの前にと言う風にも、それぞれ色々となじみのある先生の前立った

クジャ先生「なんだいマイハニー？…はっもしかして愛の告白!？」

ジタン「今すぐにその幻想をブチ壊してやんよ…」

皇帝先生「何だ？質問ならば聞くg…」

ティファ「先生方!!!お許してください!!」

ドブツ

ティファがそう言つたと同時に職員室に鈍い音が響く。そしてティファが腹パンした皇帝先生は壁を突き破り、空を割り、重力を振り切り、大気圏に突入した。

クジャ先生「うごはっ!? ……マ、マイハニー…なかなかの愛だよ／＼」
ジタン「そこで頬を染めんな!! 気持ち悪い!!」

隙間さん「あの…痛くありませんでしたか？」オロオロ
エクステス先生「いや、全然。氣遣ってくれてありがとう」
隙間さん「あ…良かった…」

ティファ「それじゃ！お邪魔しましたー!!」↑最高の笑顔
クラス全員「お、お邪魔しましたー…」

腹を押さえて悶絶する教師達を置いて、ティファ達は職員室を後にした。

↓廊下↓

ティファ「いや〜！最高の気分!!」
ユウナ「皇帝先生大丈夫でしょうか？ほうき星になってましたけど…」
ティファ「大丈夫大丈夫!! 多分明日になりや戻ってきてるから」

バツツ「んじゃあオレと隙間さんは先帰るわ」

ティイーダ「おお!? 出会って数日でもうそこまでっスか!？」

ティイナ「以外とお盛んなんだね…?」

隙間さん「あ…勘違いしないで下さい…! ……今日は私の日用品を買いに行くだけですから…」

ティイファ「あ、そういやそうだったわね」

ジタン「ちえーつまんねえの。てつきりホテルにでも行くのかと…」

バツツ「たとえ親友でもぶっ飛ばすぞ? あ?」

ジタン「じよ、冗談だつての!」

バツツ「ま、そう言う訳だからお先く」ヒラヒラ

クラウド「ああ、じゃあな」

クラウド「そういえばお前からカバンとかは?」

ティイファ「持って来たわよ? 今日はまたあの教室入りたくないし」

クラウド「フリオ達は？」

フリオ「オレ達も同じく」

クラウド「マジか…オレだけか…少し待っていてくれすぐ戻る」

スコール「ああ、部屋で待ってる」

クラウド「ちよっ…」

スコール「ふっ、冗談だ。早く行ってこい」

クラウド「ああ」

〈教室〉

クラウド「入るぞー……………イカくさっ!？」

クラウド「しかもあいつら先に帰ってやがるし…」

クラウド「あいつら帰ったついでに教室も掃除しておけよ! HRの時とか先生に疑われるだろうが!!」

クラウド「……………まあ良い。なんとかなるだろう…」

クラウド「よし。オレもそろそろ出るか………ん？なんだこの紙？」

クラウドが見つけたのはいかにも研究者が使う類のクリップで留められた紙だった
クラウド「シヤントット先生が落としたのか？明日届けておくか……」

おもむろにパラパラとページをめくる

クラウド「なんだ？このでかでかど書かれた……『SD—0号事件』？」

クラウド「………これは!？」

クラウド「……明日、直接聞いてみるか……」

↳廊下↳

ティファ「カバン持ってくるだけのわりの時間は時間かかったじゃない」

クラウド「あ、ああ……筆箱の中身が出てしまっただけ……。それで時間を食ってしまった」

ティファ「もう！しつかりしなさいよ!!」

フリオ「よし、揃ったな。じゃ下校時間も近いし帰るか」

クラウド「ああ…」

つづく

第四十二話 クラウド「が……く……そ……」

前回からのつづき

クラウド「……………皆……すまない。ちよつと忘れ物をしたから先に帰つててくれないか？」

ティファ「えくく!? わざわざ待つてたのにー! 時間の無駄じゃないのー! ブー」

ライトニング「そう言うな。クラウドも人間だ。忘れ物をする事ぐらいあるさ」
スコール「オレ達は先に帰るが、クラウド、ホントに大丈夫か? ……何かさつきから思いつめてる様な気がするが……?」

クラウド「大丈夫だ。問題無い。気にし過ぎだ」

フリオ「そうか……。じゃあオレ達は先に帰るが、暗くなる前には帰つてこいよ?」

クラウド「いやいや、忘れ物を取りに行くだけだからそんなに長居はしないさ」

ユウナ「それじゃ、クラウドさん、また明日」

スコール「鍵開けとくから早めに帰ってこいよ？」

ティファ「バイバーイ！クラウド!!」ヒラヒラ

クラウド「ああ、また明日な…」ヒラヒラ

…
皆が帰ったのを確認してからクラウドは、教室とは全く逆の方向に歩き出した
クラウド「……………明日でも良かったが、早いに越したことは無いからな
…」

クラウド「……………確かあの人の研究室は渡り廊下を渡ってすぐの場所だったな……」

クラウド「……………行くか」

くお、値段以下二トリ前 夕方く

夕方の人通りが多い中、たくさんの大きな買い物袋を持った男子と女子が店を後にした

バツツ「いやゝゝそれにしてもかなり買っちゃったな……これでしばらくジャ○プは立ち読みで我慢するか……ハア」

隙間さん「……す、すみません……。私なんかのために、色々と付き合つて頂いて買ったものも持つてもらつてしまつて……」

バツツ「良いつて良いつて！ 確かにこの重量は確かにキツイが筋トレかなんかだと思つてやればなんてことない!!」

今バツツの両手には隙間さんが寝る為の掛け布団、敷布団、枕。他にも日用品がぎっしり入つた袋がある。

隙間さん「フフ……頼もしいです」

バツツ「おう！ どーんと任せなさい!!」

バツツ（……とは言つたもの、正直キツイな……）

今いる場所は寮まで歩いて約10分とそれほど遠い距離ではないが、日頃運動などしていないバツツにとつてはこれだけの物を持つてたどり着ける自信は無かつた。

バツツ（誰かもう一人ぐらいいればよかつた……。女子に手伝わせるつてのはオレのプライドが許さないし……）

バツツ「というか、ホントにこんな安もんで良いのか？ 贅沢はできないがもう少し女子らしい物買っても良いんだぜ？…全部無地って……」

隙間さん「良いんです。私死ぬ前からそんなに服とか気にしない方でしたし……。そんなことより、今日の夕食はどうしますか？ まだ決まって無いんでしょう？」

バツツ「あー…そうだな。どっか食へに行ったらジタンに後でどうこううるさいし、今日は寮の下の食堂で良いや。隙間さんもそれで良いだろう？」

隙間さん「え、ええ。…でも……」モジモジ

バツツ「ん？ どうした？ トイレか？」

隙間さん「…ちっ違います！…えと…そのできれば……私が夕飯を作ろうかな…と思つて……」

バツツ「え!? 良いのか？」

隙間さん「は…は…はい……。そっちの方が安上がりですし……」

バツツ「おお!! 是非お願いするぜ!! いやー! 一回隙間さんの手料理食べたいと思つてたんだよ!!」

隙間さん「え／＼／＼、それはどういふ……」

??? 「あれ？アニキじゃね？お〜い!!」

バツツ 「あ？誰だ？」

隙間さん 「あ…」

フアリス 「おいおい！自分の姉妹の名前忘れんじやねえよ!!」

バツツ 「いやいや、覚えてるってフアリス…。確か最近グラウンドワンでも会ったよな？（↑第十五話参照）」

フアリス 「あ、覚えてた？ミジンコ並みの知脳でよく覚えてられたなあ…感心感心!!
バツツ 「てめえ…実の兄に対する言葉じゃあねえな…」

フアリス 「ハハツ!!さっきオレの名前がとっさに出なかつたお返しだよ!」

隙間さん 「…お姉さんですか？」

バツツ 「いや…よく間違われるが、オレの方が年上なんだ」

フアリス 「実際は権限も私の方が上なんだぜ!」 フンス

バツツ 「全く、相変わらずだな…:…:…:そういえばレナとクルルは？」

フアリス 「あいつらは家だよ。今は最年長のあたしがあのポロ屋を切り盛りしてるんだぜ!!」

バツツ 「ふ〜ん…:…:。じゃあ12×12は？」

フアリス 「1212」 ドヤア

バツツ「やべえ…すげえ心配……」

ファリス「い、今のは急に言われて戸惑っただけだって！……ていうか隣にいる人誰？彼女？」

バツツ「隙間さんっていうんだが、別にそういうのじゃねえよ。一緒に日用品買いに来ただけだから別にそういうのじゃないからね!!」

隙間さん「そうきっぱり言われると、傷つきます……」

バツツ「あ、か、勘違いしないでくれ!!別に嫌いという訳じゃないんだ!!」

隙間さん「じゃあ…どうなんですか？」グイッ

バツツ「うっ…（上目遣いは反則だろ!?!こんなの『ああ、好きだよ』って言うしかねえじゃねえかああ!?!）」

ファリス「おーおー、青春だねえ!あ、じゃあこっちは妹達の飯とか用意とか色々あるから先に帰るわ」

バツツ「ああ、またな!!あいつらにもよろしく言っといてくれ」

ファリス「あいよー」

バツツ「よし、んじやオレ達も帰るか…」

グイッ

バツツ「ん？」

隙間さん「さっきの事…まだ聞かしてもらってません…」

バツツ「だあああ!!待て!!その事はいずれ話すから!絶対!!」

隙間さん「まあ…いざれ話してくれるなら…」

バツツ「ああ、それより、早オレ達も帰ろうぜ?帰るのが遅いとジタンに誤解される」
隙間さん「そうですね…。何を誤解されるかはしりませんが…」

くその頃職員室く

ガラガラ…

力無くゆつくりとドアを開けて、よろよろと皇帝先生が教室に入る

皇帝先生「今戻った…」

アルティミシア先生「あら、以外と早かったですね。明日ぐらいに帰ってくると思つてましたが」

皇帝先生「ほぼ垂直に打ち上げられていたから『いんせき』に乗って割りりと早く帰れた…が私の衣服はボロボロだ…」

ガーランド先生「まあ、無事で良かった」

コスモス先生「…まず皇帝先生が打ち上げられて宇宙空間を漂っていた事には誰も突っ込まないんですか…?」

セフィロス先生「この学校で宇宙空間に吹っ飛ばされる事自体滅多な事ではありませんからね」

コスモス先生「どうしよう…私この学校でやっていく自信がないわ…」

クジャ先生「そういうえばエクステス先生は？渡したい書類があるんだが…」

ガーランド先生「ちよつと前にトイレに行つてくると言っていたが、もうかれこれ10分は経っているな…」

暗闇の雲先生「どうせ大きい方だろう」ズズー

お茶をすすりながら暗闇の雲がそっけなく答える

アルティミシア先生「あまり女性が言う言葉ではありませんね…」

暗闇の雲先生「そんな事いちいち気にしていても疲れるだけだ。思った事は口に出した方が良い」

コスモス先生「おお：何気に深イイ言葉……」

セフィロス先生「ところでクジャ先生、渡したい書類って何なんですか？」

クジャ先生「大したものではないさ。まあ、この書類は明日渡しておくかな。急ぎの物でもないし……」

くシヤントット先生の研究室く

クラウド（来ちまった……。でもここまで来たからには、真相を知る必要がある、いや知らなければならぬ！）

クラウド（見るからに人体実験の一つや二つ、していてもおかしくない感じのところだな……）

研究室には怪しげな培養槽、どどめ色の薬品が並ぶ棚、作者名が書かれていない本が並ぶ本棚などとてもじゃないが理科の学校の先生の部屋だとは思えない

クラウド（確か、あの紙に書いていたのは……ここ、だったかな）

クラウドはおそるおそる本棚の一冊だけ目立った、赤い本を押す。すると……

ゴゴゴゴゴ……

さつきまでなにもなかった場所に大きな階段らしきものが現れる

クラウド（ほ、ホントにあった……！地下研究室！この下に……）

クラウド（隙間さんの肉体が安置されている……）

クラウド「行ってどうすれば良いかは分からないが……行ってからどうにかしよう」

クラウド「……行くk……」

ヒュンツ

クラウド（!?……何ださつきまで人の気配なんかしなかったし、もしもの為に鍵もかけた。人が入ってくる事はありえな……）

ガッ

クラウド（え……肩……掴まれ……）

ブウンツ

クラウドは訳も分からないままそのまま数メートルぶん投げられ、受け身をとる事

もできずに壁に叩きつけられた

クラウド「う……があっ……げほっげほっ……（くっなんて力だ！でも掴まれたときの手の大きさからして女子とは考えられない……なら、誰なんだ？）」

クラウド「せめて顔だけでも……！」

クラウドはせめて顔だけでも覚えようと顔を上げた……が、顔を上げきる前に鳩尾に思いつきりアツパーを食らい、再びその場でうづくまる

クラウド「ぐふっ!?!?う……うう……（考えろ、考えるんだ!!この状況を打破する為の考えを……）」

ガッ

クラウド「!?!」

無防備のガラ空き首にするどい手刀を下ろされる

クラウド「が……く……そ……」ドサッ

クラウドの意識はそこで途切れた

??? 「……」

シャントット先生「あら、いつからそこに？エクステス先生」ひよこっ

クラウドが出した階段からシャントット先生が顔を出す

エクステス先生「いや、ここにさつき侵入者が入ったのを確認しましてな。暗かったのでよく分かりませんでした」

シャントット先生「侵入者、ねえ…どれどれ…ってこれはクラウド君じゃありませんの!!」

エクステス先生「え、ええ!!」

シャントット先生「ハア…いくら暗がりでもよく分からなかったとはいえ、生徒に暴行を加えて気絶させるなんて…!」

エクステス先生「す、すみません…?クラウド君、何か手に持っていますか?」

シャントット先生「何言い訳をおっしゃって…あら、ホントに何か持っていますかね…紙、かしら?」

シャントット先生がその紙を取る

シャントット先生「ああ!?こ、これは!!」

エクステス先生「!?ど、どうされましたか!」

シャントット先生「い、いえ。何でもございませんわ……そ、そんな事より!さつきとここ数時間の記憶を消す準備をなさい!」

エクスデス先生「え？さっきの事だけなら数分前でも良いのでは…」

シャントット先生「良いから早く!!」

エクスデス先生「は、はい!!…ではクラウド君の友人達には何と言って送り返せば良いですか?」

シャントット先生「それくらい自分で考えなさいな……。まあ研究室の近くで気を失っていたとしても話しておきなさいな。幸い目立った外傷はありませんし」

エクスデス先生「分かりました」

シャントット先生「フウ……。あ、危ないところでしたわ……」

シャントット先生「あの子達がこの事を知るのは、まだ少し早すぎますわ……。だからもう少し、もう少しだけ……」

く男子寮バツツ&ジタン&隙間さんの部屋 夜く

ジタン「へへ、今日は隙間さんが作ってくれんのかー。楽しみだぜ!!」

バツツ「でも大丈夫か？数年間包丁すら持ってないんだろ？」

隙間さん「多分、大丈夫です……体が覚えてると思うので……」

バツツ「そうか……なら安心だな」

つづく

第四十三話 バツツ「へ!?!」

前回からの続き

バツツ「で、何作ってくれる訳?」

隙間さん「材料もありますし今日は無難にカレーでも作ろうかと……」

ジタン「カレー、かあ……いや、全然構わないんだけどね?こう……」

隙間さん「あつ……やっぱり前の家庭科の事ですか……?」

バツツ「!?な、なんで隙間さんあの事(第十七話あたり参照)を知ってんだ!？」

隙間さん「なんでつて……私……あの場にいましたし……」

バツツ&ジタン「えええええ!？」

隙間さん「そ、そんなに驚かなくても……」

ジタン「じゃあオレ達がへマしたりティファにグツチャグチャにされてるのも全部見られてたつて訳か……」

隙間さん「……み、見てましたけど……そ、そんなストーリーみたいと言わないでくださいよお……私もずっとあなた達のクラスをずっと見てた訳じゃありませんから……」

ジタン(ホツ……じゃあ良かった……じゃあ多分オレがテストでした事はバレてないは

ず……)

隙間さん「でもジタンさん、ふ、不正は良くないと思います……!」

ジタン（やっぱりばれてたか……）

バッツ「ん？ジタンお前またなんかやらかしてたのか？」

ジタン「ん？あ、ああ……まあそんなとこだな……」

トントントン……

丁寧なりズムで野菜を切る音が部屋に響く。

隙間さん「よかった……忘れてても大体は体が覚えているものですね。作り方が自然と分かってきます……」

バッツ「オレは五年もろくに料理していなかったら絶対にダークマターを作る自信があるな」

隙間さん「そういうえば、お二人はお料理とかするんですか？……いや、深い意味は無いです……台所がきれいだったの……少し気になって……」

ジタン「料理か？……まあ週に2、3回はここで作ってるなあ……」

隙間さん「へえ……あ、ちなみによく何を御作りに？」

ジュージュー……

バツツ「オレ達みたいな学生は毎日が財政難な訳ですよ」

隙間さん「は、はあ……」

バツツ「だから少しでも金銭を温存する為にそこら辺から段ボールを拾ってきて加工して食べてんだ」

隙間さん「へえ……つええ!?!……そっそんなのお腹壊しますよ!?!」

バツツ「大丈夫大丈夫!!最初の内は抵抗あつたけど慣れると結構うまいもんなんだぜ?」

ジタン「特にお湯で溶かして色々調味料を加えると結構うまいし腹も膨れるから重宝するんだ」

バツツ「冬ごろになるとホームレスの方々と段ボールをめぐった闘争があるからこつちも命がけなんだよな……まああつちも自分の家の断熱材に使うから大抵手に入れたら半分に分けて和解してるけど」

隙間さん「す、……すごい環境で生活しているんですね……お二人とも……」

ジタン「そうかあ?普通だと思っただけ?」

隙間さん(普通の人はホームレスと段ボールを争う事なんてありませんよ……)

バツツ「それより、カレー大丈夫か？さつきからずっとこっちで話しているが…」

隙間さん「あつそ、そうでした!!火止めて来ないと……!きゃ!!」

急に走り出した為、カーペットに足を取られ、こけそうになる

バツツ「うお!!大丈夫か!？」

とつさに手を出して隙間さんの手を掴む

隙間さん「あ…ありがとうございます…どうしました？」

バツツ「あ、いや…大した事じゃないんだけどよ…やっぱその、体は冷たいんだな

…って思っちゃってさ」

隙間さん「あつ…すみません…悪い思いさせちゃって…」

バツツ「いや!悪い思いなんてしてねえよ!!ただ…」

隙間さん「ただ?…」

バツツ「隙間さんが普通の女子ならなあ…なんて思っちゃってさ…ハハ…すまねえな
…勝手な事考えちまって…」

隙間さん「い、いえ…そんな事ないです…。それにできれば私も幽霊じゃなく一人
の『人間』がいいです…。そしたら／／／」

バツツ「そしたら?」

隙間さん「いいえ…何でもありません。私台所行ってきます…ハア」

いだろうが) 私としても少し心配なのでな」

スコール「あんたは起きるのを待たないのか？」

エクステス先生「いや、私はまだ職務が残っておるのでな」

スコール「そうか、じゃあ起きたら何があつたか聞いてみるが、あんたに話しておいた方が良いか？」

エクステス先生「いや、別に構わんよ」

スコール「分かった」

く 男子寮 バッツ&ジタン&隙間さんく

バッツ&ジタン&隙間さん「「いたきます」」

バッツ「五年間料理作ってないって言ってたけど、普通にうまいぞ? これ」

隙間さん「よ…良かったです…お口に合わなかつたらどうしようかと…」

バッツ「口に合わない訳無いだろ? 隙間さんが作ってくれたんだから」

隙間さん「えっ……それは……」

ジタン「ほうほう？」

バツツ「いや！深い意味は無い!!ただ隙間さんは料理が得意だな、つて言おうとした
だけだから!!」

ジタン「恥ずかしながら素直に言えば良いのに」

バツツ「お前は少し黙ってろ」ガスツ

ジタン「いてゝゝ」ヒリヒリ

隙間さん「あ、バツツさん、口元にご飯粒付いてますよ？」

バツツ「え？マジで？……どこどこ」

隙間さん「……もうちよつと上の方です……」

ジタン「隙間さんが取ってやれよ」ニヤニヤ

隙間さん「え／＼／＼私ですか？」

バツツ「てんめえ!!また余計な事を！」

ジタン「そうは言ってもお前あんまり嫌そうに見えねえなあ……。もしかして期待して
んのか？」

いたずらっぽく更にジタンが問い詰める

バッツ「ぼつ…き、期待なんかしてねえよ!!これっぽっちも!!」

ジタン「ふくん…。でも、あつちはノリ気みたいだぜ？」

バッツ「あつち？」

隙間さん「バ、バッツさん／＼動かないで下さいね?／＼」

バッツ「お、おう…(ま、まあ考えればティツシユかなんかで口の周り拭いてもらうだけじゃねえか…別にどうって事…)」

ペロツ

バッツ「へ!？」

隙間さん「ど…どうしましたか?あ…:やつぱり…イヤでしたか…」シユン…

バッツ「いや、そんな事はないけどよお…ま、まさか口でするとは…」

隙間さん「い、言わないでください…:すつごい恥ずかしかつたんですから…:…」

バッツ「す、すまん」

ジタン「これを眺めてるだけで軽くカレー三杯はいけますなww」

シヤントット先生の研究所へ

ヒュンツ

エクステス先生「クラウド君を無事送り返してきましたぞ」

学校の生物の先生でもあるエクステス先生は次元の狭間、空間を行き来できる。いつもはとろくてデカブツででくの棒であるエクステス先生も本気を出せば軽く大陸一つを相手にしても勝つのは容易である。

シヤントット先生「そんな事いちいち報告しに來ないで下さいまし。そんな事でいちいち研究の邪魔をされるのが、一番気に障るんですわよ？」

エクステス先生「す、すみません……」

シヤントット先生「まあ、こつちも研究が行き詰っていますし……少し休憩しますからね」

エクステス先生「では、私とその間部屋の整理を……」

シヤントット先生「レディの部屋に気安く入らないでほしいですわ。というか、それぐらい私もできますので」

エクスデス先生「はあ……では私はこれで」

シャントット先生「御待ちなさいな」

エクスデス先生「まだ何か？」

シャントット先生「あらあら、そんなに身構えないで下さいな。わざわざこちらに出向いてくれましたんですし、少し紅茶でもいかががでして？」

エクスデス先生「良いんですか？」

シャントット先生「これも淑女のたしなみですわ」

こうやって、DDFF学園の他愛も無い一日は過ぎて行つた…

つづく

第四十四話 「もうお婿に行けない……」

前回からの続き

↳教室 五時限目 英語↳

ミンミンミンミー……

今、日本が冬であろうが春であろうが、DDFF学園は猛烈な夏である

クラウド「…殺人光線、だな……溶ける…」

バツツ「へ、甘いぜクラウド…オレはもう溶けてるぜ……」

クラウド「窓際で頑張っているオレを見習え…カーテン越しでこの暑さ……」

隙間さん「あともう少しで授業終わりますから……頑張りましたよ……?」

ジタン「なあ先生、なんでうちの学校にはエアコンが無いんだ……?」

皇帝先生「こんなボロ学校にむしろエアコンなんていうものがある方があり得ないだろう?。ちなみに言えば職員室にはある。最新式のが」

ティファ「なにそれひでえ……」

ミンミンミンミー……

スコール「せみは元気だな……オレにはとてもマネできない……
クラウド「まああいつらはわずか一週間の命だからな。その短い一生を精一杯楽しもうとしているんだろう」

スコール「なるほど……深いな」

バツツ「そういえばさ、この学校って水泳の授業が無いよな？」

wor「ああ、もともと収入も少ないしこの建物自体のローンみたいなものも築60年となった今だに払えていないからな。プールなんてものとてもじゃないが作れなかつたんだろう……」

オニオンナイト「でも、こんな暑い日にはプールに入りたいよね」

バンッ

ティファ「よっし!!今日の放課後は皆でプールにしよう!!」↑※授業中

ユウナ「ティ、ティファさん今授業中……」

ティファ「そう考えたらテンションあがってきたああああ!!!」

皇帝先生「授業中ぐらい静かにできんのか!!」

スパァン!!

間髪いれずにティファの眉間に一寸の狂いなくチョークが飛ぶ

ユウナ「でも、いいですね。水遊び」

ティファ「でしょでしょ!? 涼しめて楽しめて一石二鳥!!」

ティファ「男子達もそれで良いよね？」

ティーダ「自分、水泳は得意っスよ!!」

バツツ「ああ、良いね！オレは賛成だぜ」

フリオ「ライトの水着姿………ああ、やろう」

ティファ「クラウド達は？」

クラウド&スコール「「あ、ああ………もちのろんだぜ（棒読み）」

ティナ「大丈夫だよ、二人とも。人間泳げなくても生きていけるから」

ティファ「ええ!? クラウド、カナヅチなの!？」

クラウド&スコール「ああー……!!」

皇帝先生「静かにする事ぐらいできんのか!？」

スパアン×2

く教室 放課後く

ティファ「…てな訳で、今日は女子寮の倉庫にあったプールで屋上で遊ぶから準備終わったら呼ぶから隙間さん達はここで待っててね？」

隙間さん「え…いえ…手伝える事があるなら私も手伝います…」

ティファ「大丈夫、大丈夫。私達だけでなんとかなるからさ」

ユウナ「ところで、あそこで意気消沈している人はどうしますか？」

ティファ「高校生にもなってカナツチとかホントありえないわよね」

クラウド「うるせえよ……」

スコール「カナツチがどうした!?!そんなもの気合とその場で克服してくれるわ!!」↑
ヤケクソ

ティファ「はいはい、せいぜい頑張つて」

ヴァン「つか屋上でやるつつつてもさ、水はどうするんだよ？」

ティナ「私がフラッド使えるから…心配いらない」

ティファ「じゃ、男子達は非力で使えないからここで待機ね」

バツツ「悪かったな…非力で使えなくて」

—十分後—

ライトニング「おっいお前ら、準備できたぞー」

セシル「プール一つに随分と時間かかったね？」

ライトニング「出すのは簡単だったんだが、水入れるのにかなり時間がかかってしまつてな」

ヴァン「まあ10分ちよいで出来上がるぐらいなんだからそんなに大したもんじゃねえだろ？」

オニオンナイト「多分交代で入る事になるんじゃないかな？」

バツツ「かもな…と、そんな事より、早く行こうぜ？」

ゝ屋上 放課後ゝ

ジタン「なんだ、こりや……」

そこにあつたのは、タテヨコ軽く10メートルを超える巨大なプールだった

ジタン「おまえらこんなバカでかいのどつから持って来たんだよ!!」

ティファ「だーかーらー! 女子寮の倉庫にあつたっていつてんでしょ!!」

クラウド「いや待て、こんな大きいのもまずドアで詰まるだろ…。どうやって入れたんだ?」

ティナ「色々とめんどくさかったから『テレポ』でさつさと転送したの…」

ウォー「というかよくこんなもの寮の倉庫なんかにあつたな……」

ユウナ「いや、私も見つけた時はビックリしましたよ」

ティファ「あ、そうそう私達これから着替えるから。あんた達も今のうちに着替えちまいなさいよ」

そういつてティファは屋上の柵にビニルロープをくくり、その上にブルーシートを被せて、仕切りを作った

ティファ「言つとくけど、前みたいに覗いたりしたらブチ殺しだけじゃ済まないからね？」

フリオ「オレそんな事した覚えはないぞ？」

ライトニング「した事あるバカ共がいるんだよ……（↑修学旅行編参照）」チラツ
フリオ「ふくん……まあ大体予想は付いているが……」

バツツ「そこで迷い無くオレ達を見るなよ……まあ当たってるが」

ティファ「あんたらちやつちやと脱いでちやつちやと着替えられるでしょ？だからこのボールとか膨らましといてくんない？」

クラウド「まあそのぐらいなら……」

ティファ「いや、私もやったんだけどね？何かすぐに破けちやつてさー。不良品なのかなー？」

そう言つてティファは無残に木端微塵になつた哀れな浮き輪を取りだした

クラウド「そんなもん見せんな…」

ティファ「何か見せびらかしたくなつちやつて」

クラウド「そう言うのは後でギネスにでも送つておけ」

ティファ「あんたバカじゃないの？」

クラウド「バカにバカと言われたくない!!」

ティファ「こんなんでギネスにのる訳ないじゃない。もつとこう…：…なんかもつとバカでかい事をした人が載るのよ、ああいうのには！」

クラウド「分かつた、分かつた。そんな事より速く着替えてこい」

ティファ「クラウド、覗いたらダメだかんね？」

クラウド「誰がお前の事なんか…」

ティファ「もー、クラウドも素直じゃないんだからー!!」

クラウド「うるさい、早く行け」

バツツ「にしても……ここまで嚴重に隠す必要があるか？」

今男子達と女子達を隔てているのは、柵から柵にかけてでかかど貼られた『立ち入り禁止』のシール、軽く2メートルを超える大きなブルーシートの壁である。

ジタン「オレ達、そんなに信用ならねえか？」

セシル「少なくとも、君とバツツの事は微塵も信用していないと思うよ？」

バツツ「つたく……良いじゃねえかあんぐらい……ちよつとした出来心じゃねえか」

セシル「女の子は繊細なんだよ、きつと」

ジタン「……にしても、ホント女つて着替えんの遅えよなあ……男だったら三十秒ちよいですぐ着替えられんに……」

セシル「女の子は繊細なんだよ、きつと」

ヴァン「セシル、さつきから同じ事言つて無いか？」

セシル「ハハ……」

w o r 「まあ良い、さつきティファ達が言つた様にほら、ビーチボールだ。あいつらが着替えてる間にさつきと膨らまし終えてしまうぞ」

スコール「そうだな」

『こうやって見ると、やっぱりティファさん胸大きいですねー』

男子全員「!!」ピクッ

『ははは、そんな事ないって〜!!っていうかユウナもだいぶ成長してんじやないの
〜?どれどれ…』

『ひやあ!? ティ、ティファさん!?! そつ…そこは……ひやうう!!』

『私はどつちも十分成長していると思うがな。まあ私には及ばないが』

『チツ……勝ち誇りやがって……その無駄な空気抵抗を全部やすりの鬼目の部分
でそぎ落としてやろうか…』

『ティナさんはまだ良いですよ……もう私死んでますからもうこのまま一生大き
くなりませんよ……』

『ほうほう? じゃあこのティファさんが揉んであげようかあ?』ワキワキ

『ひ、ひやあ／＼／＼、そんな激し…あふつ…』

『やめんかー!!』

スパーン

ティファ 「いや／＼男子達！お待たせ／＼!!」

ユウナ 「あら、隙間さん帽子持ってきてたんですか？」

隙間さん 「紫外線は女子の大敵……」

ティナ 「玉ねぎ君、おまたせ…?」

ライトニング 「なんでお前から全員もうすでにプールに入ってるんだ？」

男子全員 「暑いから（頼む!!来ないでくれええ!!）」

ティナ 「ティファ、ライト、きつと男の子の事情なんだよ…」 ニマア

オニオンナイト （ティナさんんんん!!!?!?)

ティファ 「なんでもいいけど…あんたらまだ準備体操してないでしょ？」 バシヤツ
クラウド 「え？あ、ああ大丈夫だ、問題無い（や、やばいこつち来た！何とかしない

と!!」

ティファ「だめだめ、何かあったら大変だよ、ね?クラウドくく?」↑クラウドの下半身ガン見

クラウド(ティファ、てめえええ!!)

ユウナ「ほら、ティーダも!!もお、世話が焼けるんだから／／」ガシッ

ティナ「玉ねぎ君も、一緒に組体操しよ?」ガシッ

スコール「ちよっ…まつ…オレ達はホントに良いから…!!(マズイ!!今立ち上がったから確実に見られる!!いやもう勃ち上がってんだけどねwwってそんな事言ってる場合じゃ…)

ティファ「おらあ者共!!男どもをプールから引きずり出せえ!!」

女子勢「ラジャー!!」隙間さん「ラ、ラジャー…?」

男子全員「あああああああ!!」

「もうお婿に行けない…」

つづく

第四十五話 テイナ「プールから上がったら殺す…」ボソツ

前回からのつづき

クラウド「全く、男子のすっぱんぽんなんか見て誰が得するってんだ…」

テイナ「絶賛私 が得してる……この記憶をもう少し脳内にとどめておきたい…」ボタボタ

オニオンナイト「テイ、テイナ……ほら鼻血拭いて……」

テイナ「こつ……これは玉ねぎ君のティツシュ……! ずつと玉ねぎ君のズボンのポケットに入って玉ねぎ君のにおいが染み付いた……玉ねぎ君の……」ブパアツ

オニオンナイト「うわああつ!?! テイナが更に悪化した!!」

ユウナ「テイナさんは私がおかしますから、みなさんはもう楽しんでやってください。……ほら、テイナ、行きますよ?」

テイナ「う……ん……」ズルズル……

ティファ「さてと、気を取り直してまあ各自思う存分遊んじやって？話は以上!!」

バツツ「おう!! ようし!!! 大物釣りあげてやるぜえ!!」

セシル「プールに魚はいないよ…」

バツツ「何言ってるんだよ。ふつうに泳いでるぞ?」

セシル「え!?!」

実際に、今プールにはかなりの魚が泳いでいた

セシル「え!?! なんて!?! ここプールなのに!?! …っていうかこのプールの水どこから引つ張ってきたの?」

ティナ「私の『フラッド』の水だよ?」

w o r 「確かティナの『フラッド』はシャントット先生程魔力が無いからどこかから水を『テレポ』で転送しているんだったか?」

ティナ「ちなみに私はおそらく無くならないであろうから海水を転送してるよ?」

ティエダ「あ、なるほど…だから魚もいるしこんなにしよっぱかったつスカ…」

ユウナ「プールの水飲んだらおなか壊すよ…」

ティファ「大丈夫よ! バカはなんとか、っていうじやない!!」

ティエダ「ティ、ティファには言われたくないっス…」

クラウド「サメは……いないな…良かった」

ライトニング「いたってティファがどうにかしてるだろ？」

クラウド「まあな…」

ティファ「その時はクラウドに助けてもらっちゃうんだから!!」

クラウド「ハハ…何があってもお守りしますよ、姫君、…こんな感じか？」

ヴァン「うお……クラウド大胆…」

クラウド「ただの冗談だつての…本気にすんなつて」

バツツ「なあティナ、釣竿使うか？」

ティナ「え？人数分持つて来たの…？」

バツツ「ん…金かかるから全部オレの手作りだよ割りばしとタコ糸で作ったんだ

!!自信作だぜ？」

ティナ「なんかすぐ壊れそう……まあ私泳がないしちよつと貸してもらおうかな？」

w o i 「私にも貸してもらおうか」

セシル「あ、僕も」

クラウド「んじやオレたちはあつちの方で泳いだりいろいろしているから絶対こつち側で釣りすんなよ？」

ジタン「わかってるって！…オレたちもそこまでバカじゃねえって!!」

フリオ「バカもここまでくるとむしろ微笑ましいね…」

ライトニング「そうね…」

ジタン「そこ！うるさいぞ!!」

—二十分後—

ヴァン「んくく…全然引つかからないなあ…」

ティーダ「エサがかきのたねなのが悪いんじゃないスか？」

ヴァン「そんな事言っちゃってさつきフリオが釣ってたじゃん」

ティーダ「バツツがな……」

ジタン「『なんか自然に体が動いちゃってさww!!気が付いたら釣り上げられてたぜ！』…とか言ってたよ…」

ジタン「なあライトー!!お前釣り得意か？」

ライトニング「教室でその人の悪行をネタに吊り上げるのなら得意だが？」

ジタン「なんかすみませんでした……」

ライトニング「?……よくわからんが私は隙間さんのところに行ってくるから、何か言っておいた方が良いか？」

ジタン「んじゃあさ、バツツが呼んでたつて伝えといてくれよ」コソコソ

バツツ「おっい!!ジタン!!オレちよつとあつちに場所変えてくるわー!!」

ジタン「わかつた〜!!……んじゃあ頼んだぞライト!!……ちなみに今隙間さん何してる?」

ライトニング「あいつなら今カニと戯れてたぞ?」

——その頃の隙間さん——

隙間さん「カニさん、カニさん♪どうして横にしか歩けないの?」

カニ「……」ブクブク

ジタン「なんと微笑ましい……んじゃ、任せたぞ?」

ライトニング「ああ、分かった」

ジタン 「あ？バツツ帰ってくんの早いな？どうした？」

バツツ 「釣り糸絡まってwōに怒られた〜」

ジタン 「あ〜…もうあっち行くな」

バツツ 「分かった…あ、でもさつきwōにエサ貰ってきたんだ!!」

ジタン 「おおでかした!!……かきのたねか…」

バツツ 「それしか無いんだとよ…」

ジタン 「こんなんで魚が釣れるかよ…単細胞生物ぐらいしか釣れねえよ…」

バツツ 「アメーバとか？」

ジタン 「お前だよ…」

ヴァン 「全然釣れねえ…お？」

ヴァンの釣竿には、わずかながら糸を引く反応が

ヴァン 「よっしやああ!!釣れたああ!!」グイッ

ティナ 「きやああああ!!」ドボン

ティーダ 「ん？何かティナがプールに落ちたつすよ？」

ヴァン 「ん？ほんとだ。アハハ、ティナもバカだなあ…」

ティナ「……」ブクブク

ヴァン「ほら、この釣竿つかまれよ…以外とティナも抜けてるとこあるんだな」

ティナ「…！」プチン

ヴァン「よし、じゃあひきあげるぞ」

ティナ「プールから上がったら殺す…」ボソツ

ヴァン「ひっ!? キヤツチアンドリリース!!!」バツ

さつきまで持っていた釣竿ごとを離す。そしてティナもまたプールへ

ティナ「うわっ…」

ボチャーン

ティナ「……」バシツ×∞

ヴァン「いだだだだだ!!? しなりが効いて死ぬほど痛いいい!!」

ティーダ「ヴァンがティナに無言でしばかれてる…」

ティナ「もうこのぐらいで良いかな？」

ヴァン「」

ティーダ「ヴァン、ご冥福をお祈りします…」

ティナ「終わったらちやんよ『レイズ』で生き返らせるから、それまで待つててね？」
ティンダ「お、おうっス……良かったな、ヴァン？」
ヴァン「」

くプール 泳ぎ側く

クラウド「あつちはあつちで楽しそうだな…」

スコール「いや、ふつうに死人出ている時点で楽しいもクソも無いだろ…」

ティファ「……」

ユウナ「どうしたんですか？ティファさん？」

ティファ「い、いや…なんでもないわよ…」

クラウド「さっきまでバカみたいにはしゃいでたのにどうしたんだよ？もしかして腹でも壊したか？」

ティファ「ちっ…違うわよ!!」

クラウド「じゃあさっきからなんで俺等のところからどんどん離れてつてんだよ？

………はっ…！もしかしてもう腹下してでちまつt…」

ティファ「それ以上言うな!! っていうかさっきも言ったけど違うつての!!!」

スコール「じゃあどうしたんだ？」

ティファ「うう…（言えない…調子に乗ってはしゃいでたら水着どつかに流されたなんて…恥ずかしくてとてもじゃ無いけど言えないよお…あ、でもクラウドに話したら一緒に探してくれるかも…でもなんて言えば良いの？…うくん…）」

クラウド「おい、さつきから顔も赤いけど…本当に大丈夫か？」バシヤバシヤ

ティファ「ちよっ／＼／こつち来んじやにゃいわよ！変態!!」バシヤツ

とりあえず手当り次第に近くの水をかける。だがティファの怪力によつて発生した水しぶきは大きくその場の水を切り裂いた

クラウド「危なっ!!」

間一髪で辛うじてよけるクラウド

ティファ「あつごめん!!生きてる？」

クラウド「ああ、なんとか…もうお前といると吸血鬼やら化け物なんかに普通に対応できそうな気がするよ…」

ティファ「それほめてんの？それともけなしてる？」

クラウド「両方だ」

ティファ「もう!!」

ジタン「さ、最近の魚はか、変わった形をしているなあ（あれ、これどつかで見たことあるような…）」

???「ちよつとー！ー！あんだ達ー！ー！！それさつさとかえせやああ！！」
バツツ「え！？この声は…：ティファア！？」

クラウド「つてことは今のティファは上はすっぽんp…」
ティファ「それ以上言ったらたとえクラウドでも殺す…」
クラウド「つと…：すまない…」

くくくくく

バツツ「ほいティファ」

釣竿に引つかかったまんまのそれをティファに手渡す

ティファ「もう…：見つからなかったらどうしようかと思つたわよ！！」

ジタン「すっぽんぽんでおよげb…：ふべらっ！？」

バツツ「ジタンがいきなり吹っ飛んだ！？」

ティファ「ただの気弾よ。すぐに良くなるわ」
バツツ「気弾とか……ドラオンボールかよ……」

―下校終了時刻近く―

ティファ「じゃあそろそろ寒くなってきたしずらかるとしますか!!」

バツツ「結局一匹も釣れなかった……」

ジタン「まあかきのたねが手に入っただけ大きな収穫だよ……」

バツツ「ハア……隙間さんに泣いて謝るか……」

???「バツツさーん!!」

バツツ「お?」

隙間さん「ハア……ハア……すみません……呼んでくださっていたのに気付かなくて……」

!

バツツ「は?オレ呼んだ覚えなんかないぞ……」

ジタン「良いって良いって!!……それよりなんでこんなに時間かかってたんだ?プール

にも入ってないし…」

隙間さん「はい…！あの…私、仮にも居候？…じゃないですか…で、ですから…少しでも役に立とうと思つて…一杯食べれそうなものを…集めてきたんです!!」

バツツ&ジタン「!？」

バツツ「隙間さん…」

隙間さん「やつぱり…迷惑でしたか？」

バツツ「むしろその逆だよ!!本っ当にありがとう!!」ギョッフ

隙間さん「はわあ!?!…い、いえ…どういたしまして…です（手…手を握られちゃいましたあ／＼）」

ジタン「じゃあ新鮮なうちにさっさと食っちゃまおうぜ!!」

バツツ「そうだな!!」

くそして 夜 男子寮 バツツ&ジタン&隙間さんの部屋く

バツツ「隙間さん……」

隙間さん「っは！はい……！」

バツツ「ヒトデは食えないよ……」

プール編 おわり

第四十六話 ティファ 「スキ、キライ、スキ、キライ…」

前回からのつづき

くお昼休み近くの DDF 学園く

ティファ 「スキ、キライ、スキ、キライ、スキ…」 プチツプチツ

クラウド 「おいジタン！お前前貸した物理の参考書、貸してから今だに帰ってきてないぞ!!」

ジタン 「あああれね？あれ前小遣い足りなかったから質に入れちゃったわ☆」

クラウド 「おいしいいい!!参考書テスト明後日なんだが!」

ジタン 「んなもん気にする事あねえって!!」

クラウド 「うるさい！こうなったらお前の今の所持金から新しい参考書買う分の金額もらうぞ!!」

ジタン 「へっへっ！そうはいくかっての！…おいバツツ、逃げるぞ!!」

バツツ 「は？オレも？」

ジタン 「当たり前だろ？さ、行くぞ!!」 ぐいつ

バツツ「お、おい！そんなに引っ張んなって！」ダツ

クラウド「おらー！待てやコラー！そして金払えー！」ダツ

隙間さん「バツツさーん……ジタンさーん……お昼ご飯には戻ってきてくださいね〜

…」ヒラヒラ

ティファ「スキ…キライ…スキ…キラ…」プチツ

ティファ「……………チツ」

ティファ「スキ…キライ…スキ…キライ…」

クラウド「ジタンの奴、机の上に財布忘れてるじゃないか……。ホントにあいつバカか？…中身は、と……………うわ、250円と子供銀行の小汚いお札がいっぱい……………見てるこっちの胸が痛くなる……………まあ取るのはやめておくか…オレのせいでやつらの生活費を奪うのは少し気が引ける…」

セシル「ああクラウド、さつきジタンたちが職員室前で廊下走ってたのつかまつてたから行くなら今だと思うよ？」

クラウド「セシル、教えてくれたのはありがたいが、もう良いんだ。すまない」
セシル「あれ？もう仲直りしたのかい？」

クラウド「いや…まあ色々心の問題だよ…」

セシル「？ならいいけど…」

ティファ「スキ…キライ…スキ…」 ↑最後にキライの花びら

ティファ「クラウドこの野郎!!!!」

クラウド「ええ!?ティファ、オレなんかしたか？」

ティファ「あ、クラウド、ご、ごめん。なんでもないよ…」

ティファ（危ない危ない…うっかり声に出ちゃってたよ…今度からはもっと大人しく…）

ティファ「へ☆」へ☆」ジ…

ティファ「きやつはああ!?!」

ティナ「ティファちゃんがかさつきしてたの…花占い、だよな？」

ティファ「は、花占い!?何それ?こ、これは内職だよ!!」

ティナ「仮に内職だしたら花びらちぎるのが内職なの?…」

ティファ「い、いや…えつと…うー、なんていうかさ…最近ライトがさ…」

ティナ「ライトニングが?」

〜最近のライトニング〜

ライトニング「フリオは私の事がー…」

ライトニング「スキ…キライ…スキ…キライ……………スキ!!!」

ライトニング「キャハアアア／／／／!!好きだつてもおおおお!!」バシバ

シ

ティファ「うん、うん……良かったね……てか地味に痛い……」

ティファ「…てなつてき…」

ティナ「最初に始めたのライトだったんだ〜」

ティファ「そつそれでね!! 私も誰でも良いからやってみようかな〜、なんて思っ
ね…試しにクラウドでやってみただけど…:…:」

ティファ「…五回中五回とも、キライつてなって…:…:なぜだかものすつごくムカッ
いてね…:…」ゴゴゴゴゴ:

ティナ「ティファちゃん、殺気もれてる♪」

ティナ「…:…?というかティファちゃん、もしかして花占いスキから始めてる?」

ティファ「え?えーと…:うん。たぶん」

ティナ「だからだよ、さつきからティファちゃんが使ってる花びらつて6枚だから。
スキで始めるとキライで終わっちゃうんだよ、これならキライから…:」

ティファ「でもさ…:なんか枚数を計算してから占うっていうのもなんか…:ねえ?」

ティナ「あ、じゃあこれ使う?」

ティナ「これなら花びらが多くて占いのし甲斐があると思うよ☆」

【大輪の菊の花】

ティファ（ティナ!?)

〜そして時間は 昼休み〜

ティファ「それじゃ、私食堂行ってくるからー」

クラウド「ああ、分かった……あ、そうだジタンの今日の昼飯いるか?」

ジタン「させねえよ!」

ティファ「ひでえ……」

〜DDFF学園 中庭〜

ティファ「……………」てくてく

ティファ「……………」キョロキョロ

ティファ（ティナからもらった菊……持つてるとかさばるし……今なら都合よく誰も
いないし……）

ティファ「スキ……キライ……スキ……」プチプチ

ティファ（う、占いを鵜呑みにする訳じゃないけどさ、…一方的にキライって出るとなんか腹立つんだよね……でもつても別にクラウドの事とかは全然意識したりとかしてないんだからね!!）

ティファ「スキ……キライ……スキ……キライ（いや余計な事は考えずに花に集中して……）」プチプチ

ティファ（………今晚の夕食どうしよう……）

ティファ（確か冷蔵庫の中に豚のロース肉があったな……）

ティファ（豚ロースか……豚汁……生姜焼き……汁物は豆腐の味噌汁にして……豚ロースは生姜焼きにして……じゃあ豆腐買ってこなきゃ……よし、今夜は生姜焼きだ）

ティファ「というか……何で私夕飯のおかず占ってんだ……結構むしっちゃったよ……」

ティファ「ま、さっきのは無かったことにして……つーか無理に集中しちゃうと逆に変な雑念が……」

ティファ「くそっ…今度こそクラウドに勝ってみせる!!」↑占いの趣旨が変わってきてる

ティファ「スキ、キライ、スキ、キライ、スキ、キライ（後もう少し…）」

ティファ「sk…」

クラウド「……」

ティファ「……」

クラウド「……」

ティファ「…／／／」

ティファ「っく、クラウド!?いつからそこに?」

クラウド「晩飯は生姜焼きの頃から」

ティファ「マジっスか…」

クラウド「もうそろそろ休憩終わりそうなのに帰ってこないからさ…搜索しに来たん

だけどき……」

ティファ「あ、そうなんだ……」

クラウド「ほら、そろそろ帰るぞ……みんなも心配してるぞ、たぶん」

ティファ「たぶんで……」ビキッ

ティファ「あ、私まだご飯食べてない……」

クラウド「お前ホントに今まで何してたんだよ……」

ティファ「急いで食べてくるからクラウドは先に帰ってて!!（占いまだ終わってないし!!）」ソワソワ

クラウド「あ、ああわかった……（といひかなんでこいつさつきから花ちぎっているんだ?）」

クラウド「なあティファ、お前もしかして……」

ティファ「え!?!（あ、バレタ……）」

クラウド「食える草でも探してたのか?」

ティファ「そ、そう／＼……じゃなくて、はあ?」

クラウド「ならあつちにスズナとかがあつたぞ?」

ティファ「そ、そうじゃなくて……ふっ」
クラウド「ん？どうしたんだ？」

ティファ「いや、なんでもない！」ニコッ
ティファ（今はこの距離感でも良い……でも、いつかはきつと…）

ちよつと短編、花占い編 終わり